

655-141



1200501571263

55
41

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

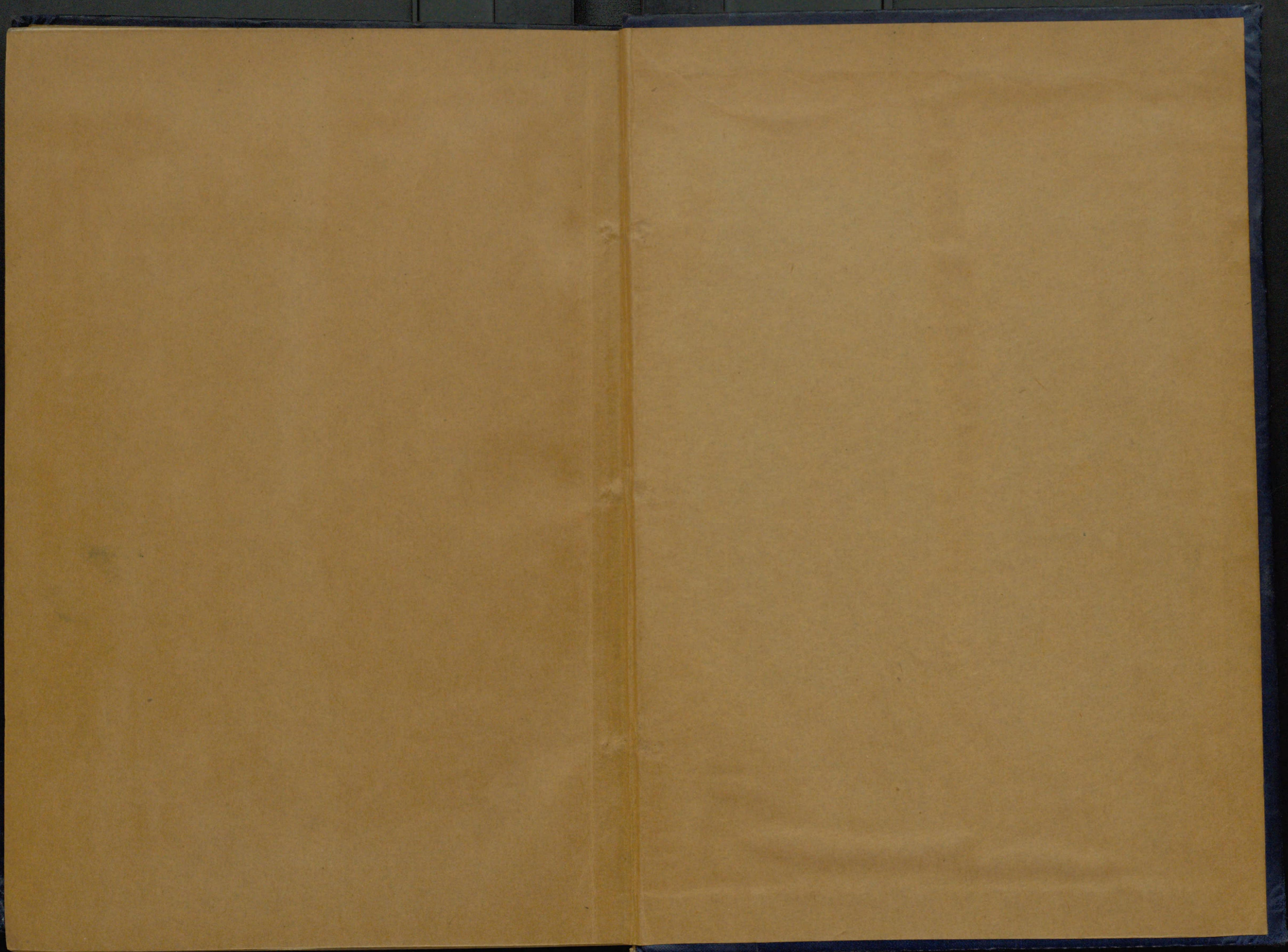


Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

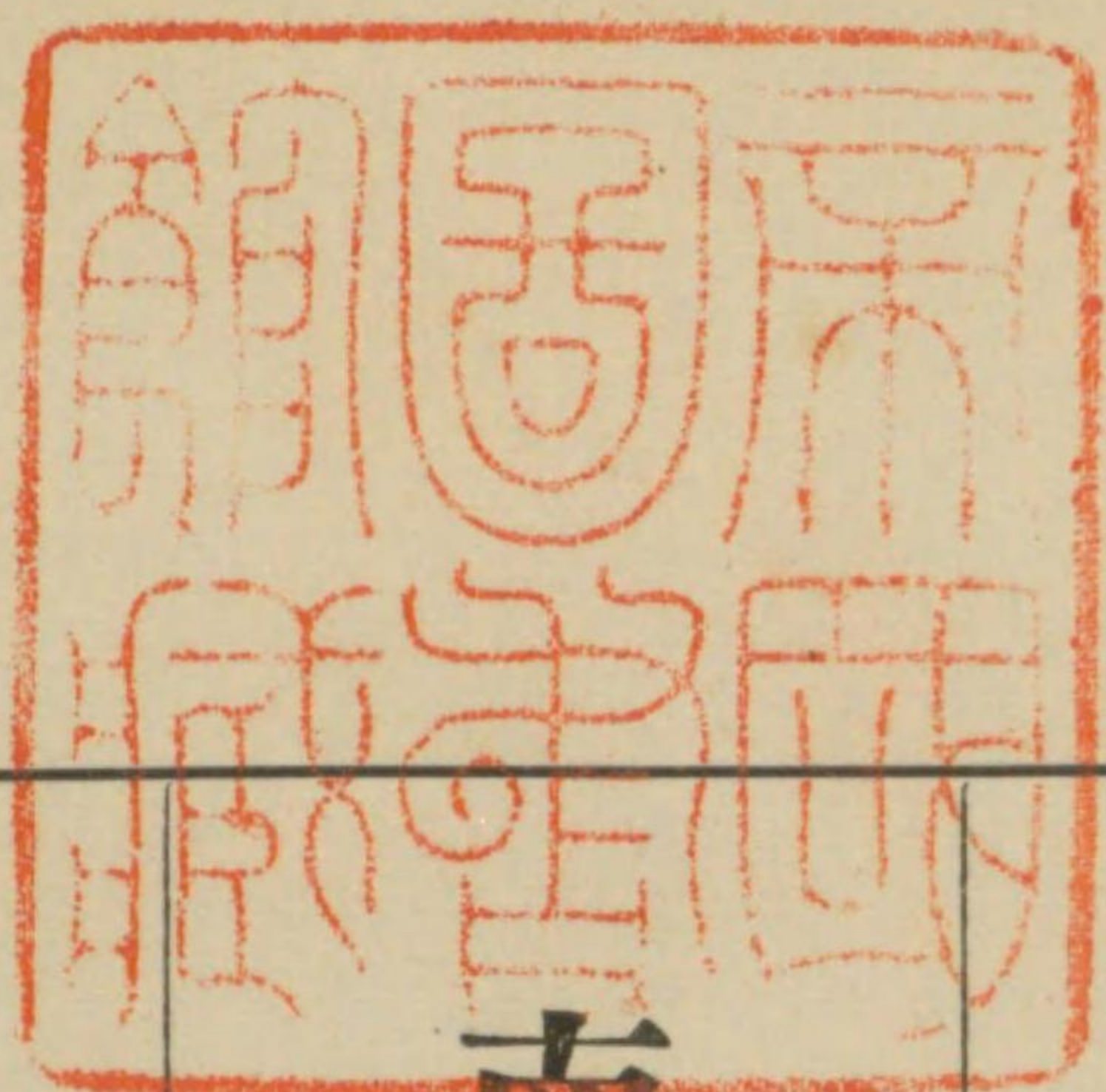
Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak





418



伊波普猷著

南島方言史攷

樂浪書院



685-14/111

自序に代へて

琉球語は南島語ともいふ。古の所謂南島、即ち琉球諸島並に奄美大島諸島の住民の間に行はれる言語であつて、琉球語として日本語と對立するものとして取扱はれて來たのであるが、日本語と同系統のものであること明かであるから、近來日本語中の方言として取扱はれることが多くなつた。しかし日本語の方言としても、日本本土の言語と對立すべき大方言である。

琉球語内の方言的差異は甚だ大きい。大別して、沖縄・宮古・八重山・大島・徳之島・鬼界・沖之永良部の七方言とする。これ等の中に更に多くの方言に分れる。標準語と見るべきは首里の言語である。古くは、外國に對するものは漢文を用ゐたが、國內では公式の文書にも琉球文を用ゐた。然るに慶長年間に島津氏に征服されてから、日文(公式には候文)を多く用ゐるやうになり、一方、支那との交渉もあつたので、漢文も依然として用ゐられたが、琉球文の方は「おたかべの詞」「御拜つづ」(『日本文學講座 中琉球文學參照』等の形式的なものを綴る以外には用ゐられなくなつてしまつた。そして漢文は古くは音讀したのであるが、慶長以後、日本から渡琉した五山の僧侶が文教に勢力を得るに及んで、専ら日本式に訓讀するやうになつた。明治以後は、日本語が普及した結果、文語はこれを用ゐる。

音韻組織は、國語のと大同小異である。普通用ゐられる母音は a i u の三つであるが、鼻音の前に限つて、*o e* があらはれる。長母音には *â i û ê ô* があるが、首里語では *ô û* の鼻音化することがある。母音が語頭に
ある時は、獨逸語などに於けるやうに、喉頭破音 (glottal stop) を伴ふ。古くは國語と同じく、*a i u e o* の
五母音があつたのだが、*e* は *i* に、*o* は *u* に變化して、本來の *i u* と合併して了つた。*ê ô* は二重母音 *ai au* の
變化したものである。宮古・八重山・大島・徳之島には、三母音のほか、*i* (*i* と *u* との中間音) があり、宮古・徳
之島には *û* (支那語の自子等の母音や東京語の *ts dz* の下に附く變的 *ウ* と同じもの) があり、大島・徳之島には *ê* (*e* と *o*
との中間音) がある。宮古・八重山の *i* は本來の *i* の轉じたものであり (*i* は本來の *e* の轉じたもの)、大島・徳之島
の *i* は本來の *e* の轉じたものである。又宮古・徳之島の *û* は *o* の轉化したものであり、大島・徳之島の *ê* (前即ち
mê 等に現はる) は二重母音 *ai* の轉化したものである。子音の種類は日本語と大體同じく、*p t k s ʃ tʃ ts b d g*
z ʒ dz m n p ɣ w r j f h 等があるが、その他喉頭破音を伴ふ *j w m n ɣ p p* がある。鬼界では *j w* の鼻音
化する事があり、沖永良部では喉頭破音を伴ふ *ju* であつて鼻音化するものがある。那覇・國頭郡北部地方及び
鬼界には、*k t p tʃ* の無氣音があり、大島・徳之島には *k t* の無氣音がある。宮古には齒唇音の *f v* があり、
r の外にロシヤ語の *ʀ* にほほ似た一種の側音がある(語中にある時、屢々 *r* が *ʀ* に變ずる。ʀ は語頭に現れる場合は至
つて稀れで、飯の變化した *ʀ* 以外には見出しかねる)。宮古島の周囲の小島には、*r* の外に側音 *ɾ* がある。音節の構
成法はほぼ日本語と同様で、音節の多くは、一の母音、又は一の子音と一の母音とから成立つてゐるが、一
の子音のみで一音節をなすものも多少ある。しかし日本語に比して二三特異な點がある。即ち子音と母音との結

び付き方は、一般に日本語よりも自由である(琉球語では *ts ism* と共に *ro to* があるが、日本語は *ts o m e* のみである)。
但しは與那國島及び鬼界島の方言を除いては、母音と結び付いて音節を構成する事はない。又母音 *i* に結び付
く子音には、他の母音 *a u* にも結び付く子音の外に、その口蓋化(又は濕音化)したものがあつた。即ち *ki gi si* 等に
對して *hi ō i si* 等がある。かうして *i* 列音に結び付く子音に二種の區別があるのは、母音が三つだけしかない鬼
界・沖永良部でも同様で、鬼界では *i* 列の外に *u* 列に於ても同様な區別があつて、こゝでは普通の子音とその
無氣音化(或は口蓋化)したものとで區別されてゐる。併し四母音を區別する宮古・八重山及び大島にはこの現象
はなく、たゞ徳之島では *u* 列音に於ては普通の子音とその無氣音化したものがあつて五列を區別してゐる。即
ちこの口蓋化又は無氣音化の有無は、*e o* から轉じた *i u* と元からの *i u* との區別に相當するものやうであ
る。

語詞に於ける音韻の特徴としては、(イ)長母音が用ゐられること多く、(ロ)外來語を除いては、大體に於て
r が語頭に來ることが稀なのは、日本語と同一だが、濁音が語頭に來ることが少なくない (Gaii 蟹、Gairasi 島、
Gasa 蝦)。)(ハ)語頭に於て、*m* が *m p b* の前に、*n* が *n d tʃ* の前に、*ɳ* が *ɳ k* の前に來ることがある (mnu
芋、mpana 御鼻、mbasaj 重、nna 皆、ndi 助詞の、nū 見、nguking 動、pkaji 助詞の)。)(ニ)語尾は母音
かり又は *n* で終る。語のアクセントは日本語と同様、音の高低即ち調子による。

語法は、主なる點では、日本語のそれとほほ同一である。形容詞の活用には二種類あつて、丁度日本語のク
活シク活の兩類と對應する。但、國頭郡與那嶺地方等では區別がない。そして形容詞の終止形は、形容詞の語

幹にsa或はsaを附したものに²有(有)がついて出来た形である(明初支那に通じた蔡度王を諷つたオモロには、「露か
らどかばしゃある」と見えてゐる。戯曲にもこの古形が使はれてゐるが、國頭の方言中にも、さうなつてゐる所がある。八
重山方言では³といふ形になつてゐる)。形容詞のこの兩類の例を擧げて見ると、wasan(悪^わし、副詞形 wanu)
jutasan(善し、副詞形 jutaku)のやうなもので、多少の例外はあるが、sanであるか⁴であるかは、その副
詞形を見たら、大體は推定することが出来る。近頃 siku 形の副詞の ku 形に變化したのがいくつかあるが、
それに伴うて其の形容詞の ⁵形も、⁶形になつてゐる。動詞は、少數の例外を除いては、一樣の活用をな
す。例へば、「書く」といふ動詞は、未然形 kaka 連用形 kaku 終止形 kaku 連體形 kakuru 已然形及び命令形
kaki 又は kakó(い)の形は kaki ba 或は kaki wa の縮つたもので、文語及び或方言では、原形が保存されてゐる)といつ
たやうに、日本語の四段活用に似た活用をなし、動詞の多くはこれに屬する。たゞ例外となるのは ⁷(有)といつ
wun(居り)等であるが、それらも文語及び或方言では ⁸、⁹ 等の形になつてゐる。¹⁰(有) wun(居
り)以外の動詞の終止形は、連用形に ¹¹(居り)が結び付て出来た形であらうとの説があるが、これは kaku
(沖繩) kakuri(大島)等の場合は兎に角、kaku(八重山其他)等の場合には當てはまらないやうに思はれる。
音韻變化は別問題として、宮古・八重山及沖永良部の動詞活用も全然これと同一だが、大島・徳之島及び鬼界で
は多少異なる。即ち「書く」の終止形が kakuri 又は katsuji 連體形が kakujū 又は katsu となつてゐる。動詞
には助動詞をつけてその意味を補足する。例へば、打消には動詞の未然形に助動詞 ¹²をつけて表はし(ikau 行か
ぬ、kai 來ぬ)、完了の意を表はすには、動詞連體形に ¹³をつける(tuaj 取つた、¹⁴聞いた)。又助詞を用ゐ

て語法上の關係等を表はすが、助詞には ga(の) nu(の) ni(に) akaji(く) madi(た) ja(や) da(ぞ) gutu
(如く) kara(から) kutu(故) tu(と) 等がある。國語の「は」にあたる助詞が體言について、その語尾と融
合してしまふことがある。語尾が a の場合は a、i の場合は i、u の場合は o、y の場合は nō となる(jama 山→
jama, miyū 路→miyū, tabaku 煙草→tabako, tin 天→tinō)。そして語尾が長母音の場合には、ja を添へる(Finto 返答
→Finto ja)。琉球語には日本語の文語に似た係結の規則が行はれる。普通は終止形で終止するわけだが、tu が
ある場合は、連體形で終止する。また古くは ¹⁵(す) 又は ¹⁶(しよ) の助詞を受けては已然形で終止した。
琉球語の歴史を研究する資料としては、琉球人自身の記したものほかに、朝鮮・支那・西洋等の外國人が記
したものがあつたが、日本人のはあまり見えない。

(一)琉球人の記したものには、平假名で琉球文を寫したものが残つてゐる。金石文では、文龜元年(1501)の
「たまおどんのひのもん」を最古として、以後元和九年(1623)の「ようどれのひのもん」に至るまで七つばか
りが残つてゐる(『琉球國中碑文記』に所収。そのうち五つは現に石碑が残つてゐる)。又琉球文の古文書がある。殊に
首里市の田名家には、四百年この方の辭令書(しよりのおみこと)が保存されてゐる。以上は散文であるが、韻文
としては、古くは『おもろさうし』がある。今残つてゐる『おもろさうし』は、その第一巻は西暦一五三二
年に、第二巻は西暦一六一三年に、第三巻以下第二十二巻までは西暦一六二三年に結集されたものだが、十二
世紀の中葉から同十七世紀の中葉に至る五百年間のおもろ千五百五十三首を収めて居つて、中央のは素より各
地のおもろをも集めてゐるから、當時の中央語のみならず方言をも知ることが出来る。次いで西暦一七一一年に

編纂された辭書『混効驗集』がある。これは前代の古語を集め、その意味を和文で註したものである。日清戰爭頃に編纂された辭書に『南島八重垣』がある。これは琉球最後の國王尙泰の近侍であつた山内盛熹の所輯で未定稿であるが、そのうちには現今耳遠くなつてゐる語がかなり多い。その他くわいにや・琉歌・脚本等も或は筆録によつて、或は口傳によつて傳へられて居り、日本の祝詞にも比すべき「おたかべの詞」「御拜つづ」はおもしろ時代から行はれたものらしいが、今傳へられてゐるものは、當時の原形を失つてゐる（岩波講座「日本文學」『琉球文學』參照）

(一)朝鮮人の記したものは、申叔舟の著『海東諸國記』附載の「語音翻譯」があつて（その最後に弘治十四年1501の日附がある）、支那語で語句を擧げ、その下にこれに相當する琉球語を諺文で記してゐる。

(二)支那人の記したものは、多くは語彙を集めたものだが、明の茅伯符の所輯と稱する『華夷譯語』、明の周鐘等編の『音韻字海』、屠赤水等編の『篇海類編』、余象斗等編の『海篇正宗』、清の徐葆光の著『中山傳信錄』中の「琉球語」等がある。『華夷譯語』中の琉球語彙「琉球館譯語」が輯録された時期は明かでないが、相當古いらしい（日本館譯語を紹介す「序説參照」）。『音韻字海』の語彙は、閩の地で琉球の通事について調べたものであるといひ、『中山傳信錄』の「琉球語」は、萬曆三十年（1602）に渡來した冊使夏子陽の使録及び康熙二年（1663）の冊使張學禮の雜紀中に收めたものを基礎としたものである。そして『篇海類編』『海篇正宗』の琉球語は、『音韻字海』と大同小異であるが、何れも「琉球館譯語」を基礎としたものであることは、語彙やその配列の順序などを一寸比較對照して見ただけでも知れる。それから、嘉慶五年（1800）の冊使李鼎元の『使琉球記』中に、

李鼎元が徐葆光の琉球語彙を杜撰なりとして、完全な琉球寄語の編纂を思立ち、滯在中に五千二百數十語を採録して、『球雜』といふ譯語を編纂した経緯が記されてゐるが、この書が上木されたかどうかは判然しない。

(四)西洋人が蒐集して最初に紹介した見本には、英船長 Captain Broughton の『北太平洋探檢記』(1804)の附録に琉球語彙があり、二十一語を擧げてゐるが、稍おくれて文化十三年(1816)に琉球に來航した英艦 *Lyra* 號の艦長 Captain Basil Hall の航海記(1817倫敦版)にも、Clifford の採録した琉球語彙があり、單語一千語、文例百十六及び琉球日本蝦夷三語對照表を擧げてゐる。*Lyra* 號と共に來航した *Alceste* 號乗組の軍醫 MacLeod の航海記(1817倫敦版)にも、Fisher の蒐集した琉球語彙百八語を擧げてゐる。弘化元年(1844)より同二年まで在琉した佛蘭西宣教師 Foreade の琉球日記 (*Le Journal du mgr. Foreade, Lyon* 市で發行された週刊雜誌 *Les Missions Catholiques* 2、一八八五年五月より十一月まで、二十四回に亘つて連載された)中に、Foreade が琉球語の辭書を作つたいきさつが見えてゐる。即ち、琉球の役人たちは最初の間その琉球語の研究を妨害し、うそを教へたり、からかつたり、わざと文語を教へたりなどしてゐたが、八ヶ月前から寺院内の小役人が急に態度を一變して、親切に教へてくれたので、昨今は肝腎な會話を筆記し得る迄に進歩し、しかも一萬語以上の辭書を作る事が出來て、話してゐる事を聞きわけるに差支ないのみか、對話するにも左程困難を感じない位になつた、今朝などは那覇に寄港した英國船長との對話の通譯までしてやつた、といったやうなことが見えてゐる。彼は那覇郊外の天久の聖現寺に居たから、那覇方言を操つてゐたことはいふまでもない。この辭書が刊行されたかは判然しないが、多分草稿のまゝで何處かに保存されてゐるに違ひない。Foreade が歸國する少し前に來

琉して、安政元年(1854)まで足かけ九年も滞在した、英國宣教師 Dr. Pettelbein (ハンガリーに生れた猶太人で英國婦人を娶つて、英國に歸化した醫師)も、琉球語に堪能であつたが、彼も亦滞琉日記を物し(十數年前米國で發見された)、『福音書』の琉球譯を遺してゐる(香港で出版。乙卯年、鶴の日附があるから、安政二年即ち一八五五年に出版されたことがわかる)。彼は十二の國語に精通してゐたといはれてゐるが、Forcade が彼から來た佛文の手紙を詩か何かからないやうなもの、と評したのを見ると、他の國語も恐らく同様であつたらしく、獨逸語や英語の次には、或は琉球語がうまかつたのではないかと思はれる。しかし琉球政府が傳道を許さなかつたといふことがわかると、折角の琉球語も用ゐるに所なく、彼は已むを得ず之を聖書の翻譯に向けなければならなかつた。假名文字の稽古は到着した翌年(1847)の五月頃から始めたが、六年目の嘉永四年(1851)の五月に、琉球政府に請うて『論語俚諺鈔』と『小學口義詳解』とを得て研究し、同七月には和板『中庸』を、同十一月には『書經』を得て研究した。そして十二月には、『節用假字字引』を要求したが、それは許されなかつた。翌嘉永五年(1852)の正月頃から、通事に『路加傳福音書』を講義させて、之を琉球語に翻譯する準備をなした。四月二十九日には、いよく通事に託して琉譯『約翰傳』を淨書させたが、八月頃は他の『福音書』の翻譯もかなり進捗して、二十一日までには、馬太傳は一回『馬可傳』は二回淨書を了へ、『約翰傳』は一回の淨書を了へて、二回のも半ば了へ、『路可傳』は一回の淨書を半ば了へてゐたといふことである(東恩納寛傳著『尙泰侯實錄』の年譜參照)。多分安政元年の正月琉球を去る頃には、使徒行傳や羅馬書の翻譯も完成してゐたに違ひない。といふのは、その頃(魯曆二月二日)彼が魯船を訪れた時の談話中に、琉譯聖書出版の爲に、ベルリの船に便乗して歸國するといふことがあるので知れる。

この書の用語中には、首里語も混じ、日本の文語も見出され、悉く片假名で寫してあるが、その稿本は伯林所在のブロンヤ國立圖書館に保存されてゐることである(明治文化研究四ノ十一所載、奥平武彦氏稿「日本譯聖書初期文獻雜考」參照)。

琉球語史を明かにすべき資料としては、上記の如く、確實なものとしては十六世紀初頭以後のことに屬し、『おもろさうし』に採録されたおもろ中の製作年代の古いものにしても、十二世紀中葉以前に溯ることが出来ないから、それより以前のことは明かでない。たゞ琉球諸方言の比較研究によつて文獻以前の狀態を多少は明かにすることが出來よう。文獻以後の琉球語は、慶長年間の島津氏の琉球入りと、明治維新以後、日本に直屬するやうになつたこの二つの政治上の變革によつて劃期的の變化が行はれた。即ち島津氏の琉球入り以前の琉球語は、所謂「みせせるの言葉」の行はれた時代で、日本語の影響も多少はあつたらうが、未だ古格を保つてゐた。島津氏の琉球入り以後は、日本語(主として薩摩方言)の影響を受けて一變し、又独自の變遷を遂げて、『おもろさうし』等の言葉が理解し難いやうになつた。明治維新以後は、標準日本語の普及や日本文化の弘通によつて、一層日本語に近い形をとるに至つた。琉球語の母音については、現在 a i u の三母音であるのを見て、チェンバン (B. H. Chambe lain) がこれが即ち日本語と琉球語の祖語の姿の生き寫しであるとしたが(ロシアの Polivanof は『日琉音聲比較論』を書いて之に反對した)、却つて古くは a i u e o の五母音を區別してゐたやうである。おもろ時代には多少混同して行く傾向は見られるが、未だ五母音を區別してゐたらしい。その後 i と e とが混同し、u と o とが混同するやうになつたが、その前に來る子音の口蓋化又は無聲音化等の有無によつて、i 列

音とe列音、u列音とo列音との區別が保存せられた(C. Jespersen: Language: its Nature, Development and Origin, p. 61 及び市河・神保二氏譯「言語その本質・發達及び起原」一四六―七頁參照)。又日本語の波行子音に對應するものは、主として現在首里を中心とする沖繩島の南半では、F音h音が行はれ、漸次h音に統一されて行く傾向が見られるが、その他の方言ではr音に發音してゐる所がある。そして古くは各方言ともp音であつて、それがF音になり、h音に轉じて行つたらしい。動詞の活用の種類についても、現在の琉球語のそれが單純な所から、チェムバレンは日本語の奈變式の活用が、祖語に於て行はれ、その後日本語では幾つかの種類に分れたが、琉球語は祖語に於ける状態をさながら傳へたとしたが、琉球語に於ても古くは幾つかの種類があり、後に漸次整理されて、現在のやうになつたらしい。そして係結は、おもしろ時代にあつては、日本古代の「こそ」と同様にsi又はsu(日本の「こそ」に當る)を受けて、已然形で結ぶものも行はれた。

琉球に固有の文字があつたかどうかは明かでない。『羅山文集』に、

○應永廿二年復琉球二書

或書に「從公方琉球へ被遣御内書如此、かな書也、小高上下少切之

りうきう國のよのぬしへ

御文くはしくみ申候しん上の物ともたしかにうけ取

應永廿二年十一月廿五日

りうきう國のよのぬしへ

とあり(西曆一四一六年、足利義持が第一尚氏の第一世思紹に送つた返簡)、「昆陽漫錄」に見えてゐる、永享十一年(1439)足利義教が思紹の子巴志に送つた返簡も、同様な形式になつてゐるから、之によつて當時「りうきう國のよのぬし」(よのぬしは國王の義で同時代のおもしろに多く現れてゐる)より足利將軍(多分「はん國のよのぬし」と書いてあつたらう。おもしろでは、日本のことを多くやまと云つてゐるが、この王朝の初期に初めて支那に使ひした人を歌つたおもしろには、「てどこんの大やこ唐の道あけわちへ、てどこんすに、はんうち鳴響め」といふのがある)の書簡の和文であつたことが窺はれる。かうして、現存の文獻は多く平假名で書かれてゐるが、西曆一四四五年に朝鮮で印行された『龍飛御天歌』卷二『琉球南蠻重譯入貢』の條に「則用倭字、言語與日本相似」とあるによつても、相當古くから假名を用ゐてゐたことがわかる。しかし『李朝實錄』卷十三に、洪武二十七年(西曆一三九四年、即ち初めて朱明に通じてから二十三年後、留學生を國子監に派遣してから三年後)中山王察度が李朝の太祖に送つた漢文の書簡が出てゐるのを見ると、當時既に漢文に熟達して、日本以外の外國への書簡には、専ら之を用ゐたことが知られる。兎に角島津氏の琉球入りまでは、國內では多く琉球文を平假名で寫して、一般に用ゐてゐたのだが、琉球入り後は、公式には日本の變體漢文を用ゐ、従つて文字は漢字であり、御家流に書いた。又一方支那にも不相變朝貢してゐたので、漢文も用ゐられた。

琉球語が日本語と同系であることは、寛文頃の琉球の政治家羽地王子向象賢や、琉球最後の政治家宜灣朝保や、明治初年の琉球處分の時に琉球に使ひした松田道之等も述べてゐるが、チェムバレンが琉球語の研究をなし、日本語との間に本質的一致の存することを明かにしてから、何人も疑はないやうになつた。チェムバレン

以後の琉球語研究の結果に徴して見ても、兩者間には大體規則正しい音聲の對應が見出されるし、語法上の特徴にしても、日本語と一致するところが多いので、全く同系統であると斷じて間違ひない。ただ日本語と琉球語がどういふ關係に立つかの點に就いて異論がある。チェムバレンは、兩國語の關係はスペイン語とイタリア語、或はスペイン語とフランス語との關係に似たものであるとし、同一祖語から分れて、一方は本土に於て日本語となり、一方は琉球諸島に於て琉球語となつたのであると論じたが、安藤正次氏は、この説に反對し、日本語といふものが形成された後に琉球語が分れたものであらうとした(『古代國語の研究』)。

琉球諸島のことは、推古天皇の頃から國史に見えてゐるが、我が國では外國として取扱ひ、入貢歸化などの文字を用ゐるものによつても、當時相當の隔りがあつたやうに考へられる。その後兩者間には公式の交渉が途絶え、日本の勢力は及ばなかつたが、鎌倉時代に至つて日琉間の交通が再び劇しく行はれるやうになつてから、又日本語の影響を受けることが多くなつたのだが、琉球王國として獨立して居り、島津氏に征服された後も、表面では獨立國の體裁を保つてゐた状態で、日本本土の言語と分れたのは何時かわからないにしても、琉球語は琉球諸島内で独自の發達變遷をとげたのであらう。そして同一系統に屬する日本語と琉球語との比較研究によつて、原始日本語、又は共同祖語を再建することが可能であらう。終りに、琉球語研究の参考文献を列記して置かう。

B. H. Chamberlain: Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language, 1895.

(Transactions of the Asiatic Society of Japan. vol. 23) // E. D. Polivanof: Sravnitelno foneticheskii

ocheck yaponskavo i ryukyuskavo yazikof. 1914. (Otdelni otisk iz Zapisk Vostochnavo Otdeleniya Imperatorskavo Russkavo Arexeologicheskavo Obshchestva. Tom XXII.) ○右譯「日琉語音聲比較論」吉町義雄(雜誌「方言」琉球語特輯號) ○琉球の方言 伊波普猷(ことばの講座第二輯) ○琉球の方言 同上(國語科學講座) ○南島方言研究について 東條操(國語教育一一ノ二) ○再び南島方言について 同上(國語教育一一ノ五) ○琉球語就中八重山語の研究 宮良當壯(國學院雜誌二九ノ七、八、九) ○琉球語の體系的考察 奥里將建(國語國文の研究九、一〇、十三) ○「琉球語」と「國語」との音韻法則 服部四郎(方言二ノ七、八、一〇、一二) ○琉球語の母音組織と口蓋化の法則 伊波普猷(本書所收) ○琉球語の母韻統計 同上(民族一ノ二) ○琉球に於ける方言鼻音 宮良當壯(國學院雜誌三二ノ四) ○琉球語の波行音の變遷 新村出(東方言語史叢考) ○沖繩語典 仲本政正 ○混効驗集(古琉球三版附録) ○琉語解釋 宜灣朝保 琉球語便覽附録) ○南島八重垣 山内盛熹 方言、琉球特輯號) ○沖繩對話 沖繩縣廳學務課編 ○琉球語便覽 糖業研究所編 ○標準語 對照 沖繩語の研究 桑江良行 ○探訪南島語彙稿 宮良當壯 ○八重山語彙 同上 ○琉球語研究資料 田島利三郎(明治三十一年發行國光新年號所載、琉球文學の研究の名で那覇市青山書店より發行) ○南島方言資料 東條操 ○語音翻譯釋義 伊波普猷(本書所收) ○海東諸國記附載の古琉球語について 同上(國語と國文學八ノ三) ○吾が古代國語と琉球語との比較 宮良當壯(史海三ノ三) ○琉球人の古事記と萬葉 奥里將建 ○琉球戲曲新辭典 伊波普猷(方言三ノ九、一〇、十二、四ノ三) ○古琉球 同上 ○琉球古今記 同上 ○南島を思ひて 新村出(續南蠻廣記) ○南島研究の現状 柳田國男(啓明會第十五回講演集) ○沖繩方言研究の必要 金澤庄三郎 ○古代國語の研究 安藤正次 ○日本語の根本的研究 北里闌 ○古代日本語音組織考 同上 ○琉球語彙 伊波普猷(本書所收)

- 琉球語の見本同上(國語教育一六ノ九)
- 蠶蛹の琉球語 同上(本書所收)
- 琉球語の「トーダーチー」の解釋より萬葉集の「手抱而」「手拱而」の訓へ 同上(同上)
- 國頭方言の音韻法則 仲宗根政善(方言、琉球語特輯號)
- 現代大島小湊語用言の活用 川上忠吉(同上)
- 喜界語音韻概観 岩倉市郎(同上)
- 宮古島方言研究 與儀達敏(同上)
- 琉歌歌詞解釋(眞境名安興遺稿 同上)

この一篇は、昭和三年『日本文學大辭典』の爲に書いたもので、畏友橋本進吉氏が改訂を加へて、體裁をととのへ、新學説を増補したものであるが、編纂部と橋本氏と新潮社との諒解を得て、多少の注と適切な例とを加へ、之を以て自序に代へることにした。

昭和九年七月七日

伊波普猷

凡例

一、『おもろやうし』の研究と『琉球語大辭典』との編纂に従事してゐる間に、折りにふれて書いた琉球語に關する論文や隨筆が、三十餘篇も集まつたので、『琉球語の研究』と題して、公にしようとしたが、特殊な研究なので、引受けてくれる出版業者が無く、久しく筐底に收めて置いたのを、二三年前『方言』の澤野武馬君にその目次を見て貰つたのが因縁となつて、昨秋樂浪書院の篠田太郎氏が見えてその出版を引受けて下さつた。南島研究に理解のあるこの若い出版者に對して、感謝の意を表する。この稿本は最初前篇を「言語篇」とし、後篇を「文獻篇」として出す積りであつたが、その種の本としては頁數が多過ぎるので、先づ「言語篇」だけを「南島方言史攷」と題して出すことにし、「文獻篇」は別に『琉球文獻叢考』として出すやうになつたことを附加へて置く。

一、各篇獨立したもので、記事の重複した個所もあるが、強ひて削除すると、前後の聯絡を缺く恐れがある。そのまゝにして置いたものもある。もとより計畫的に書いたものでない故、書名が或はふさはしくないかも知れないが、各篇を出来るだけ時代順に並べて置いたから、南島方言史の輪廓だけは、どうやらわかつて貰へるかも知れない。不十分な點は近刊『琉球文獻叢考』によつて補つて頂きたい。この二著は日頃の研究

の一端を師友に報告する代りに書いたもので、くはしくは、おもろの研究や辭典の編纂の完成を待つて、發表しようと思つてゐる。

一、索引を作製して下さつた比嘉春潮君に感謝の意を表する。

南島方言史攷 目次

琉球語の母音組織と口蓋化の法則……………一

『海東諸國記』附載の古琉球語の研究（「語音翻譯」釋義）……………三七

琉球語彙（六十八語解釋）……………三七

フカダチ考（門及び下痢を意味する琉球語の研究）……………一八三

琉球語の「トーダーチー」の解釋より……………

萬葉集の「手抱而」「手拱而」の訓へ……………二〇五

「あさみち」といふ古語に就いて……………二二五

「あられ」といふ語について……………二二九

蠶蛹の琉球語(室町期の國語の南島方言に及ぼせる影響の瞥見)……………三三

おやだいり考……………二四五

琉球語と壹岐方言との比較對照……………二五五

「日本館譯語」を紹介す……………三〇七

パンミカシーとチャンクール……………三三九

那覇の讀み方……………三四五

東風と死人の頭痛(沖繩島と鬼界島との交渉)……………三五二

琉球人の命名法……………三五七

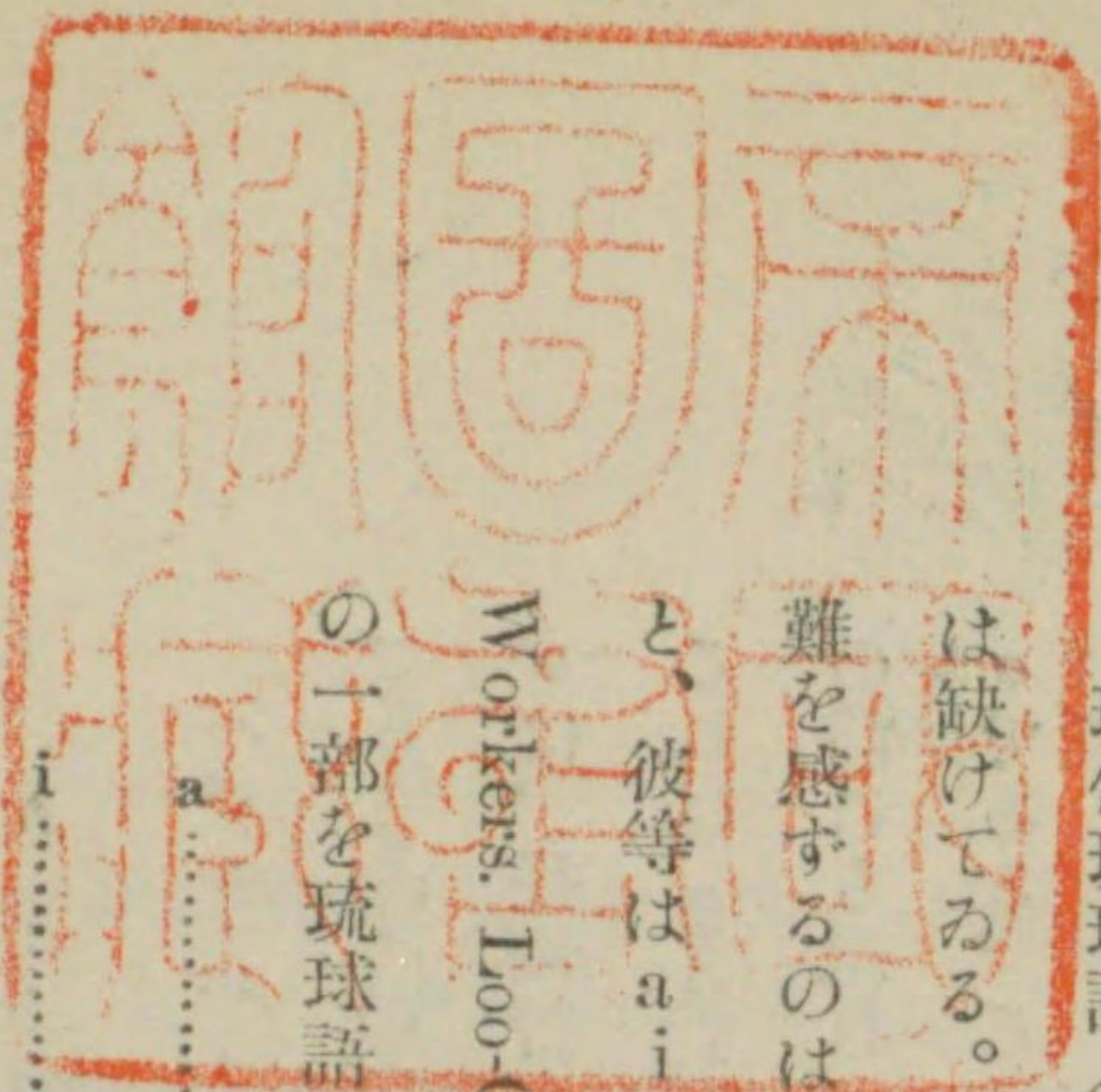
索引

南島方言史の目次

琉球語の母音組織と口蓋化の法則

一

現代琉球語(即ち首里語を中心とした沖繩本島の方言)には、a i uの三母音があるだけで、e oの二母音は缺けてゐる。琉球人が所謂五十音圖中のエ列及びオ列の音節特にそれらの音節の連続した語を發音するに困難を感じるのは、専ら其の爲である。其の老人たちが、「日本は五音、沖繩は三音」といつてゐる所を見ると、彼等はa i uの三母音しか有つてゐないことを自覺してゐることがわかる。試みに、Manual for Christian Workers, Luo-Chooan Edition(十數年前私がメソヂスト派の宣教師シュワルツ博士の依頼を受けて新約聖書の一部を琉球語に譯したもので、約十六頁)中の母音の統計を取つて見よう。

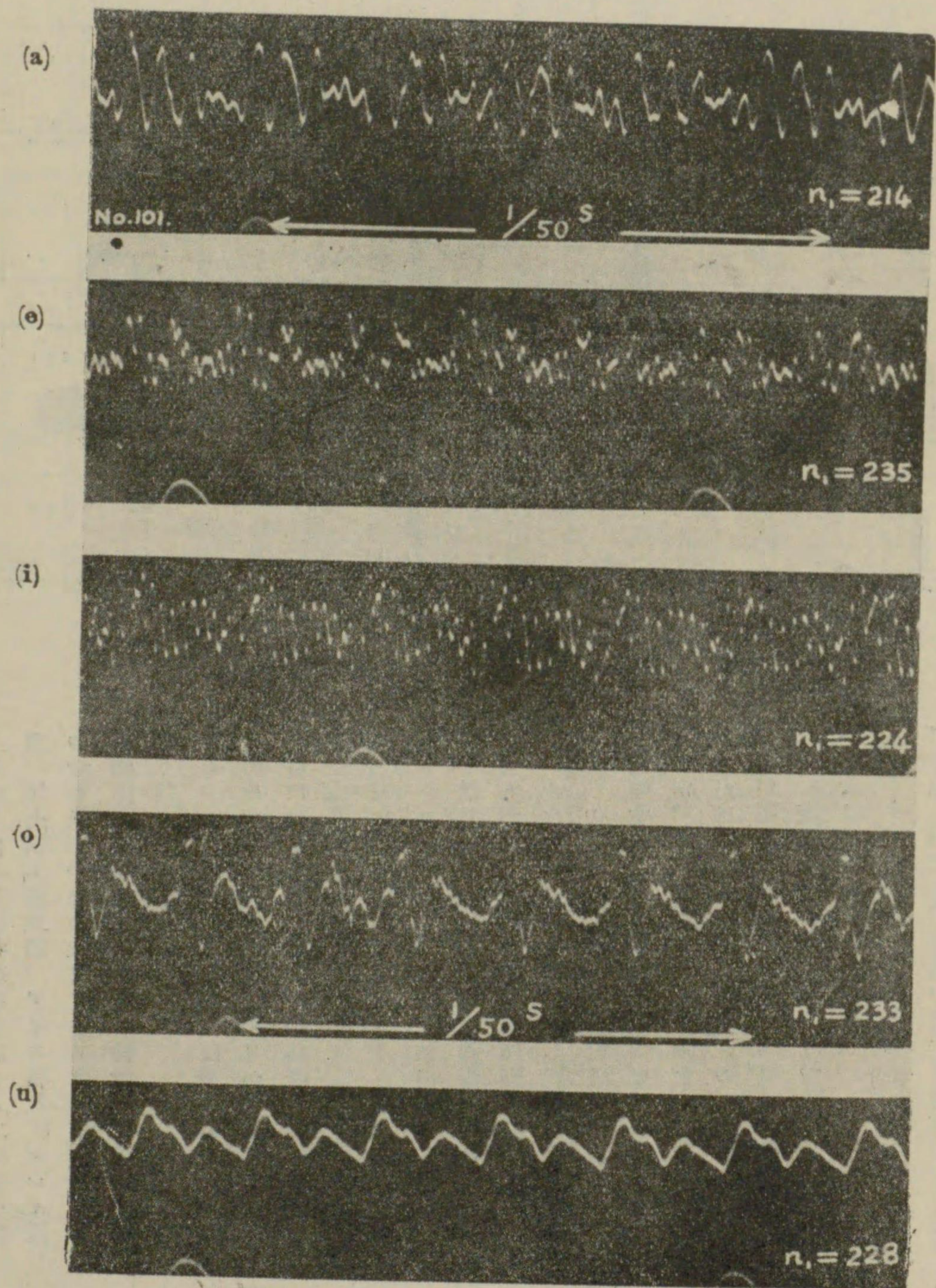


a	……………二、〇〇九
i	……………二、〇三九
u	……………二、〇六五
e	……………一三
o	……………〇

ā	三四九
i	一六一
û	一三六
e	一九二
ô	一一六

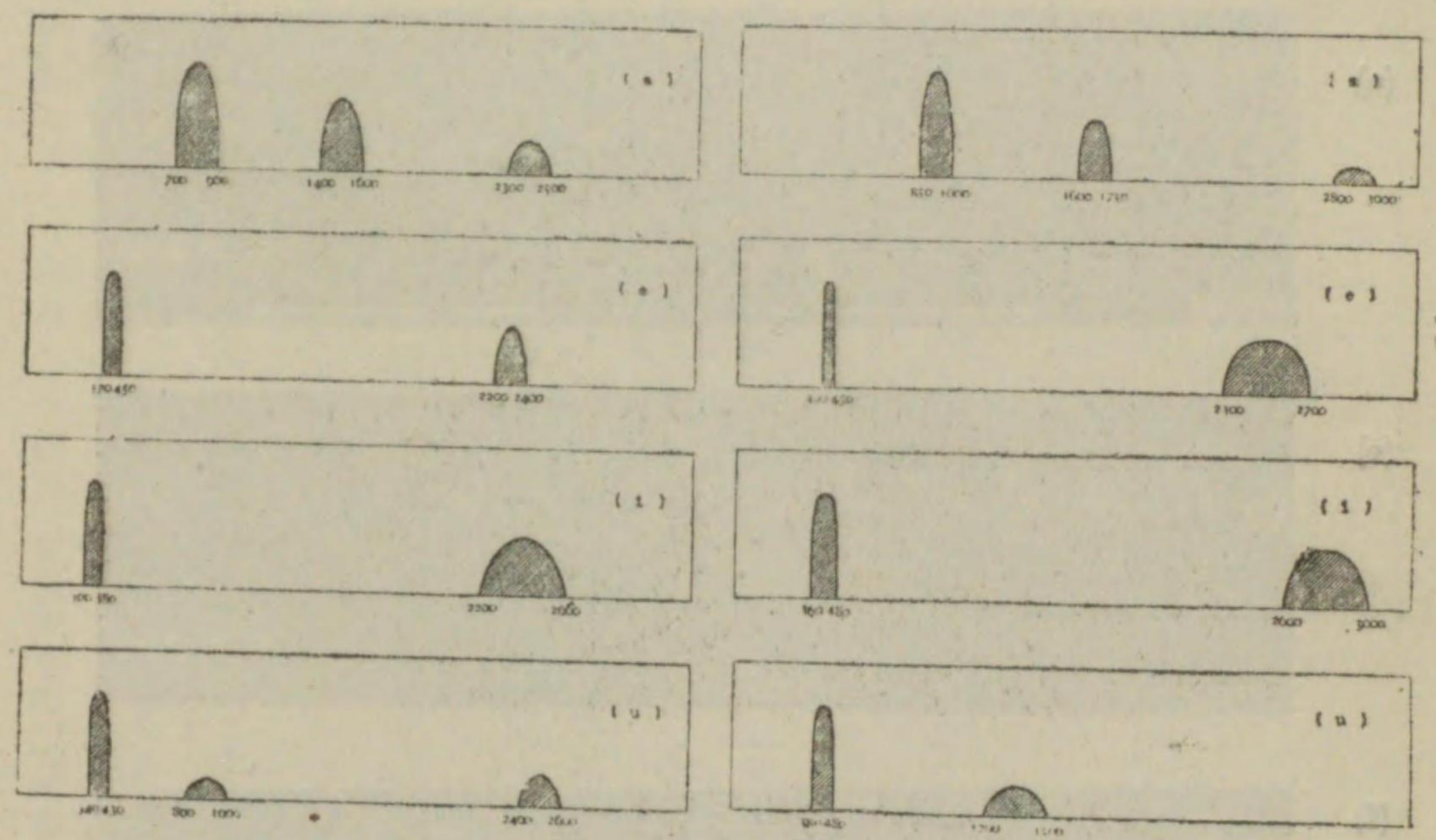
バジル・ホール・チエンペレン氏も、其の *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language* の中に、琉球語には、三個の基本母音 a i u があり、それには長短の二種があつて、中間母音の e は、長母音としてのみ現れ、短母音の e は唯一つ *habera* (蝶)といふ語に存在する、といつて居られるが、これは *me(おや)・ane(あら)* 等の間投詞にも現れ、*ten, den, wen, wen, men, men* といったやうに、鼻音の前にも現れる。また、大工廻 (*Dekudjaku*) といふ姓にも現れる。右の統計中の十三は、大方さうした時の e である。この統計には o は一つも現れてゐないが、これもやはり *ton, don* といったやうに、鼻音の前にのみ現れる。兎に角、現代琉球語に、e o が缺けてゐるのは事實であるが、長母音の ô の存在することを見逃がしてはならぬ。そしてこの ô はそれ／＼ *ai, au* の二重母音の變化したものであることも知らなければならぬ。例へば、「地震」のことを宮古八重山の方言で *mai* といふに對して、沖繩本島の方言では *ho* といひ、「買ふ」を前者で *kamu* 又は *kam* といふに對して、後者では *koyun* 又は *hoyun* といつてゐるやうなものである。(雑誌「民族」一ノ一で發表して、後で『琉球古今記』中に收めた、「琉球語の母韻統計」参照)

琉球語女聲母音 發音者：N. T. Micro : W.
(小幡重一博士實驗)



琉球語母音フォルマント

(甲) 男聲 (乙) 女聲



振動數

上圖は、日本數學物理學會誌七ノ二所載小幡重一博士稿「琉球語、アイヌ語及びマレイ語の母音及び子音の性質」中に出てゐるもので小幡博士は琉球語の母音の特徴について次の如く述べて居られる。

(i) a、琉球語 a に於ては低い方の二つのフォルマント即ち F₁ F₂ の隔りが日本語「ア」の場合に比して遙に廣い、是れ琉球語の a は日本語「ア」に比して音聲學的に「狭い」母音であると言はれる原因であらう。

(ii) e、上圖に依つて明かに認められる様に、琉球語の e に於てはその高い方のフォルマントが著しく高音の方に移動して、殆ど i のフォルマントの位置に達して居る。

(iii) u、琉球語の u の音色は日本語の「ウ」と相違すると言ふ事は豫て知られて居る所であるが、此フォルマントの圖を一瞥すれば、夫れが日本語の「ウ」と「オ」の中間の音である事が認められる。以上述べた二つの原因に依つて琉球語には a i u の三つの母音しかないと言はれる次第であらう。

(iv) i、琉球語の i は日本語の「イ」と明かに音色を異にし、其高い方のフォルマントは日本語の場合より 300 ヘルツも低い。

親しく琉球の標準語を検討して、前掲書の中に「近代日本語が古代日本語を代表するよりも、琉球語がそれを代表するのが一入忠實である」といはれたチェンバレン氏は、所謂姉妹語に、a i u の三母音しかないのを見て、これがとりもなほさず兩國語の祖語の姿の生寫であると斷じ、近頃北里蘭氏も其の『日本古代語音組織考』に、之を無條件で祖述されたが、もしあの時チェンバレン氏に宮古・八重山及び奄美大島等の方言と比較し、更に「おもしろさうし」等の古典を研究する時間と餘裕とを與へたとしたら、琉球語にはかつて五母音があつて、その中の e o が消滅した結果、口蓋化の起つたことなどは、三十年前とうに闡明されて、私などがやる可き仕事は、もうなくなつてゐたに違ひない。試みに、オモロの母音統計を取つて、之を萬葉のそれと比較して見よう。まづ、拙著『おもしろさうし選釋』中に出した百首のオモロについて統計を取ると、

a	一、七五七
.....	一、〇四三
u	六〇五
e	七八三
o	一、三四五
.....	五七七
.....	一一

琉球語の母音組織と口蓋化の法則

で、a o i e u の順序になるが、萬葉集第一卷の母音統計を取つて見ると、

a	一、三三三
i	九四二
u	六四五
e	三三二
o	九九八

で、a o i e u の順序になる。(これは友人の手を煩はして、折口信夫氏の口譯萬葉集の取つて貰つたのであるが、由來萬葉集の訓み方には、一定しない所があるので、これと他の人が取つたものとの間に、出入があるのは當然である。)兎に角、一見して二者の間に著しい類似のあるのは、注意すべきことである。現代琉球語には、エ列とオ列は缺けてゐるのに、オモロを表記するに、エ列とオ列との平假名が用ゐてゐるのを變だと思ふ人があるかも知れぬが、この點は琉球語に於ける音韻變化の激しい現象を目撃したら、容易く領かれよう。沖繩島の北部の方言では、エ列から來た音節と在來のイ列のそれとの間には、多少の開きがあり、首里語でも一世紀前までは、幾分の差異があつたといふから(「琉球語の母韻統計」參照)、平假名を借りてオモロを表記した頃には、かなりの開きがあつたと見ていゝ。琉球に於ける平假名の採用の時期は、鎌倉以前に溯る事が出来るから、二國語の母音の價値に餘り開きの無かつた時代には、琉球人は大した苦心なしに自國語を寫出したに違ひない。そして彼等の子孫は、其後音韻が著しく變化したにも拘らず、この寫語法を踏襲して、今日に至つたと

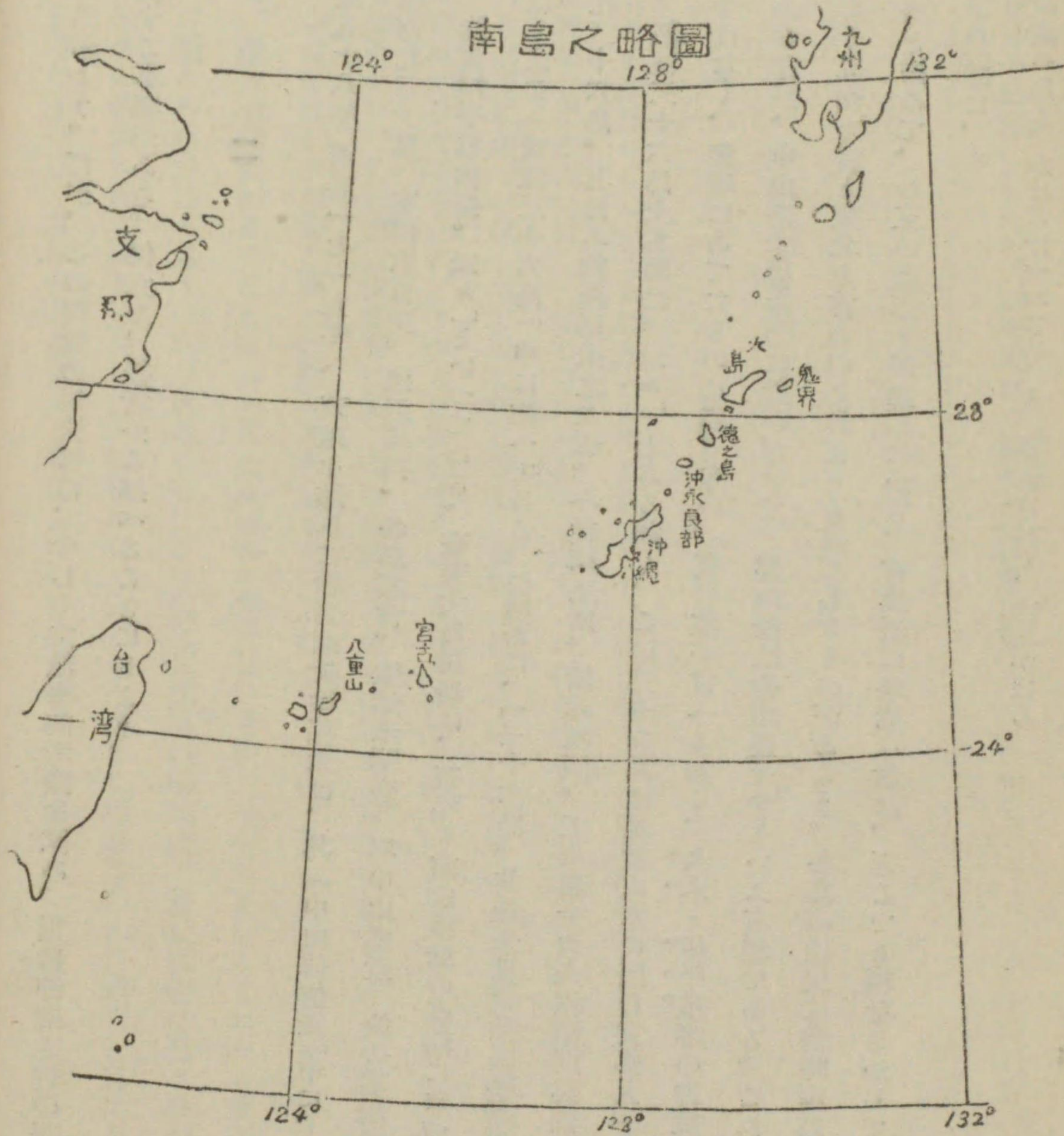
見ることが出来よう。だが、この問題の解決には、少しく文獻學的考證を試み、更に沖繩方言の語音を各島のそれと比較する必要がある。便宜上、後者から述べることにしよう。

二

清の康熙五十八年(西曆一七一九年)、琉球を訪れた冊封副使徐葆光は、其『中山傳信錄』中に、「琉球屬島三十六。水程南北三千里。東西六百里。遠近環列。各島語言。惟姑米葉壁。與中山爲近。餘皆不相通。擇其島能中山語者。給黃帽令爲酋長。云々」といつてゐる。奄美大島諸島は、百年も前に薩摩の直轄になつてゐたのに、徐使はやはり之を「琉球三十六島」中に數へてゐる。(同書に、「三十六島。前錄未見。惟張學禮記云。賜三十六姓。教化三十六島。其島名物産則未之及也。今從國王所。請示地圖。王命紫金大夫程順則爲圖。徑文有奇。方位略定。然注三十六島土名而已。云々」とある如く、この三十六島は地數六六に因む支那人一流の文飾で、實際の數ではなく、無理にあてたものに過ぎない。)實に彼が言へる如く、久米・伊平屋等の沖繩島を取巻いてゐる島々の方言が、中山語(首里語)に近いただけで、其餘は皆相通せずといふ有様である。これらの方言の隔りは、恐らく九州方言と東北方言とのそれよりも甚だしきものがあらう。各島の住民は當時南島の公用語であつた首里語を用ゐて、お互の意志を疎通したから、首里語に堪能な者は、どこでも幅をきかしてゐるに違ひない。大島の民謡に、

島や何處ぢやの島も、かはるげやねさめ、水に分かされて、言葉ことばかはる

琉球語の母音組織と日蓋化の法則



とあるのは、この邊の消息を語るもので、各島方言に相違の出來た理由をも能く説明してゐる。私は所謂「三十六島」の重なる島々には、大方渡つて見たが、音韻・單語・語法等の比較研究から、又島民同志が話してゐるのを聞いた實感から、南島方言を大體沖繩・宮古・八重山・大島・徳之島・鬼界・沖永良部の七つのグループに分けるのが穩當であると思つてゐる。さうして私は、この七方言の語音を審かに比較することによつて、漸く年來の疑問を解くことが出來た。

前にも一寸述べた通り、琉球語（以下首里語を中心とした沖繩方言の意に用ゐる）では、eはiにoはuに合併し、従つて所謂五十音圖中、エ列はイ列にオ列はウ列に合併して、しかもエ列から來た子音が、原價を保存するに反して、在來のイ列の子音は、口蓋化（若しくは濕音化）するので、さうした所に、今は區別し難くなつてゐる此の兩母音の間に、かつて幾分開きのあつた痕跡が見えてゐる。即ち「k+i」(ki:毛)・「g+i」(ka:gi影)・「s+i」(karasi貸せ)・「w+i」(wi:yum酔)・「n+i」(ni胸)・「r+i」(uri取れ)等に對して、「eh+i」(chin着物)・「dj+i」(kadjiri限)・「sh+i」(karashi貸)・「y+i」(yiyun坐)・「h+i」(hiyun似)・「y+i」(tuyi取り)等がある。（但、uがyiに變ずるのは、語腹にある場合に限る。）ところが先島方言では、eがiになつたに對して、在來のiはiに變じ、従つて双方の對立があるので、右の場合のやうな子音の口蓋化（若しくは濕音化）といつた現象は見られない。即ち「k+i」(ki:毛)・「g+i」(pi:鬚)・「p+i」(pi:鬚)・「b+i」(kabi壁)・「m+i」(imi夢)・「r+i」(kuri是)等に對して、「k+i」(kin着物)・「g+i」(ngi右)・「p+i」(pinu人)・「b+i」(kabi紙)・「m+i」(imi忌)・「r+i」(ri錐)等がある。この例は宮古方言から取つ

琉球語の母音組織と口蓋化の法則

たが、八重山のも大同小異である。但、宮古方言の $\text{h}i$ は殆ど語腹及び語尾にのみ現れて、語頭に現れる例としては、 $\text{h}i$ (飯) 以外には見出しかねる。序でにいふが、この i が i と u との中間音で、ロシヤ語 bl と全く同一のものであることは、ネフスキー氏の裏書きする所で、之に似たのが、大島徳之島の方言及び東北方言にあるのも注意すべきことである。この母音は、スキート氏の *The History of Language* には、中舌音即ち前部と後部とで同時に調節する混合的のものになつてゐるが、佐久間博士は、この音の特徴を口腔の形状が横に著しく平たくなるといふ點に求められた。東北及び大島・徳之島のは、それほどでもないが、宮古・八重山のは、舌端のみならず、舌の前縁が著しく口蓋に近づく爲に、動もすれば摩擦の響きを伴ふもので、特に破裂音の子音と合して、音節を形くる場合には、 $p'i \cdot b'i \cdot k'i \cdot s'i$ といったやうに、 SZ の響くのを感ずる。で、ネフスキー氏は宮古方言を表記する場合には、いつも右の如く SZ を附して居られたが、橋本進吉氏は、 i 音は之を發音する時の口形が z 音に近く、たゞそれよりも舌の位置がすこし低だけの違ひであるから、前の子音からこの音に移る瞬間に、 z 又は s に近い音が聞えるので、その子音の清濁に随つて或は s に或は z に近い音になると言つて居られる。

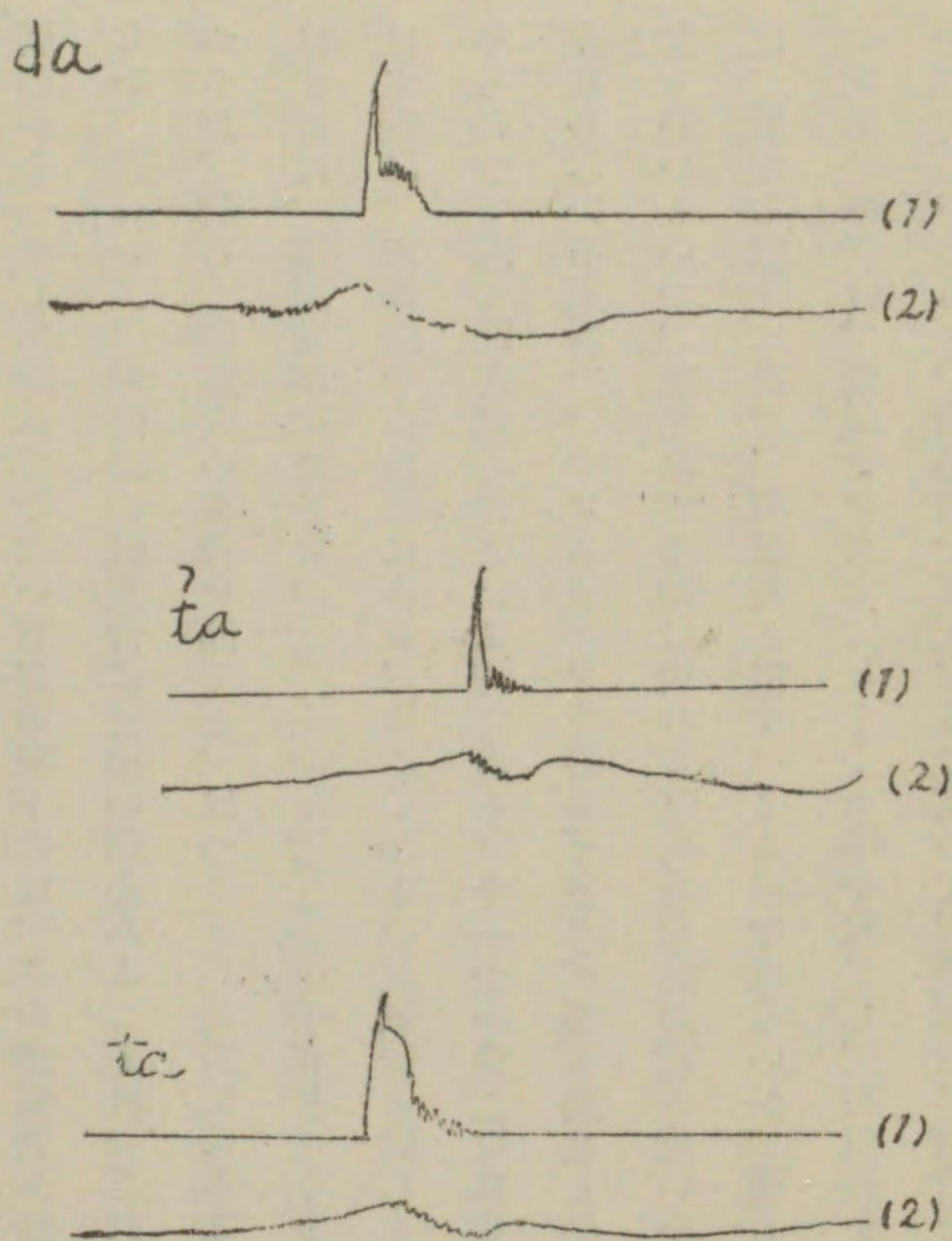
それから沖繩方言では、オ列音から來たウ列音で、子音が原價を保存するに反して、本來のウ列音の子音は、口蓋化(若しくは濕音化)する事、エ列音から出たイ列音と本來のイ列音との場合と同様である。即ち、 $[k+u]$ ($kunudju$: 此の中 $nu: ku$ 聲) $[g+u]$ ($kunuguru$ 此頃) $[s+u]$ (sun 損) $[m+u]$ ($mumu$ 桃) $[n+u]$ ($shinudjun$ 凌) $[r+u]$ ($kurushun$ 殺) 等に對して $[eh+u]$ ($ehan$ 來) $[ichun$ 行) $[dj+u]$ ($ka:ljan$

漕) $[sh+u]$ ($shun$ 爲) $[y+u]$ ($sinyun \rightarrow sinun$ 濟) $[h+u]$ ($shinun$ 死) $[y+u]$ ($tuyun \rightarrow tuyin$ 取る) 等がある。(但、 ru が yu に變ずるのは、語腹にある場合に限る。)これらは大方語腹にある場合で、語頭にある場合は、混同を免れない。宮古方言には、 o から來た u に對して、一方には在來の u があり、他方にはこれから轉訛した $ü$ (支那語の自・子・四及び東京語のツ・スの場合の變的 u と同様のもの) があり更に i に轉訛したのもあつて、三者共オ列から來たツ・ス・ヅに對立してゐるが、 $ü$ は現在では其他の子音の場合には殆ど現れず、従つてさうした場合に、口蓋化(若しくは濕音化)がないので、兩列の區別は殆ど出来なくなつてゐる。思ふに、八重山方言にも宮古方言に於ける如く、かつて此の $ü$ があつて、 o から來た u に對立してゐたのが、後にはツ・ス・ヅ ($tsuki$ 月, sin 爲す) などの場合にのみ遺り、いつしか i ($tsiki$ 月, sin 爲る) に變じたのであらう。といふのは、宮古方言には $u \cdot ü \cdot i$ の三階段が、八重山方言には $u \cdot i$ の二階段が、併存してゐる所から、容易く推測することが出来るのである。即ち、前者には $kisun$ (切る) $\cdot süm \rightarrow sim$ (爲る) $\cdot kaküm \rightarrow kakim$ (書く) があり、後者にも ($kisun$ 着る) $\cdot sin$ (爲る) $\cdot kakun$ (書く) があるのは、注意すべき點である。前にも述べた通り、現今では沖繩方言のツ・スも $[ts+i]$ ($tsichi$ 月) $\cdot [s+i]$ ($sipyun$ 吸) $\cdot [siehun$ 好) になつてゐるが、これなども一旦 $[ts+ü]$ $[s+ü]$ を經て、さうなつたに違ひない。

大島及び徳之島の方言でも、やはり $i \cdot i$ の兩形が對立してゐるので、たとひ e が i ($ki: \cdot \text{毛} \cdot \text{て} \cdot \text{手} \cdot \text{nimbyuri}$ 眠る) 大島) となつて、 i が i (kin 着物) $\cdot kikyuri$ 聞く) $\cdot niyuri$ 似る) 同上) のまゝで止まる點は、宮古八重山のとあべこべになつてゐても、口蓋化(若しくは濕音化)の現象の餘り見られないのは、宮古八重山の方言に酷

似してゐる。但、大島方言では、オ列から來たものと在來のウ列とは、語腹にある場合には、後者は大方口蓋化(若しくは濕音化)するので、兩者の區別はつくが、語頭にある場合には 'kuehi (東風)・kuehi (口) のやうに(尤もアクセントでは區別してゐるが)、殆ど區別し難くなつてゐる。之に反して、徳之島の方言では、語腹にある場合は勿論のこと、語頭にある場合でも、後者を無氣音化することによつて、前者と區別するやうになつてゐる。徳之島伊仙村の昇益輝氏(四十臺の人)について、親しく調査したところによると、徳之島方言でも、在來の u は ts・s の次に來る場合には、宮古島の方言同様に、ü に變つてゐる。例へば、k^{ts}u^s (糟、糞、糞、糞)・süma (角力)・tsüki (月) の如きものである。そして「鶴」を tsuru 又は taru といつてゐる地方もあるとのことだから、そこでもやはり宮古島同様に、在來の u は一方ではそのままとどまり、他方では ü を經て、i に推移したことがわかる。大島方言にこの ü が有るか無いかは、まだ確めてゐないが、多分同様な経路を取つて推移したであらう。

兩形の對立してゐない、鬼界及び沖永良部の方言には、沖繩方言と等しく、口蓋化(若しくは濕音化)の現象があり、就中鬼界方言では、口蓋化しない場合には、オ列から來た [k+u]・[t+u] 等の子音 (kukuru 心、tuchi 時) が、原價を保存するに反して、在來のウ列の [k+u]・[t+u] 等の子音 ('kuehi 口・'yuehi 月) は無氣音化し、同様にエ列から來た [k+i]・[t+i] 等の子音 (kita 柁、手) が原價を保存するに反して、在來のイ列の [k+i]・[t+i] 等の子音 (kita 傷、小野津、chida 傷、yiu 一つ、早町) は、無氣音化、さもなければ、口蓋化するので、これで兩列の混同が避けられるわけである。オ列及びエ列から來た破裂音が、語腹に



上圖は、服部四郎氏が鬼界島方言の濁音、無氣音、有氣音を、カイモグラフで測定したもので、(1)は破裂に因る息の出を示し、(2)は聲帯の震動を表す。濁音の場合には、子音の d は破裂に先つて、既に震動を始めてゐるが、有氣音の場合には、t の破裂が母音 a の震動に先つてゐる。そして無氣音の場合には、t (或は ts) の破裂が母音 a の震動と同時に起つて、正に兩者の中間の状態にあることが知られる。聞いた感じが稍、濁音に近いのは、専らその爲である。本圖は原圖が不明瞭な爲に稍廓大して筆寫したものであることを斷つて置く。

ある場合に、悉く無氣音化するといふ都合の悪いこともないではないが、語頭にある場合には、絶対にそんなことは無い。この有氣・無氣の區別は、沖繩の方言にもある。那覇方言では ts (手) は支那語の「提」・「蹄」等と

同様な有氣音で、 t^{h} (一つ) は支那語の「地」「弟」等と同様な無氣音である。又 t^{h} (茶) は支那語の「茶」「利」等と同様な有氣音で、 t^{h} (常に) は支那語の「札」「奢」等と同様な無氣音である。イ列の子音が無氣音化するの、鬼界島同様であるが、今では夕行に限られて、その區別も重要視されてゐるといふほどではない。その最もやかましい所は、沖繩島の北部地方で、其處では鬼界島に劣らず、重要視されてゐる。ところが、那覇市から一里しか離れてゐない首里の城下には、この無氣音が無く、首里人は之を聞きわけることさへも出来ない。因にいふ。朝鮮語の破裂音に三種の別のあることは、これらをあらはすそれ／＼の記號があるので氣がつくが、親しく朝鮮人の發音を聞くと、はつきりした區別のあることがよくわかる。即ち、 p ・ t ・ c 等であらはず音は、國語及び南島方言の「カ」「タ」「バ」等の子音 k ・ t ・ p 等と同じものであるが、 h ・ c 等であらはず音は、支那語や南島語にある、 k ・ t ・ p 等の無氣音と同じもので、昔支那に留學した首里の官生に、一二年もたつて漸く聞え出したといふ音である。今一つの r ・ m ・ h 等であらはず音は、國語及び南島語には絶えて存在しない有氣音で、サンスクリットの kh ・ th ・ jh 等と同じものである。之に比べると、支那語の有氣音はかなり弱いもので、首里語で語頭に現れる時の有氣音が稍々近いやうに思はれる。首里以外の南島の所謂有氣音は、嚴密な意味に於て、有氣音と稱すべきものではないが、暫らくさういふ名で呼ぶことにする。由來歐羅巴の支那語學者は、無氣音を表すに k ・ t ・ p 等を以てし、有氣音を表すには、其の右肩に、 h を附した k^{h} ・ t^{h} ・ p^{h} 等を以てしてゐるが、南島語を表記するに當つて、無氣音に前者を用ゐる、所謂有氣音に後者を用ゐるとしたら、從來國語を表記するに用ゐられてゐるヘボン式其他の表記法とも抵觸して、兩國語の音韻を比較する時、混亂

を來たす恐れがあるので、橋本進吉氏が、この無氣音を一種の喉頭破音(ヴォカル・ブレイク)を伴つた音だと主張された意見に従つて、之を表記するに、左肩に、 h を附けた k^{h} ・ t^{h} ・ p^{h} 等を以てすることにした。兎に角この有氣・無氣の區別は、鬼界方言では特に重要視すべきものだから、之を聞きわけることの出来ない研究家は、南島の語音に對しては、色盲の畫家同様であると言はなければならぬ。この外にも、鬼界方言には、エ列から來た「 t^{h} 」が、 h ibushi (煙) のやうに原價を失つて、「 t^{h} 」に變ずる場合もあるが、この現象は沖永良部の方言及び沖繩島の北部の方言にも見られる。しかも後者では、オ列から來たウ列及びア列の k も h に變ずる。以上述べたことで明白だが、鬼界方言が、種々の方法で、同音異義の語の混同を殆ど完全に防いでゐるのは、南島語中絶えてその比を見ない所である。

要するに、沖繩・沖永良部・鬼界の三方言は、音韻變化の點に於て、同一經路を取つてゐるが、沖永良部は沖繩島に接近してゐる爲に、語法の點に於ても、七八部通り沖繩の一致してゐるといつて差支なく、鬼界島は大島に隣接してゐる爲に、語法の點に於ては、却つて大島(及び徳之島)に類似してゐるといつていい。それは語法上の重なる特徴ともいふべき動詞形容詞の活用の終止形を比較しただけでも窺はれる。例を「取る」といふ語に取つて見ると、大島・徳之島は turyun 、鬼界島では turyun で、國語の良行變格「アリ」型の變形であり、沖繩及び沖永良部では turyun 、八重山では turyun 、宮古では turyun で、國語の正格活用及び加行佐行奈行變格「 u 」型の變形である。原始國語の終止形の二型が、南島に入つて、一は北部に他は南部に遺つてゐるのは注目すべきことである。

琉球語の母音組織と口蓋化の法則

一七

國語	八重山	宮古	大島
(ク) 毛	(k+i)ki:	(k+i)ki:	(k+i)kī:
(グ) 鬚	(g+i)pīgi	(g+i)pīgi	(g+i)gīgī
(キ;ク;コ) 木	(k+i)ki:	(k+i)ki:	(k+i)kī:
(キ) 着る	(k+i)kīsun	(k+i)kīsūm	(k+i)kiriyuri
(ギ) 麥	(g+i)[i]mug	(g+i)mugī	(g+i)mugi
(セ) 汗	(sh+i)ashi	(sh+i)ashi	(s+i)asī
(ゼ) 風	(dj+i)kadji	(dj+i)kadji	(dz+i)kadzi
(テ) 手	(t+i)ti:	(t+i)tti:	(t+i)tī: ; tī:
(チ) 落ちる	(t+i)utirun	(t+i)utiŋum	(t+i)utiryuri
(ヘ) 尻	(p+i)pi:	(p+i)pi:	(F+i)Fī:
(ヒ) 左	(p+i)pīdarī	(p+i)pīdarī	(ɸ+i)ɸidjari
(ネ) 根	(n+i)ni:	(n+i)ni:	(n+i)nī:
(ニ) 荷	(n+i)ni:	(n+i)nī:	(n+i)nī
(メ) 夢	(m+i)imi	(m+i)imi	(m+i)imī
(ミ) 忌	(m+i)imī	(m+i)imī	(m+i)imi
(エ) 酔ふ	(b+i)bi:run	(b+i)biyuŋum	(y+u)yu:yuri
(キ) 坐る	(b+i)bīrun	(b+i)biŋum	(y+i)iyuri
(レ) 是	(r+i)kuri	(r+i)kuri	(r+i)kuri ; kuri
(リ) 鳥	(r+i)turī	(ŋ+i)tuŋī	(r+i)turi
(コ) 米	(k+u)kumi	(k+u)kumi	(k+u)kumī
(ク) 口	(F+u)Futsī	(F+u)Futsī	(k+u)kuchi
(ク) 書く	(k+u)kakun	(k+u)kakūm	(ky+u)kakyurī
(ソ) 糞	(s+u)Fusa	(s+u)kusu	(s+u)kusu
(ス) 爲る	(s+i)sīn	(s+u)sūm	(sh+u)shuri
(ス) 涼しい	sībassa:n	(s+i)sīda:sī	(s+i)sidasari
(ノ) 蚤	(n+u)nun	(n+u)num	(n+u)nun
(ヌ) 死ぬ	(ŋ+u)sīŋun	(ŋ+i)sīŋiŋum	(p+u)shihuri
(ロ) 廣い	(s+u)pīrusa:n	(s+u)pīsusam	(r+u)ɸirusari
(ル) 取る	(r+u)turun	(ŋ+u)tuŋum	(ry+u)turyuri

徳之島	鬼界	沖永良部	沖繩
(k+i)ki:	(h+i)hi;ɸi:[阿]	(k+i)ki:	(k+i)ki:
(g+i)gīgī	(g+i)gigi;Figi Fihi;shi;ji	(dj+i)ɸidji	(dj+i)Fidji
(k+i)ki:	(k+i)ki;hi;ɸi:	(ɸ+i)ɸi:	(k+i)ki: ㄨ(オモロ)
(k+i)kiriyuri	(k+i)kiyuyi;chiyuyi	(k+i)kiyun	(ch+i)chiyun
(g+i)mugi	(g+i)mugi; mupi; muji	(dj+i)mudji	(dj+i)mudji
(sh+i)ashi	(sh+i)ashi	(sh+i)ashi	(s+i)asi
(dz+i)kadzi	(d+i)hadi	(dj+i)hadji	(dz+i)kadzi
(t+i)ti; ti:	(t+i)ti:	(t+i)ti:	(t+i)ti:
(t+i)utiryuri	(t+i)u'tiyuyi	(t+i)ntiyun	(t+i)utiyun > uti:n
(F+i)Fī:	(F+i)Fi:	(ɸ+i)ɸi:	(F+i)Fi:
(ɸ+i)ɸidjari	(F+i)Fidjari;ɸidari	(ɸ+i)ɸidjari	(F+i)Fidjari
(ŋ+i)ŋī:	(ŋ+i)ni:	(n+i)ni:	(n+i)ni:
(p+i)ŋi:	(p+i)ŋi:	(ŋ+i)ŋi:	(ŋ+i)ŋi:
(m+i)imī	(m+i)imi;imī	(m+i)imi	(m+i)imi
(m+i)imi	(m+i)imi	(m+i)imi	(m+i)imi
(y+u)yu:yuri	(y+u)yu:yuyi; yu:wuyi	(y+u)yu:yun	(w+i)wi:yun
(y+i)iyuri	(y+i)iyuyi	(y+u)yun	(y+i)iyun
(r+i)kuri	(r+i)huri	(r+i)huri	(r+i)kuri
(r+i)turī	(y+i)tuyi ;turi	(y+i)tuyi	(y+i)tuyi
(k+u)kumi	(h+u)humi	(k+u)kumi	(k+u)kumi
(k+u)kuchi	(k+u)kuchi	(k+u)kuchi	(k+u)kuchi
(ch+u)kachuri	(ch+u)ka'chuyi	(ch+u)kachun	(ch+u)kachun
(s+u)kusu	(s+u)kusu; ssu	(s+u)kusu	(s+u)kusu
(sh+u)shuri	(sh+u)shuyi;sui	(sh+u)shun	(sh+u)shun
(s+i)sīda:n	(s+u)sudasayi	(s+i)sīdasan	(s+i)sīdasan
(n+u)numi	(n+u)numi	(n+u)nu:mi	(n+u)numi
(ŋ+u)shihuri	(ŋ+u)shihuyi	(ŋ+u)shihun	(ŋ+u)shihun
(r+u)ɸiruhari	(r+u)Firusiyi	([r]+u)ɸu:san	(r+u)Firusan
(ry+u)turyuri	(y+u)tuyui; tuyuyi	(y+u)tuyun	(y+u)tuyun tuyin

南島語の子音移動表

南島方言史攷

一六

以上、七方言の音韻の比較によつて、たとひ多少の例外はあるにせよ、それらは大方類推アチロキで説明することが出来るから、南島語に於ける音韻變化ラットニエシクシフシクセツの法則は、これで成立するわけである。

三

右に擧げた音韻變化に、幾分漏れたのがあり、其次方言等にも、多少異つたのがあつたが、それらは他日増補することにして、ここには口蓋化の法則の説明に、少しく蛇足を附して置きたい。沖繩語に口蓋化（若しくは濕音化）の現象の起つたのが、専らe・oの消滅に原因する事は、以上述べた事で塌きてゐると思ふが、チェンバレン氏の言へる如く、南島語に最初からe・oが無かつたとしたら、iと合して音節を形づくるch等の口蓋音が原音であつて、國語の「ケ」に當る音節の子音k等はそれから變じたことを説明するに、困難を感じるのみならず、大島・徳之島及び宮古八重山の方言に於けるi・iの對立を説明するにも、等しく困難を感じるに違ひない。思ふに、グリムやポツプの原始三母音の説に暗示された氏は、國語で古くuであつたものが、後にoと發音されるやうになつたり（nu→「の」、yuri→「ゆり」）、ai・iaからeになつたり（nagaki 嘆→nageki tatiari 立ちあり→tatiari）したのを見た矢先、偶々所謂姉妹語なる琉球語に、e・oの缺けてゐるのを發見して、原始國語でもさうであつたと類推されたが、琉球語に於けるe・oの消滅の、假名の採用以後に起つたことが闡明されると、記紀萬葉等に現れた僅少の例證だけで、之を斷定するのは、少しく困難になつて来る。（眉・擘は古事記及び萬葉等にマヨ・モコとなつてゐるやうに、オモロにも同様の例があることを知らなければならぬ。）假りに、原始國語三母音説は成立するとしても、琉球語が西曆紀元前三世紀の頃所謂祖語から分れ出たといふ氏の説は動搖せざるを得ない。それは琉球語の單語が、一見したところでは、國語と縁遠いやうな氣がしても、音韻轉換の法則を參酌すれば、殆ど同語根のもので、しかも其の音節の數も、十中八九迄國語のそれに等しく、祖語から直接分岐したとするには、餘りに國語に接近し過ぎてゐるのでも明かである。さうかといつて、山田孝雄博士が、『奈良朝文法史』中に、吾は「わ」「われ」といつたのは萬葉期以後のことと、この期以前には「あ」「あれ」で、琉球語の第一稱も亦「わ」であるのを見ると、「あ」の古形は日本・琉球兩國語の祖語にあつた筈だから、琉球語は完全に「わ」の勢力の成立した時期に分立したのではないか、といはれた説にも賛成しかねる。「あ」は現に沖繩島の北部の方言にもあり、オモロ及び宮古島のアヤゴ（四百年前のもの）にも見出されるから、琉球語の分立の時期はもつと溯らなければならぬ様な氣がする。又推古朝に南島人が來朝した時譯語を置いたところから考へても、當時は分立してから可なり年數を経過してゐたと見なければならぬまい、（語音翻譯釋義「我是日本國的人」オハヤチノヒトの項參照）なほ又それは音韻變遷の方面からも垣間見ることが出来る。PからFへそしてFからHへと國語が二三千間に進んだものが、現在南島に縮寫されてゐるのを見ても頷かれよう。早い話が、沖繩島の北部（P、別にHがあるが、これはKの代りに用ゐられるも）・宮古八重山（P、別にFがあるが、これもFの代りに用ゐられるも）・鬼界島の片田舎手久津久（P、F、この附近では、兩者の中間音も聞かれ、Hもあるが、これはKの代りに用ゐられる）では多少の相違はあらうが、大分「大」をupu、「多く」をupukuと發音し、沖繩島の中部及び南部（HF）奄美大島（HF）では、「大」をuFu、「多く」をuFukuと發音することだ。就中Pの消滅した首里・那覇でも、現に「吸ふ」をsipuyun、

「鹽辛^{しんか}」を shipukarasa、「つぼたる」を shiputayun、「濡垂^{ぬた}る」の副詞形を sipitu (supitu) とらつてゐるのは、ハ行の古音がPであるといふ説を否定する論者を狼狽させる有力な例證であらう。それから、PFが原始國語時代から併立共存してゐたと主張する學者も、Fを有つてゐない沖繩島の北部の人たちが、「那覇^{なは}」等の如きF又はHを有する固有名詞を發音するに際して、其の持合せのHを以てせずして、Pを以てすることを念頭に置かなければなるまい。(「語音翻譯釋義」序説参照)

要するに、琉球語が、既に日本語といふ混成語が日本本土で形成されて、しかもFの未だ發達しなかつた時代に、其の日本語から分れ出たことだけは推測するに難くない。だが、そこにはなほいくつかの解きにくい謎が残つてゐる。萬葉時代には「玉の緒」の説の如くには規則正しからずして、古今時代に至つて「玉の緒」の理想とする如くになつたといふ、係結そつくりの語法が、オモロ中特に首里及びうらおそい(浦裏即ち國を治めるの國都と思はれる所)のによく見出されるのも、その一例である。これはどう説明したらいいか。國語の搖籃期に手をおかつた二つの言語が、長い世代の間に別々に發達を遂げたが、琉球語の環境も日本語のそれと略々似通つてゐた爲に、發達の結果は偶然一致するやうになつたなど、と「偶然」を考へるのも科學的ではない。オモロの内容によつて、平安朝から鎌倉・室町の二期にかけて、日琉の交通が頻繁であつた事がわかり、又其の用語中に、大和言葉のかなり借用されて居るのが見られるが、單語の借用ならまだしも、係結の如き語法の借用に至つては、單に文化の交渉といふだけで説明することは六つかしい。或はこの説明には太古に於て琉球人の祖先が南島に移住したと同様なことが、中古以後にもあつて、さうした移住者の群れが、政治的社會的に勢力を得た

結果、起つた現象であると假定するのがいゝかも知れぬ。現にオモロの中にも、又重なる島々の傳承にも、それらしいのが見出されるから。(萬葉集講座拙稿「萬葉語と琉球語」中「す、しよ」の項参照)

それは兎に角、琉球語は、一部の論者の稱へる如く、國語の方言とするには、餘りに特殊な發達を遂げ過ぎたやうに思はれる。つまりは、語音が變化した程度には、語法其他も變化したのだから、其の中に所謂祖語或は原始國語の佛を見ようとするとする人は、恐らく期待を裏切られるであらう。薩摩の歌人八田知紀の門下でも鏘々の名があつた、琉球最後の政治家宜灣朝保は、明治の初年『琉語解釋』を物して、其の序文中に、「古事記傳萬葉集などを見るに、日本上古のことは爰には今も多く残り」といつてゐるが、此頃私は各地の方言集をよりに読んでいく中に、日本々土ではとうに死語となつたもので、南島にのみ遺つてゐると考へてゐたものがそれらの方言特に東北方言にあるのを見出して驚いてゐる。(「フカダチ考」一名下病を意味する琉球語の研究参照)なるほど南島には、原始國語の音韻・單語・語法を髣髴させるものもあるに違ひないが、これらの材料を以て原始國語を再構せんと試みる時、其の中から分立後に發達したものを選分けるのは、容易な仕事ではなからう。

四

話は再び前に戻る。口蓋化が起つたお蔭で、琉球の標準語だつた首里語が、フランス語や北平官話などのやうに柔くなつて、一入優美になつたことは事實で、この音韻變化が故なくして起つたものでないことは、最早繰返す必要もあるまい。ただ茲に附加へて置きたいことは、所謂「首里親國」(オモロ時代には、首府の義に用ゐられたが、現今では貴族の屋敷の

意に借用さるる)の言葉が如何にして浮彫的になつて、標準語の位に即き得たかといふことである。首里語が其の前身から一本調子で發達したもので無く、沖縄本島の各方言から單語其他を攝取して、肥太つたものであることは、「首里親國」の出來たいきさつを見たら、容易く領かれよう。琉球史の語る所によれば、四百年前第二尚氏の第三世尙眞が、中央集權を斷行して、三山(西曆十四世紀の初葉、中山・南山・北山の三國に分裂し、たが、十四世紀の初葉に至つて、中山に統一せられた)の按司部(もちやらとも云ふ諸侯の義)に首里在住を命じた時、首里を三平等といふ行政區劃に分けて、彼等を別々に住居せしめ、在來の首里人と雜居させて、其の首里化を計つたが、この時各地の方言が首里語に混じたことはいふまでも無く、それから七十年たつて、島津氏の琉球入の頃には、首里語はもう十分改新されてゐたと見ていい。(「蠶蝓の琉球語」參照)かうして出來上つた標準語は、當時(西曆一六二〇年)浦添なる尙寧王父祖の墳墓に建てられた、琉球文で書かれた最後の金石文(「ようどのひのもの」と紙一重のものであつたに違ひない。この金石文は、假名遣・單語・語法の點から、略オモロのそれと一致してゐるが、それから九十年後に編纂された琉球内裏言葉の辭書『混効驗集』の序に、この時代の言葉が、解し難い「みせせるの言葉」(形式化された神の言葉の義で、オモロの別名として用ゐられる。ここでは優美なる古語の義)にされてゐるのを見ると、島津氏の琉球入から一世紀もたたないうちに、琉球語に一大變化の起つたことが窺はれる。これは廢藩置縣より僅半世紀にして、琉球語が國語の影響を受けて、甚だしい變化をなし、年取つた人たちの言葉が、若い人たちには既に一種のクラシックになつてゐると好一對である。

かうしてリファインされた「みせせるの言葉」は、沖縄本島内は勿論のこと、宮古・八重山及び奄美大島等の屬島にも傳播して、各方言に大なる影響を及ぼした。これらの方言について、實地調査をして見ると、文化的

に首里語に遜るところから、絶えず其の影響を受けて、夥しく單語其他の借用はしてゐるが、でも音韻組織の異なる所では、音韻だけはなかく借用しないで、之を自家の音韻に直して使用してゐるといふ面白い現象が見られる。兎に角、かうした實地調査を思ひ立つ人は、これらの方言に大影響を與へた首里語を無視することなく、豫じめ比較すべき肝腎な二三千語を其の中より選定し置き、それにオモロ及びアヤゴ等の古語をも加へて臨んだら、横の研究のみならず、縦の研究をも爲すことが出來て、學界を益することが多からうと思ふ。試みに一二の例を擧げて見る。首里人が、宴會の席などで座をはづして、誰かに、*kan chà ndi* (中頭郡の東海岸の西原村では、*kan*)といつてゐるのを能く聞くが、これは「一寸來てくれ」といふほどの意で、那覇の方言には絶えてない言表し方である。しかも *kan* の意味は首里語でもわからなくなつてゐるが、大島・徳之島の方言で、「此處へ來い」といふことを *kan kù* といふから、*kan* に「此處へ」の義のあることがわかと共に、この言表し方の三百年前からあつたことも知れる。これはオモロには見出せないが、往昔國王が祭禮のため隔年久高島に渡海した頃、歌はれたといふ、「御嶽内並御嶽御殿にてのこゑにや」で、渡海中風波の荒れたことを描寫した所に、「夕どれか、んちやで」(夕風よ、いざ來たれの義)といふ文句が見えてゐる。(拙著「おもろさうし」國語の久高島參詣は、琉球入後間も無く廢されたから、このこゑにや(オモロの姉妹詩)は、三百年前のもので、かんちやで(*kan chà di*)が、*kan chà ndi*の古形であり、もつと古形は *kan kya di* であることがわかる。序にいふが、*ch* > *ndi* は國語の「と」に當る助辭である。今一つ、オモロ時代に、「迄」を意味する語に、「がめ」と「がで」とがあつたが、沖縄本島では早くも消滅して、前者(*gami*)は宮古島に、後者(*gadi*)は大島及び徳之島に遺つてゐる

といふこともある。八重山の民謡中には、「ぢやで」がたゞ一つ見出される。かうして、或單語や言廻しが、慶長以前からあつたか、それとも其以後に出來たか、一寸判断に苦しむ時など、奄美大島の方言が、簡単な年代表になつて、南島語の史的研究に旁證を提供することがある。(「東風と死人の頭痛」参照)

それから、こゝで琉球の標準語の出來上つた経緯を琉球音楽が大成されたそれと比較して見るのも、無益なことではなからう。「おもろさうし」は中央集權を行つてから一時代後に、各地方の民謡を採集して、編纂したもので、中央のはもとより、各地の祭禮(及び遊び)の時に謳はれた神歌かみうたが、大部分を占めてゐるから、方言が首里語に攝取されたと同様に、其の曲節が中央のに取入れられたことも、容易く想像することが出来る。これが漸次發達して、今から二百年前の琉球の文藝復興期に、所謂琉球音楽は大成されたが、其時首里の音楽者たちが更に各地の曲節を取入れたことは、その曲節の名が今にその發生地の名で呼ばれてゐるのが多いのでも知れる。かうして出來上つた音楽も亦標準語が傳播した跡を追うて、各地に流れ込み、俚歌などの曲節に大なる影響を及ぼした。しかも所謂「みせゝるの言葉」が慶長以後は奄美大島諸島の方言に影響を及ぼすことが出來なくなつて迄も、琉球音楽は旅行者たちに運搬されて、遠慮なくこの舊領土に入り、所謂「道の島」の津々浦々で歌はれてゐるといふ有様である。

だが、首里語の進化したいきさつを、琉球音楽が大成されたと同一視して、之を「首里親國」の爲政者たちが、矢鱈に各地の方言を取入れ、無闇に口蓋化したりなどして磨上げた、一種の人造語に過ぎないと速断してはならない。人によつては、この口蓋化を特に人爲的のものとして、毛嫌ひする向きもあるが、再三繰返した通り、それは専らe oがそれ／＼i uに合併した結果起つた自然の現象で、等しくe oの消滅した鬼界島及び沖永良部の二方言に、同一の現象が有つて、i iの對立してゐる宮古・八重山及び大島・徳之島の四方言に、其の殆ど無いのを見たら、思半ばに過ぐるものがあらう。尤もこれらの四方言に於ても、oはとうの昔消滅したので、(今日大島・徳之島の二方言中に見出されるoが、慶長以後の鹿兒島語の影響であることは、鹿兒島語から借用した單語に多いのを見ても知れる如く、それは音韻變化では無く、音韻の借用であると見なければならぬ。)従つて在來のウ列の子音の口蓋化する傾向は、古くから幾分あつたと思ふが、在來のイ列の子音其他に、時偶口蓋化したのがあつたのは、隣接鬼界島及び沖永良部の方言の影響と見るよりも、琉球王國の配下にあつた頃、當時の公用語であつた首里語から受けた影響と見るのが穩當であらう。この點から見ても、沖繩語でe oの消滅した時代の、慶長以後でないことだけは明かである。試みに、文獻を辿つて、その推移の跡を瞥見してみよう。

五

e oがそれ／＼i uに變つたのは、一足飛では無く、漸次的であつた筈だから、いつ頃から變り始めたかは知る術すべも無く、オモロ及び金石文の假名遣を調べて見ても、エ列とイ列との、又オ列とウ列との區別が判然してゐるので、子音の口蓋化若しくは濕音化は、殆ど見出すことが出來ない。西曆十五世紀の中葉(即四百五十年前)のオモロに、歌舞を意味する「遊び」を「あすび」(今では更に轉じてあそびになつてゐる)とし、「九

年母^{はんぼ}」を「く^くにぶ」とした例があるが、これは二百二十年前(清の康熙四十九年)、首里王府で『おもろさうし』を寫替へた時、當時の發音法が累して、無意識的に誤寫したと考へれば考へられないこともないから、之を以て直ちに創作當時、e o がそれ／＼iu になつてゐた、と斷定することは、控へ目にしよう。ただ明の嘉靖六年(西曆一五二七年)に、第二尙氏の菩提寺なる崇元寺の門前に建てられて、今なほ遺つてゐる、琉球文で刻まれた下馬牌中に、「こま」(此處の義)ともいふべき所が、「くま」になつてゐるのは、注意すべきことで、この唯一の例でも、四百四年前に、o が u に變じてゐたことを證明することが出来るのみならず、e が i に遷つてゐたことも、類推することが出来、従つて、口蓋化の起つてゐたことも想像することが出来る。序に言ふ。大正十四年十一月雜誌「民俗」創刊號に、「琉球語の母音統計」を草した時、「鋭敏な耳をもつて居られた琉球研究の先驅者田島利三郎先生は、o から來た u と在來の u との間には、いくらかの區別がある、と主張して居られた。二度も琉球へ渡られた折口信夫氏も、沖繩の車夫のフーウ(何で御座いますか)、ウー(はい)は變な音だといつて居られる。折口氏ばかりではない。琉球へいつた内地人は、誰でもこれを變な音だといふ。もしこの u が國語のウと全く同一のものであつたら、聞いて變に感じないだらうに、變に感ずるのは、既に價値の違ふ證據ではなからうか。この u に就いては、はつきりしたことはないが、國語のウより少し開いた母音であるといふこと丈はいへると思ふ」といつたが、これは近頃小幡博士の實驗によつて證明された。

なほこれより以前のもので時代の判然わかつてゐるオモロ中に、口蓋化した例を求めると、初めて明に通じた中山王察度を謳つた、十四世紀中葉のオモロに、「なちやる」(産したる)、「おちやる」(置きたる)の二語が見えてゐる。前者は「し」の影響で、「た」が口蓋化すると同時に、二音節が結合して「ちや」に約つたもので、エ列から來たものと區別する必要上起つた、所謂口蓋化の例にはならないが、後者は在來のイ列の「き」が口蓋化した結果、「た」が同化されると同時に、二音節が結合して、「ちや」に約つたもので、所謂口蓋化の例と見ることが出来る。これで見ると、e が i に合併したのは、かなり古いやうにも思はれる。

それから約一世紀後(西曆一四六九年)、琉球國王の位に即いた、第二尙氏の太祖尙圓を歌つたオモロに、「賜ひて」を意味する「わちへ」といふ語が一つ現れてゐるが、それから三十年ほどたつて、其の子尙眞を謳歌した、數首のオモロには、「追手」(順風)を「おちちへ」と書き、又「わちへ」を「わちち」とも記してゐるのみならず、同時代に王城附近に建てられた「眞珠湊之碑」中にも、「わちへ」が五ツ程あらはれ、其の後の金石文にも澤山あらはれてゐるのは、注意すべきことである。この「ちへ」若しくは「ちち」が、「て」の口蓋化したもので、「ち」と區別する爲に、殊更に「へ」若しくは「ち」を添へたものであることは、いふまでもないが、其頃「き」の口蓋化して e: になつたものが、勢力を得てゐた爲に、其の類推でエ列から來たものにも、多少口蓋化が起つてゐたと見ていい。因にいふ。オモロ及び金石文には、「え」の假名はひとつも現れず、其の代りに「ち」若しくは「へ」が用ゐられて、しかも「ち」は語頭に限つて用ゐられ、語頭及び語尾の場合には、「ち」も「へ」も用ゐられてゐるが、e が i に合併しながらも、在來の i との間に、なほ幾分開きのあつたことは、既に述べたことで明白だから、「ち」がエ列から來た e: を表記する外、「え」の代りにも用ゐられたのは、とりもなほさずエ列がイ列に歩み寄つて、全然一致した時、後者の子音が口蓋化して、前者の子音と區別した如く、等しく重り合つた兩母

音がそれ／＼一音節として用ゐられる場合に、自ら區別する爲に起つた現象で、在來の*i*が原形のままで止まつたに對して、*e*から來た*i*は已むを得ず口蓋化して、*yi*になつたといへる。これは現代琉球語で、*e*から來た*i*を例外無く、*yi*と發音し、從つて沖繩縣人が標準語を繰る時、*e*を悉く*ye*と發音するのも明かである。(鬼界方言でも亦同様である。)之に反して、*o*から來た*u*と在來の*u*とは、オモロ等の寫語法では截然區別してゐても、「え」と「い」との場合のやうに、發音上判然した區別のあつた證據は一つも見出し得ず、一時代前には、年取つた人たちの發音では幾分開きがあつた、と田島利三郎氏はいはれたが、今ではもう何等の差別もないやうになつてゐる。又例のオモロ中には、一首の中に、「爲て」を意味するのが、「して」と「しちへ」との二形あつて、並び用ゐられてゐるから、當時は音韻の動搖時代で、口蓋化の現象がかなり現れてゐたことを垣間見ることが出来る。然るに、例の「ようどのひのもの」に、古い寫語法オトクライが用ゐられてゐるのを見て、口蓋化の慶長以後に起つたものではないかと疑ふ人があるかも知れぬが、音韻は變つても、寫語法の依然として元のまゝである場合が多く、寫語の習慣の變改の時期は、發音の自然的變化よりも後れるのが普通であることを知らなければならぬ。

六

さてかうしてオ列がウ列に合併し、エ列がイ列に合併した結果、同音異義の語が倍加したわけだから、それから起る混亂を避けんとして、在來のウ列及びイ列の子音に口蓋化若しくは濕音化の起つたのも偶然ではない

が、後には其の類推によつて、エ列又はオ列から來たもの、さてはア列にも、餘計な音韻變化が起つて來た。左に二三の例を擧げて見よう。「今日」が *keFu*→*kewu*→*kiyu* と變遷したことは、文獻の徵すべきものがないが、*kiyu*→*kyū*→*chū* と推移したことは、クラシカルな歌を謡ふ時、古風に *kiyu* と發音してゐるのみならず、今なほ *kyu* と發音してゐる方言がかなりあるのでも明かである。但、エ列から來た「る」を *wi* と發音するに對して、在來のイ列の「る」を *yi* と發音するやうになつたところから類推して、*wo* から來た *wu* と區別する爲に在來の *wu* を *yu* と發音するやうになつたといへるから、*kiyu* の前の形が *keFu*→*kewu*→*kiwu* で、南島に移住した當時は、*kepu* と發音してゐたことが想像される。(けふを口語でキユと發音した時代が實際あつたのではなく、歌をうたふ場合に、*kyū* と長母音にしては、具合が悪いので、キとユと此の二音節に分けたといふことを後で氣がついた。「語音翻譯釋義」今日エオの項参照)なほまたそれは現に *upu* (大) *siptym* (吸ふ) 等が遺つてゐることからも類推される。して見ると、此語は少くとも四變遷を遂げたといへる。「如何」は *ika*→*ikya*→*icha*→*cha* と四變遷を遂げた。これはオモロではすべて「いきや」になつてゐるが、糸滿の方言では *ika* で、最古の姿をとめてゐる。萬曆頃に編纂した華夷譯語中の琉球譯語には、「多少」(いくら)を「一加撒」と音譯してあつて、二百年前は首里でも *ichasa* と發音したことがわかるが、糸滿では *ikasa* といつてゐるから、此語もやはり *ikasa*→*ikyasa*→*ichassa*→*chassa* と四變遷を遂げたと見ていゝ。序でにいふが、*ichassa* 等の語頭の *i* が脱落したのは、アクセントがそこになくして、第二音節にある爲である。「板」は今でも *ita* と *icha* とも發音して、二者併存してゐる。オモロには、「板門」といふ複合語は、すべて「いちや

「ちや」と寫してあるが、これは「ちや」の影響で、「た」が口蓋化したのである。「力」を年取つた人は、*chikara* と發音し、若い者や婦女子は、之を *chichara* と發音して、二者併存してゐる。これは類推作用で前者から一足飛に後者に移つた一例で、比較的近代の音韻變化に屬するが、標準語の影響で、若い者はまた *chikara* と發音するやうになつてゐる。

首里語及び之と同一の母音組織を有する方言に於て、混亂を防ぐ爲に出來た折角の口蓋化は、その使命を全うした後に、暴威を振つたので、再度の混亂を引起す原因となつた。いはゞ、言語に疾病が起りかけたのである。だが、紛れ易い單語を他語に言換へるといつたやうな應急手當を施さないで、母音の長短、聲の上げ下げの子音の清濁及び有氣・無氣等の音樂的要素を用ゐて、之を生かすつ、いろ／＼と加工することによつて、この混亂を防ぐことが出來た。加之、この音樂的要素は、語法の役割をさへ演ずるから、重要視すべきものであることはいふまでもない。

終りに、琉球語の特徴ともいふべき音樂的要素を一瞥して、この稿を結ばう。e が i に合併した結果、沖縄語では、神・龜・龜・人名の龜等は、等しく *kami* になるわけだが、神は *kami*、妻は *kami*、龜は *kami*、人名の龜は *kami* として、混同を防いでゐる。それから、「監督者」も人名の龜と等しく *kami* であるが、前者は第一音節に、後者は第二音節に、アクセントを附けて、區別してゐる。右の場合と少々趣きは違ふが、松は *matsi*、松林は *matsi*、人名の松は *Matsi* である。しかも *Matsi* は、愛稱の時には *Matsi* となり、鄙稱の時には *Mutsa* となる。「酔つた人」を *witchu*、「醉拂」を *witah*、「酒にひたつてゐる人」(たとひ醒めてゐる時でも)を *witah* とするのと同じ事である。*kkwa-muchi* には「子福者」の義があるが、語尾を長く引張つて *kkwa-muchi* にすれば、「子供をつれた女」の義となり、語尾を *a* にかへて、*kkwa-mucha* にすれば、「子持節」といふ歌の節の名になる。人の姓は、*Yamada* (山田)といつたやうに、結尾を短母音にすれば、尊敬の言語情調が伴ひ、*Yamada* とつたやうに、語尾を引張れば鄙下する言語情調が伴ふ。だから、「此の方は山田さんと云ふ方です」は、*Kumá Yamada yamishébin* といふやうにして、山田の下に、さんに相當する敬稱などを附けるに及ばない。序でにいふが、*kumá* は *kuma wa* → *kuma ya* → *kumá* と變化したものである。未然形若くは已然形につく形式語の *ba* も變化して *wa* となり、更に *w* が脱落して、上の實辭に融合してゐるから、語尾が長母音になる時には、其處に形式語の *ba wa* のひそんでゐる場合のあることを知らなければならぬ。*aka bana* は赤い花といふ普通名詞であるが、*akabaná* とすれば、佛桑花といふ固有名詞になり、「直ぐ」は *sign* であるが、*sign* と語尾を引張ると、「そのまま」の義に變ずる。「木」は元來イ列のもので、*chi* に變すべきものが、オモロ以來 *chi* になつてゐて、「毛」から來た *chi* と混同する恐れがあるが、前者は調子を高くし、後者は調子を低くして、區別するやうになつてゐる。姓や位階に聲の上げ下げをつけて、尊鄙を區別することがある。例へば、私の祖父は「伊波親雲上」と稱したが、伊波は其采邑の名で、親雲上は位階の名である。くはしくいふと、姓は魚氏だが、伊波村の地頭になつたので、その采邑の名を家名として、さう稱したのである。そして琉球の士族は二十三歳から三十歳迄に黄冠に敍せられて、親雲上と稱したから、その家族の男子も等しく「伊波親雲上」と稱することが出來たが、等しく *Iba pchin* と稱しながらも、両者は音調で區別して、發音

しなければならなかつた。即ち、前者は *ʔfa pə'ehin* とつたやうに、家名と位階との第一音節の調子を高く發音し、後者は *ʔa pə'ehin* といつたやうに、位階の最後の音節の調子を高く發音しなければならなかつた。それから「起る」は *ukariyūn* であるが、第二音節の無聲子音を有聲子音にかへて *nguriyūn* にすると、「再發する」(ぶりかへす)の義となる。「歸る」は *kəyūn* であるが、語頭の *k* を *g* にかへて、*gəyūn* にすると、「還俗する」の意となる。「名残」は *naguri* であるが *r* が濕音化して *naguyi* になると、「餘波」の義となる。物體や死人の「軽い」のには *gassan* 又は *garusan* といひ、「洗骨する」のには *garuku nayūn* (軽くなるの義)といふが、負擔や病氣などの「軽い」のには *kassan* といひ、「産する」のには *karūnyūn* → *karunūn* (軽くなるの義)といふ。母音の開合によつて、一語から異なる意義の分化することもある。「探す」は *sagahūn* で、第二音節の *a* が小さくなると同時に長母音となつて *sagahūn* になると、「隈なく探す」の義となる。又「偉い」「圖太い」は *yakari* で、「やかましう」「うるさう」は *yakari* であるが、後者は戯曲や歌謡中に遺つて、現今では使はないやうになつてゐる。有氣・無氣で區別することについては、鬼界方言等の場合に述べたから、茲には贅しない。

兎に角、かうしたことは、語彙が貧弱で、其の上文字の無かつた古代に於ては、最も必要であつたと思はれるから、恐らく原始國語より承繼したもので、萬葉以前の、否、其以後の、國語に於ても、等しく用ゐられたと想像することが出来る。古くは本居宣長・石塚龍麿、近くは大矢透・橋本進吉等の學者が、紀記萬葉の假名の用法を研究して、同一の漢字でも通用するものと通用しないものがあつて、自ら二つのグループにわかれてゐることを考證したのを見ても、當時發音に相違のあつたことは確であるが、この發音の相違といふことは、開合の差異以外に、四聲を利用してあらはすアクセントの差異などは含まれてゐないだらうか。

(昭和五年七月一日稿)

〔附録〕 沖縄方言では、ハ行音の場合に、エ列から轉來した音節と在來の音節とが全く區別し難くなつてゐるが、それについて、目下沖縄島の北部國頭郡の方言でどうなつてゐるかを、同方言の研究者仲宗根政善君に問合せたら、左の如き報告に接した。

東海岸の久志村字邊野古の方言では「ヒ」は殆ど無氣音の「フ」で、(萬國音標文字で表す)

'piruɟajɪŋ	廣がる
'piruɟiŋ	廣げる
'pi:rakiŋ	ひひらく
'piniŋ	繕る(ひねる)
'piɟiraʃiŋ	冷やす
'pirakiŋ	開く
'piŋ	簸る
'pi:	火 暇
'pima	晝 睡
'piru	なぐる
'piʃiɟiŋ	左 山羊
'piʃaɟi	山 額
'pi:dʒa:	足 薄い
(pʰtʃe)	足 珍しい
(pʃa)	息 喘息
'pissaŋ	油 虫
'pirumaʃaŋ	
'pimiki	
'pira:	

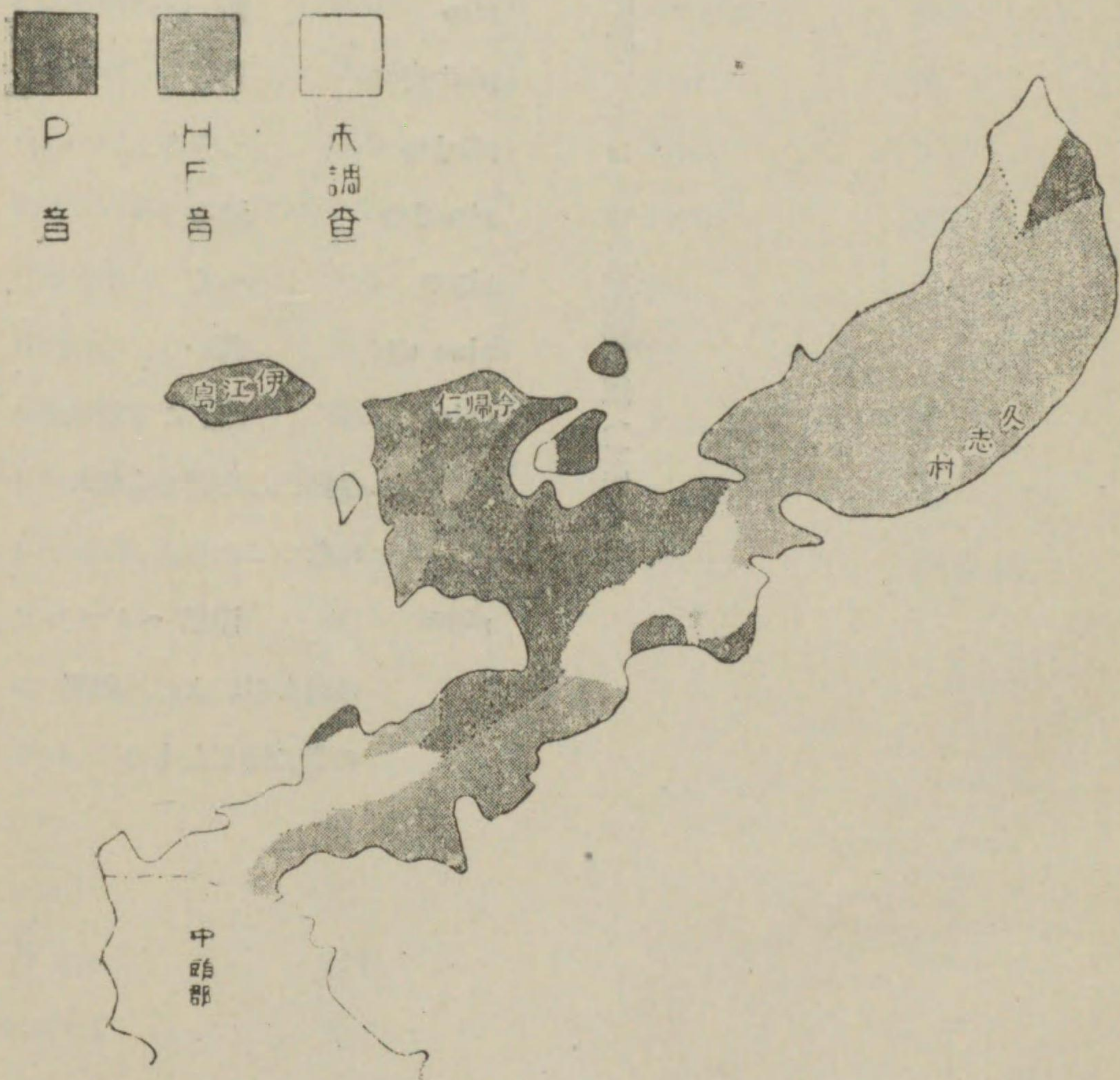
pi:	屁	となり「く」(y)は悉くpiで
pida'tiju]	隔てる	
piri	縁(へり)	
pi'ta:	下手	
pira	鱗(へら)	
pini'giju]	逃げる	
pire'ju]	つき合ふ	
pina:ju]	減る	
piʒu]	へぐ	
pi:sa a]	寒い	
(piru)	蒜、この語は今歸仁の方言でも例外になつてゐる。	
piŋgu	竈黒(へグロ)の義から、よごれ鍋墨の義に轉じたもの	

となつてゐる。
御参考までに國頭郡に於けるPHF音の分布圖を添へて置く。

'tju:ga'ju]	廣がる	西海岸に横たはる伊江島方言では「ヒ」(bi)は悉くpiで、
'tirumaju]	廣まる	
'ra'tʒu]	開く	
'tʒu'ju]	冷える	
'ira'tʒu]	ひひらく	
'in'ju]	ひねる	
tʒiʒu]	撲る	
tʒ'kke:raʒu]	ひつくりかへす	
tʒ'tʒaju]	光る	
ti'tʒu]	引く	
tirusa a]	廣い	
tiʒuru:sa a]	冷い	
tiruma:ʒa a]	珍しい	
tiʒa	足	
ti:	火	
tima	暇	
tiru	晝	
tiʒaji	左	
t'i'tiʒa	山羊	
tini'tʒi	喘	
tiʒi	鬚	

となつてゐる。

Fi:	屁	となり、「へ」は殆どFi又はFiで
(Fira]	つきあふ	
(hire]	(オモロ、へらふ)	
hinaju]	減る	
Firi	縁	
Fita:	下手	
Figi]	剥く(へぐ)	
(Fi]	だぶをこね	
(hi]	ること	
Fi:sa nu	寒くて	
Figgu	垢(へぐろ)	
(hiru)	蒜(ひる)	



海東諸國記附載の古琉球語の研究

—— 語音翻譯釋義 ——

序 説

申叔舟の『海東諸國記』の附録に、古琉球語の見本として、『語音翻譯』の收めてあることは、小倉博士の『朝鮮語學史』にも見えてゐるが、言語誌叢刊の一冊として、刀江書院から出た、東條操氏の『南島方言資料』中に、其の全部が寫真版（内閣文庫所藏の朝鮮版より）となつて現れたのは、琉球語の史的研究に、新しい光を投ずるものである。

『海東諸國記』には、成化七年の序があり、終りが琉球國記になつてゐて、國王代序・國都・國俗・道路里程を記し、端に海東諸國記終と書いてある。目次には見えてゐないが、其次に畠山殿云々の記事（成化九年九月初二日啓とある）が八枚ほどあり、更に琉球國の見出しがあつて、地理・風俗・言語等の十四項が收めてある。そして琉球國の最後の項は、所謂語音翻譯で、終りに弘治十四年四月二十二日の日附がある。

『語音翻譯』は、實に今から四百三十三年前の所輯で、十六世紀初葉に於ける琉球口語の唯一の見本として、同時代のオモロ及び金石文と共に、琉球語の史的研究に缺く可からざる好資料である。

左に『李朝實錄』卷第四十「燕山君日記」中の記事を引用して、この語彙採録の經緯を瞥見することにしよう。

(即位七年大明弘治十四年正月十日、己未禮曹啓琉球國使臣初到浦言一船三百五十人二船七十人三船三十人柴水船二十人合四百七十人而本國人則上副官人并伴從人二十二人已今接待三船每一船只待四十臣按海東諸國記日本琉球使臣過海糧只二十日今琉球國使臣回還時依此例給之則乖厚往之義且己亥年濟州人金非乙介等三人漂到琉球國回來時其國給三朔糧錢一萬五千文胡椒一百五十斤糧米五百六十斤以遣彼之待我國漂流人猶如是豐厚今其王使之還只給二十日之糧無奈薄乎傳曰其議于政丞等

(十五日) 甲子 王接見琉球國使臣梁廣梁椿于仁政殿

(二十二日) 辛未命宴琉球國使臣梁廣等於慕于館○兵曹判書李季同啓琉球國使臣世祖朝來聘今年重來其國之風土人物世代之詳知請令宣慰使成希顔從容詳問書于海東諸國記之末以備後考傳曰可

(二十七日) 丙子 啓琉球國使臣過海糧只給二十日海東諸國記曰日本琉球使臣過海時並給二十日之糧雖然使遠人自備其糧於事體何如

(三月二十八日) 丙子 正朝韓斯文金玆還自京師啓提督會館禮部主事劉網上書云外國人防禁出入夷情憤怨慮恐生事請依前例諸國夷人則五日一次許出買朝鮮琉球(球)之誤)二國頗知禮義自行買賣先爲便益朝廷許之

これは三月末日までの記事で、其後には見出せないが、多分四月に入つてまで居たらしいから、約三ヶ月間も滞在して、非常に歡待されたことがわかる。この記事を見ると、世祖の朝琉球の使節が來聘した時には、彼の國狀を詳しく聞くことが出来なかつたので、特に接待係の成希顔に命じ、ゆつくり聴取らせて、「海東諸國記」の卷末に附した經緯が能く知れる。これがとりもなほさず例の十四項で、其の第十二項に

有天地壇凡祈禱必祭之奉使他國者諸壇焚香取香灰吞之誓曰我國之事當不說於彼云云然後發行

とある如く、その真相に觸れるのは至つて困難であつたと見えて、各項長いのが四行、短いのは一行為、たゞ差支のない語彙の一項のみが多く採録されてゐる。

音譯には諺文が用ゐてあるが、諺文の制定(海東諸國記の著者の)より半世紀しかたゝないから、最古の字體が使つてなければならぬ筈なのに、中に千七百八十一年に改正した字母が見出されるのは、後世翻刻した際印刷の都合上、新體に代へたと見ていゝ。音韻・單語・語法等の研究から、これが南島の標準語なる首里語で、使者一行を利用して、採集したことは、實録中の記事によつて明である。諺文は表音文字で、しかも朝鮮語には音韻の變化が少なかつたから、音韻變化が甚だしい結果、寫音法と後世の讀み方との間に、大なる開きの生じた、オモロ及び金石文の當時の發音を知る上に、「語音翻譯」が多なる便宜を與ふべきは、言ふまでも無い。

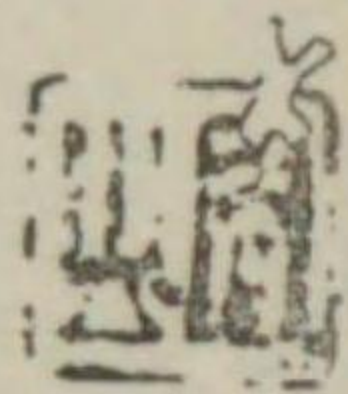
一 語音翻譯

你是那裏的人	우라노마피쥬	我是日
本國的人	안야마도피쥬	你的姓甚麼
우라나와이개우가	你的父親有麼	우라아샤아리
우라아샤아리	你哥哥有麼	우라신자

本 庫 文 閣 內



琉球館譯語
天文門



天日月風雲雷雨雪霜

旬尼 非祿 都及 盛集 姑木 刊每那立 嗑七 由乞 波失 失莫

かつて「海東諸國記附載の古琉球語について」(國語と國文學)の一篇を草して、古琉球語の發音について述べ

た時、私は故オールソン教授の説を無條件で採用して、「華夷譯語」中の「琉球館譯語」を「語音翻譯」より一世紀後のものと比定したが、前者の語彙中に、古格を有する神歌サセウの用語と一致するもの多いに気がついてゐた

矢先、石田幹之助氏の「女眞語研究の新資料」(桑原博士還曆記念)にサヂェスチョンを得て、兩書の音韻・單語・語法を具さに比較研究した結果、前者が後者より却つて一世紀も古いといふことがわかつたから、序に訂正す

る。詳しくは本書所載の拙稿「日本館譯語を紹介す」を見て頂きたい。兎に角、主として「天」・第一人稱の代名詞「我」・主格をあらはす互爾遠波「は」を比較して見たのであるが、これが「語音翻譯」ではそれ々々旬尼(tin) 晷(wan) 叶(ya)で、現今の口語と同様になつてゐるのに對して、「琉球館譯語」では、それ々々旬尼(tini)・昂(ang)・哇(wa)となつて、オモロ(主として例を洪武永樂頃のものに取つたが、韻文だから萬曆前後のものも之と大差はない)と一致してゐることから、「琉球館譯語」があべこべに「語音翻譯」より一世紀も前のものになつて了つたのである。なほくはしくは、釋義の所で述べる積りである。

さうすると、縦に十五世紀の初葉と十六世紀の初葉との琉球語の見本が提供されたわけだから、之を横に並列された諸方言と照合せて研究すると、第一オモロの読み方がはつきりして來るばかりで無く、之によつて琉球語變遷の過程を幾分知ることが出來よう。

序にいつて置きたいのは、もし「琉球館譯語」所輯の經緯がわからなかつたとしたら、漢字の音韻は、時代によつて差異があり、南人と北人によつて相違があるから、其の發音も從つてまちまちになるわけで、之によつ

てオモロの發音を突止めることは出来ないのであるが、これが明の洪永間四夷館の館員吳之任の手になつたといふことになれば、中原音韻即ち元明時代の古音で讀んで差支なく、しかも『語音翻譯』の音韻とも一致するから『語音翻譯』同様に、安心して之をオモロの發音の研究にも使用され得ることだ(日本館譯語を紹介す(參照))。くはしくは、各項の釋義について見て頂きたい。

たゞ一つこゝで注意したいのは、琉球語にあつて、朝鮮語にない音を、朝鮮人がどう表記したかといふことである。左に琉球語の母音組織と口蓋化の法則を略述して『語音翻譯』の音韻と比較對照する必要がある。

現代琉球語では、母音は a i u の三つしか無く、e は i に、o は u に合併して了ひ、従つて所謂五十音圖中エ列はイ列に、オ列はウ列に、合併して了つてゐる。しかもエ列から來た音節の子音が、在來の音價を保存するに反して、在來のイ列の音節の子音は、口蓋化又は濕音化するので、兩者の混同が漸く防がれてゐる。この點は沖永良部・鬼界の二方言も、沖繩方言と同様である。だが、宮古・八重山の二方言では、e が i となつた結果、在來の i は i (i と u の中間音で、東北地方の方言にもある。ロシア語の и と同様) に變じ、従つて兩者の對立があるので、右の場合のやうな子音の口蓋化又は濕音化の現象は見られない。大島・徳之島の二方言では、e が i になつた爲に、在來の i が、そのまゝで留つた點が異なるだけで、兩者の對立があつて、子音の口蓋化又は濕音化の現象のない所は、宮古・八重山の方言も同様である。o と u とに就いても略同様な現象が見られる。沖繩・永良部・鬼界の三方言では、オ列から來た音節の子音が、在來の音價を保存するに反して、在來のウ列の音節の子音は、語間にある時は口蓋化又は濕音化して、兩語の混同が防がれる。但、鬼界方言では、

前者は語頭にある場合には、無氣音化して、後者と區別される。だが、宮古方言には、オ列から來た u に對して、一方には在來の u があり、他方にはこれから轉訛した ü (支那語の自・子・四及東京語のツ・ス・ヅの場合の變的ウと同音) があり、更に i に轉訛したものもあつて、三者共オ列から來たツ・ス・ヅに對立してゐるが、ü は現今では、其他の子音の場合には殆んど現れず、従つてさうした場合に、口蓋化などが無いので、兩列の區別は殆ど出来なくなつてゐる。この ü の現象は徳之島の方言にも見出される。八重山方言にも、かつてこの ü は存在してゐて、o から來た u と對立してゐただらうが、今ではこれが i になつてゐる。この ü のかつて沖繩方言にあつたことは、『語音翻譯』の語るところである。(本書所收「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」參照)。

以上琉球語に於ける音韻推移の法則を略述したが、以下語音翻譯の表記法を吟味することにしよう。『語音翻譯』を通過して、まづ氣のつくことは、イとウがそれ／＼殆ど i (i と u) で寫されてゐることだ。例へば、肉ニク시시 (shishi)、路ミチ미미지지 (michi)、晝하루파파루루 (firu)、冬겨울우우리리 (furu) 等の如きである。之に反してオは u (o) としたのもあれば、우 (u) としたのもあり、エも H (æ) ㄱ (ai) 又は e)、ㅋ (ji) 又は ye)、ㅇ (ai)、ㅁ (ü) としたのもあれば、ㅣ (i) としたのもある。例へば、大路おおみち오오부부미미지지 (opunichi)、小路こみち구구미미지지 (kumichi)、去年こぞ구구조조 (kudjo) 即ち kudzo)、鷄닭우우리리 (t'uri)、今年ことし구구두두시시 (kutushi)、這裏こゝ고고마마 (koma) 同時代の石碑には、하루하하리리디디 (farite)、或は 파파리리디디 (fariti)、姉누나아아리리 (anxi)、眼눈모모리리 (moi)、酒술사사기기 (sakūi)、飲마시기기 (numi) 手손리리 (t'ri) の如きものである。以上の例を見ただけでも、當時 o は u に遷る途中にあつた爲に、時としては o に聞え、時としては u にも聞え、又 e も i に移る途中にあつた爲に、時としては e に聞え、時としては i にも聞

えたので、まぢ／＼な記號が使はれたと思はれる(だから釋義の所で諺文の音譯をローマナイズする時には、便宜上oとiとの間の音にはUを用ゐ、eとiとの間の音にはIを用ゐることにする)。かうしてエ列がイ列と又オ列がウ列と、全くは一致せず、其の間に幾分の開きがあつた爲に、加行の子音の如きは、口蓋化してゐない。即ち秋は^{あき}アキ(aki)、雪は^{ゆき}ユキ(yuki)、心は^{こゝろ}キロ(kimo)、如何は^{いか}イカ(ikya)、今日は^{けふ}キョウ(kyo)、となつて、オモロや金石文や『華夷譯語』の表記法とも全然一致してゐるが、當時既に「來て」を^{きた}キシ(Kishi)、下又は舌頭を^{した}シチ(Shicha)と寫して、多行に口蓋化の始まつてゐたことも、オモロや金石文と符合してゐる。序にいふ。『語音翻譯』の所輯に先つこと三十三年即ち一四六九年琉球國王の位に即いた第二尙氏の太祖を謳歌したオモロに、「賜^{たま}ひて」を意味する「わちへ」といふ語が一つ現れてゐるが、『語音翻譯』時代の王尙眞を謳歌した數篇のオモロには、「追^{おひて}手」(順風)を「おちちへ」と書き、又「わちへ」を「わちち」としてあるのみならず同時代の「眞珠湊之碑」中にも、「わちへ」が五つあらはれ、其の後の金石文にも、澤山あらはれてゐる。この「ちへ」若しくは「ちちち」が、「て」の口蓋化したもので、「ち」と區別する爲に、殊更に「へ」若しくは「ち」を添へたものであることはいふまでもない。又例のオモロ中には、一篇の中に、「爲^して」を意味するのが、「して」と「しちへ」との二形あつて、並び行はれてゐるから、當時はこの種の音韻の動搖時代であつたことが窺はれる。『華夷譯語』には、この種の「て」は殆ど「的」になつてゐるが、中に「看」を密只(michu)と音譯した者のあることも注意すべきである。それから、オモロの中には、「え」の假名はたつたひとつも現れず、其の代りに「ち」若しくは「へ」が用ゐられて、しかも語頭には「ち」が用ゐられ、語間及び語尾の場合には、「ち」

も「へ」も用ゐられてゐるが、eはiに近寄りながら、iとの間になほ幾分開きのあつたことは、既に述べたことで明白だが、「ち」がエ列から來たwを寫す外、「え」の代りにも用ゐられたものは、とりもなほさずエ列がイ列に歩み寄つて、重なり合つた時、後者の子音が口蓋化して前者の子音と區別した如く、等しく重なり合つた兩母音も、それ／＼一音節として用ゐられた場合には、混同を防ぐ爲に、在來のiが原形のまゝで頑張つたに對して、eから來たiは、已むを得ず口蓋化してyiになつたわけである。これは現今の沖繩・鬼界・沖永良部等の方言で、さうなつてゐるところから、容易く推測することが出来る。其他『語音翻譯』に幾時^{いつ}イヌ(itsune)、夏^{なつ}ナツ(natsu)、墨^{すみ}イロ(sumi)、とあるのも、注意すべきことで、南島諸方言の比較によつて、ウ列中、ツ・ス・ヅの音節に限つて、母音がu↓ü↓i(或はi)と變遷したといふ私の假定を證據立てるものである。諺文には今一つ、一であらはずのがあるが、漢字の「使」「史」等を寫す場合には、之を用ゐないで、(ä)を用ゐて、今といつたやうにしてゐる。この、は、齒を喰ひしばつてaを出すといふ人もあれば、さうでないといふ人もあつて、一向要領を得ないが、琉球語を表記した具合から推測すると、古くは一(ü)に近く發音されたのではないかと私は考へてゐる。今一つ附加へて置きたいことは、『語音翻譯』でHをどう發音したか、といふことである。例へば、「無」の音譯中は、今の朝鮮音では、^무ムと長母音で發音するが、『語音翻譯』時代にも果してその通りであつたらうか。同時代のオモロや金石文には、この語はあらはれてゐないが、現今長母音で發音する音は、「あい」「かい」「ない」「さい」「たい」などと表記されてゐる。音韻は變つても寫語法は依然として、元のまゝである場合が多く、寫語の習慣の變改の時期は、發音の自然的變化よりも後れるのが普通だから、そ

れては當時の發音はわからない、といはれても仕方がないが、それより一世紀前の『華夷譯語』に「無」を乃(nai)と音譯してあるのは、無視するわけにいくまい。あの頃はさうだつたが、百年の間に長母音に變つた、といはれば、それまでだが、當時もやはりさうであつたやうな氣がしてならない。これより半世紀前の諺文の制定當時は、朝鮮語にaiの二重母音が無く、それがæになつてゐたとすれば、何故に單一な字母を造らずに、tとlとの複合字を造つたかといふことが疑問になつて来る。これについては金澤小倉兩博士の御意見が伺ひたいものである。

それはとにかく、『語音翻譯』の寫音法によつて、後世琉球語のeoが、それ／＼iuに合併した結果、イ列とウ列とに同音異義の語が倍加したので、その混同を防ぐ爲に、自然子音に口蓋化の起つたといふ卑説は、確實性を帯びて來たやうに思はれる。以下少しく其の子音について、述べて見たい。

朝鮮語には、唇的摩擦音のFが存在しないので、琉球語のFを寫すに唇的破裂音のPを以てしたとしたら、其の中からPとFとを選びわけるのが、容易なことでは無いやうに思はれるが、能く考へて見ると、朝鮮語の唇的破裂音には、普通の日(P)以外に有氣音のㄷ(P)があるので、之を使ひわけて、PとFとを表記してゐることに氣がつく。議論の精確を期する爲に、『語音翻譯』に現れたPB及びFを含む語全部を分類して、其の表記法の一端を窺ふことにしよう。

鹹시바가나사(sipakarasā)、淡아바사(apasha)、多오부시(opushi)、大路오부미치(opunichi)、一〇부미스(putisū)、朝鮮語にはtsがないので、之を寫すにス又はエを以てし、或はその前の音節の語尾に、ㄷ(t)を附けて之を寫したのもある)、老鼠오야비주(oyapiju)、羊비스자(pistūja)は、當時P音であつたものである。大(nfu)、多(ufusa)、堅(kufasa)等の如く、いまだに語間のFの保存されてゐる單語の大多數は、當時P音のものであつたに違ひない。そして、淡아바사以下のPが、今日Fになつてゐても、またHにならないのは注意すべきことである。

有聲音Bをあらはすにも、やはり日か或はそれに多少加工したものが用ゐられてゐる。無甚麼아라비탄(ary-abiran)、油아부라(abura)、鍋나비(nabi)、手指頭의비(olbi)、飯오바리(obani)、遊아나비(asubi) 晩夕요삼비(yosabi)、葱김비라(kimbira)等で、終りの四語は、朝鮮語には殆ど濁音がない爲に、直前の音節の語尾に、ㄴ(n)・ㅇ(ŋ)・ㅁ(m)の何れかを附けて、次の文字を濁つた例で、華夷譯語で、飯을翁班尼(wung pan ni)、硯을孫思立(sun szuli)、水을民足(min tsu)と表記してあるのと同じ筆法である。生薑샤오가(shōga)、風칸과(kadzi)、等もこの例に這入る。

別にㄷ(p)を用ゐて表記した一群があるが、この有氣音は、聞いた感じが、幾分Fに似たところがあるので、Fを寫すに用ゐられてゐる。人피츄(fichū)、『華夷譯語』には必周で、無氣音だから、これより一世紀前には、pichuであつたらう)箒과오기(fōki)、蒜피루(firu)、蛇파무(famu)、筆필과(fudi)、晴了과리데(fa-riti)、鼻과나(fana)、柱고나(farya)、袴고가마(fakama)、牙齒과(ča)、足피사(fisha)、火피(ḥi)、白日피루(firu)、响日피루마(firuma)、春과루(faru)、冬우가(fiyu)、江口루라모너(funamoto)、下雪우기부리(yukifuri)、拜年쇼오마스노파(shōgwasūnufæ)、火盆피과지(fifachi)の二十語は、當時F音で發

音されたと思ふが、今では其の中十二語はそのまゝで止り、餘はHに遷りつゝあるのもあれば、全然遷つて了つたものもある。

この外に、見逃がしてはならないのが今一つある。首里語には、他の方言にない軽い有氣音があつて、語頭にある場合に特に著しい。この音を使ひ馴れてゐる朝鮮人は、之を普通のフ(k)・ロ(t)・ス(ch)と區別して、フ(k)・ロ(t)・エ(ch)で寫してゐる。試みに、其の統計を取つて見よう。フは語頭には十七現れてゐるのに語間には一つしか現れず、之に反してロは語頭には一つしか現れないのに、語間には三十五から現れてゐる。同様に三も語頭には十四も現れてゐるのに、語間には一つも現れず、之に反してロは語頭には二つしか現れてゐないのに、語間には二十一も現れてゐる。たゞえのみは語頭にも語間にも三つ現れてゐるが、スは語間には二十七現れてゐるに對して、語頭には七つしか現れてゐない。これは決して無茶苦茶に表記したのでは無く、その聽覺印象のまゝを寫したものに違ひない。

なほ、bを寫すに日を用ゐて、Hを用ゐないと同様に、gdjを寫すにフrossを用ゐて、フエを用ゐないのも偶然ではあるまい。それから△(n)をdjの積りで用ゐて、「門」を立と寫したのがあるかと思ふと、「頭」をガナ今と寫したやうに、△の前にL(n)を持つて來て、dzにしたものもある。

終りに、次に解釋しようとする「語音翻譯」は、比較的正確であると思はれる内閣文庫本に據つて、他の諸本を参照したことを附記して置く。この稿を草するに當つて文學士望月誼三氏が、帝室圖書寮・帝國圖書館・大橋圖書館・内閣文庫・南葵文庫・東洋文庫・神宮文庫・京都府立圖書館・文求堂の諸本によつて校合したノートを貸與され

たことに對して、感謝の意を表する。

釋 義

語音翻譯

倫是那裏的人 *ouras dzuima fichtur*

「你」は昌平館學問所本には「儻」になつてゐる。貴方は何處の人の義で、もつと鄭重な言葉では、Hraの下にyaといふ形式語を入れ、最後にgaといふ疑問辭を附けたであらう。「汝」は今ではととなつて、同輩又は少々年上の人に使ふ語であるが、明の永樂頃に採録された「琉球館譯語」には、「你、烏喇哇(哇は形式語)」と見え、同系統の琉球譯語等にも、「你、吾喇」と出てゐる。但、この語はオモロの中には見出されないが、それは第二人称の代名詞を使つた場合が皆無であるからだ。これは南島の方言中に遺つてゐて、奄美大島諸島では、今尙使はれてゐる。八重山の方言では、とうに死語となつて了つたが、百八十年前に粟國島に島流しになつた官吏が、望郷の情に耐へずして詠んだといふ、「傳言節」の劈頭に、「うら頼ま、南風。事言附く、雲 大石垣あるじ島吹き通せ。云々」と出てゐる。この語は内地の方言中にも見出されるから、おら(已)の轉訛したものに違ひない。dzuima は琉球古語の辭書「混効驗集」に、「すま、何方の事。琉歌に、北京御主日やすまにそなれよが、七ツ星下の北京ちよしま」(支那の天子様は何處に安住して居られるか。北斗星下の北京といふ都に、の意) 又巫女の誦文に、すまと云も、何方へと云心也」と見えてゐる。この辭書の編纂された清の康熙の終り頃には、この語はもう巫女の誦文でのみ使はれて、

耳遠くなつてゐたことがわかる。『おもろさうし』の卷十六の十章にも、「すま人」といふ語が出てゐるが、この「すま」に何處の義があるかは、判然しない。この語は、八重山の方言には、*dzima* といふ形で遺つてゐるが、宮古島の方言では、とうに廢語となつて、その代りに「んざ(いざ)」が使はれてゐる。だが、宮古島の古い民謡には、「すま」が其の同義語として使はれてゐる。一例を擧げると、「狩俣のいさめが」(新潮社の日本文「琉球文學」中に、「いざ海が下りだが。すま濱が踏までが」(この海へ下りよか。どこの濱を踏まうか。の意)と出てゐる。これは沖繩島の方言では、大方 *ma* になつてゐるが、北方の山原及び奄美大島の方言では、*da* になつてゐる。それから *da* (輿論、*da* (波照間)、*da* (鬼界)) になつてゐる所もある。だから、「何處の人」は、八重山方言で *dzima pihu* と言ふに對して、首里語では *ma nu tehu* *ma nehu* と *da nu chu* と云ふ。

我是日本國的人 *sa ya ma di si si* (*wan yamatu fieh'u*)

私は日本人。*wan* の下にはやはり *ya* が附いてゐたと思はれる。*yamatu-fieh'u* は、今では *yamatunchu* に轉訛してゐるが、八重山及び宮古の方言では、不相變 *yamatu-pitu* といつてゐる。この *wan* (我) は、『篇海類編』音韻字海『海篇正宗』に「瓦奴」(*wanu*) と音譯したものの崩れた形で、現代の口語ではさうなつてゐるが戯曲などでは、我身又はわぬと表記して、「我や」は *wan ya* と發音し、「我も」は *wanun* と發音してゐる。口語では、かうして形式語が附く時、前者は *wanun* となり、後者は *wanin* 或は *wanin* となる。山原の方言中には、今尙「我」を *wanun* といつてゐる所がある。これは萬葉に「わぬ」とあるのと同じものであらう。「琉球館譯語」は「我」を昂 (*ang*) と音譯して、明初の發音を示してゐるが、オモロは、當時のものは言ふに及ばず、

韻文である關係上、『語音翻譯』時代否それより後のものまで、「あ」又は「あん」になつてゐる。一二の例を擧げて見ると、卷十三の二百二十章に、「あがおなりみ神のみまぶらでておわちやむ」といふのがあるが、我が妹の生御魂、我を守らむとて來ませり、といふことである。今一つ、卷二の四十五章に、「ちばなこし嶽に、あんは神てづら、神やあんまぶれ」とあるが、これは知花の(嶽の村の後)に、我は神に祈らむ、神は我を守れの意である。試みに、其の統計を取つて見ると、「あ」が百十八「あん」が九あるに對して、「わ」は八、「わん」は十二あるのみで、しかも後者はすつと新しいものに出てゐるか、さもなければ、祭祀以外のことを歌つたのに出てゐる。『語音翻譯』の琉球語が『華夷譯語』のよりすつと新しいといふことは、これだけでも證明出来る。が「あ」「あん」と「わ」「わん」とは、古くから並行はれたとも考へられる。と言ふのは、洪永間支那に派遣された琉球の官生等は、皆悉く貴族の子弟であつたので、「わ」「わん」に比べて、古風な情調をもつてゐた「あ」「あん」を使つたと思はれるからだ。それから『語音翻譯』が採録された前年に、八重山征伐があつて、この時捕虜となつて、宮古島につれて來られた、八重山乙女の歌が、二百年前に編纂された『宮古島舊記』に載つてゐるが、其の中に「漲水もあは見て、おやぎけもあは見て」といふことが見えてゐる。韻文だから斷言は出来ないが、この語は宮古八重山の口語でも、多分使はれてゐたであらう。これは山原の方言では、今尙使はれてゐるが、他の方言では、時偶幼稚な者が使つてゐるのを耳にするだけである。

倫的姓甚麼 *o ri ke i ga i ga* (*ura na wa ikya 'yu ga?*)

汝の名は何といふか。今の口語に直すと、*ya* (或は *ia*) *na ya na ndi 'yu* (那覇の方言では、*i* 又は *iyu*)

gaとなる。こゝでは主格を表す互爾遠波が、國語と同様に ya になつてゐるが、後に出て来る短文では、ya になつてゐる。オモロでは、古い所では、大方 wa になつてゐて、新しい所には ya が現れてゐるが、明初に初めて支那に通じた察度王(ぢやなもい)を謳歌したオモロ(卷十四)には、一篇の中に初めの方には「ぢやなもひや誰が生ちやる子が」と出て、終りには「蹴上げたる露は、露からど(さへ)香しやある」と出てゐるが、「琉球館譯語」にこれがすべて哇(wa)になつてゐるのを見ると、初めの「や」は寫す時に、當時の語感が累ひして誤寫したのではないかと思はれる。兎に角、古い所で「や」の現れたのは唯これ一つで、「語音翻譯」時代の王尙眞を謳歌した數篇のオモロや同時代の金石文には、悉く「は」になつてゐるから、この頃影を隠さうとしてゐた wa が、どうかすると口語中にも現れてゐたと見ることが出来る。ikya はいか(如何)の轉訛したものであるが、「琉球館譯語」に、「多少、亦加撒(ikyasia)」とあるから、永樂頃には既にさうなつてゐたと見ていい。これは其後 icha となり、更にその i が脱落して cha になつたが、この四階段は今尙方言中にも見られる。この語は今では「如何」の義となり、語尾に ga が附くと、「いくら」の義になるが、古くは hu(何)の同義語として用ゐられた。『おもろさうし』の卷十二の十八章には「のうみちへがおいきよる、いきやみちへがおいきよる」(二句とも何を見て)と見え、百五十年前に出来たといふ八重山の崎山節にも、「何の故、いかの因」と出てる。「言ふ」を意味する動詞は、今日では ya(未然)・i(連用)・yuu(終止)・yuru(連體)・i(已然)・i(命令)と活用して、語頭に喉頭破音を伴つてゐるが、古くは ya(未然)・yi(連用)・iyuu(終止)・iyuru(連體)・i(已然)・i(命令)と活用して、韻文では多くこの形を用ゐる。そして語尾に疑問辭の ga や「故」

の義の kutu や「物」「事」の義の su 等を取る時には、古い形では yu となり、新しい形では yu となるが朝鮮人が之を表記するに、o 等を以つてしたところを見ると、當時 yu は yu に變じてゐたやうにも思はれる。それから、疑問辭をガで寫したのは、朝鮮人が其の濁音を有つてゐなかつた爲で、その ga であることは、現今の南島の各方言から見ても知れるし、オモロの表記法に照しても、疑ふ餘地がない。次に出て来る他の疑問法の例で述べる積りだが、この ga は國語とほゞ同じく、何何時・何處を意味する語を伴ふ時に用ゐられるものである。

俗的父親有麼 오라 아사아리 (ura asha aru)

御親父有りや、の意である。父を意味する asa は、とうに死語となつて了つたが、宮古の方言には今尙生きて活いてゐる。徳之島・鬼界兩方言のアチャ・沖永良部・興論兩方言のアチャ、八重山方言のアッチャも、其の變形であらう。「おもろさうし」の十の卷の三十六章には、「おやのもとかまへ、あさがもとかまへ(父の元を探しての義)とあり、十五の卷の四十七章にも、「いきやるおやのなちへがよ、いきやるあさがなちへがよ(如何なる父が生みしぞの意)とある。琉球館譯語には、「父親、阿舍都(ashidu)」とあるが、音韻字海には、之を一更加烏牙(yikinganya) にすげかへてゐるから、asa が萬曆頃に耳遠くなつてゐたか、死語になつてゐたかが能く窺はれる。首里の士族は、母を asa と云ひ、琉球館譯語にも、母親を阿也と音譯してあるが、これに「我親」の義のあることは、民謡「旅や濱宿り、草の葉と枕、寝ても忘らぬ、我親の御側」の「我親」と比較したらわかる。阿舍都、「あさ」、阿也などの a に我の義のあることも、これでよくわかる。「わ」は現

今でも、複合語を作る場合には、領格の助詞を俟たずして、直ちに主體言に接してゐる。兎に角あらゆる單語の意味はわかるが、この疑問文の形式は、今の語感からいつたら、一寸變である。もし最後の *ni* が *ni* の誤寫だとすれば、*ura asha ami?* となつて、現代語の形式に歩み寄つて來るが、後にもう三つも同形式のが出てゐるから、速斷するわけにはいくまい。之に就いては、終止形から疑問形を作る重なる方言等の例を一瞥して、之をオモロの例と比較して見る必要がある。試みに、兩形の關係を表で示して見ると、かうである。

	終止形	疑問形
八重山方言	an	an'?
宮古方言	am	amma?
首里方言	an	ami?
今歸仁方言	an	ayini?
沖永良部方言	an	annya?
徳之島方言	ari	anse?
大島方言	ari	annya?
鬼界方言	ayi (ari)	annya?

疑問形は、八重山方言では、終止形と全く同様で、たゞ語尾の調子を高めるだけであるが、他の方言では、疑

問の形式語が、實辭の語尾に附着して、後に融合した形跡が窺はれる。こゝでは主として、沖繩方言について述べることにするが、今歸仁方言の *ayini?* は、*an* の古形の *ayun* が *ayin* に變化して、それに形式語の融合したもので、これは *tuyin* (取る) が近代になつて、*tuyin* に變化したのと同現象である。チェンバレン氏は、琉球語の終止形の語尾の *n* (*ng* 即ち *ri*) と書く方が正しいかも知れぬが、少々疑問なので、暫らく *n* にして置く) が、かつて *m* であつたことは、疑問形の際に *m* が現れて來るのでわかる、と言はれたが、これは實に正しい見方で、*ikan* (行かぬ) を疑問形にする時は、*ikani?* となるのに、*ichun* (行く) を疑問形にする時には、*ichunni?* となることから、推測することが出来る。これはまた宮古方言の終止形が *m* で終つてゐることからも類推することが出来るのみならず、オモロ其の他の表記法でも能く證明することが出来る。「おもろさうし」の卷十三の二百二十章に、「おわちやむ」(來ませり)といふ語のあることは、前に出して置いたが、卷二十の三十六章にも、「あかゝかいたま(人名)が、かいおとちやむ(落して了つたの義)」と出てゐる。琉球館譯語などには、動詞はすべて密只(見て)の如き形で出てゐるから、わからないが、二百年前に採録された中山傳信録の琉球語には、「看、妙母 (*miamu*)」といつたやうに、終止形で出てゐる。これは今の首里語では *nu* (*myūn*) になつてゐる。かうした表記法は、時偶戯曲や短歌のそれにも現れてゐる。多分古くは *nu* と發音したのが、母音が脱落して、宮古方言の如く、*m* と發音し、いつしか *n* に變じたのである。これは、近代琉球語で、*o* が *u* になつて、オ列がウ列になつた結果、主として語間にある場合には、この *m* から來た *nu* と區別する爲に、在來の *m* が *myū* となり、いつしか *nu* となつた現象と照合せて考へても領かれることである。

それから、疑問形をオモロの中に求めると、七の卷の三十二章に、「首里杜城(王城は)今日は何がしよろしよ(何をかすらむ)あまへど(歡喜をぞ)、いちよなしやど(多忙をぞ)、しよらい(すらむ哉)」といふがある。前半は「何」を伴ふ疑問形式だから、疑問辭は「が」になつてゐるが、後半は「何」を伴はないから、「い」になつてゐる。この「い」は也行の「え」の、エ列がイ列と合併した結果、*ei* になつたものである(序にいふが、そこでは *e* から來た *i* も、在來の *i* を *i* と發音するに對して、*yi* と發音する)。この「しよらい」は現今の口語に直すと、*shira ya* になるから、その「い」は *ya* / *ye* / *yi* と變遷して來たに違ひない。これは否定の場合の疑問形を見たら、もつと能くわかる。六の卷の五十三章に、「なさのたゞみきよ(神人の稱)が、おわる(在す)でて(とて)しらにや(知らすや)」とあり、十五の卷の五章にも「あめくまひやりよもい(人名)おわるでてしらにや、道中お迎へ爲らまへ(せまし)、いちへき(賢き)まひやりよもい(ヲ)」とある。この「しらにや」(*shiranya*) が、*shiran* (知らぬ) に *ya* の附いたものであることは、一見して知れる。それから今では、韻文) などの場合では、「行かすや」を意味する「いかね」は *ikanir* と讀んでゐるが、この *ni* (印歐語などと同音がエ列から來たもので、「行かうものを」を意味する「いかに」(*ikani*)) の *ni* (幾分口蓋化したもので、國語の *ni*) と區別されなければならぬ。*ichumir* (行くや) は「ちよめ」と書くが、エ列から來た *ni* と在來の *ni* とはいつしか混同して、先島方言や大島方言にあるやうな區別はない。「め」は最初終止形の語尾の *m* に *ya* が附いてゐたものが、その *ya* が *ye* となり *yi* となつて、遂に *ni* となつたに違ひない。これには外にも證據がある。それはこの疑問辭が長母音で終つてゐる名詞に附く場合を考へて見ればすぐわかる。*Tarā yir* (太郎か) の *ir* は、奇麗に離れて原形を見せてゐる。これが *Tarā yamir* (太郎なりや) になると、もう隠れて了つてゐる。他の方言でも亦同様である。*n* で終らない *ari* (有り) の如き動詞を疑問形にする時にも、古くはそれと同様に、*ariyi* としたので、朝鮮人は之を *ari* (*ari*) と寫したと思はれる。誰・何・何時・何處等を伴ふ場合の疑問辭が *ya* で、さうでない場合は、*yi* (*ye* / *ya*) であつて、しかもそれに例外がないといふことがわかる。國語と南島語との語法の酷似してゐることが、いよく明白になつて來る。以上述べたことを總合して考へると、*urā arā arā* の *arā* は、奄美大島に於ける終止形の語尾を、八重山方言の場合のやうに、調子を高めたやうなものではなく、もと之に *ya* がついで、*ari ya* であつたものが、*ari ye* / *ari yi* / *ari* と變遷したものに違ひない。今日の大島諸島の方言では、*annya* になつてゐるが、いふまでもなく、これも *ari ya* の轉訛したものである。*ari* が後に *ami* となつて、他の動詞と調子を合せたいきまつについては、「酒有す *urā arā*」及び「酒無す *urā arā*」の項を参照して頂きたい。

倭哥哥有麼 *urā arā arā* (*urā sidza arā*)

汝兄有りや。これも現代語に直すと、*yā* (或は *nā*) *sidza nu wumir* になる。*sidza* は兄の義で、今でも一般に用ゐられてゐる。混効驗集には、*su* *su* *be*、兄の事也。惣じて我より長しき方は俗に如斯申なり」とある。この「*su* *su* *be*」(*sidzabi*) は耳遠くなつてゐるが、田舎では今も使はれてゐる。又「おめ *su* *su*、兄の事」とも見えてゐるが、これは普通一般に使はれる敬語で、*umisidza* と發音する。「おめ」は *om* *om* (思) の縮つた形で、愛の義から「御」の義に轉じたものである。父兄の事を *urā sidza* とし、先輩を *sidza kata* とし、*urā* *urā*

ろさうし¹の十五の卷の五十四章に、「北谷に在る宇良の世の主の、せざよめづらがて(兄に會ひたがつて)」とある。このせざよめ *seiza* と發音する。因にいふ。琉球語の表記法では、「せ」には *se* と發音する場合と *si* と發音する場合とがあつて、この場合又は命令形の「せ」は、*si* と發音するやうになつてゐる。十三の卷の四章にも、「すざべ大里が舵取たる細さよ、大君に眞南風乞うて帆走せ」といふのがある。十九の卷の五章には「佐敷金杜に、手拍子打ちへ躍れば、せのきみと君と、北の金杜に、上下のみるめ」といふのがある。琉球館譯語には兄を先札 (*sienuha*) と音譯してあるが、これは *si* と同様の表記法で、*si* を寫したものである。

儵姐姐有麼 *우라아리* (*ura ani ari*)

汝姉ありや、といふ意である。姉のことを今では *uni* といつてゐるが、これは *uni* (思) *ani* (姉) の轉訛したものである。混効驗集に「おめあね、姉の事」とある。「おめあね」は又 *unani* にも轉訛してゐる。何れも一般士族の弟妹より姉にいふ稱であるが、結婚以前は *uni* といひ、結婚当日からは *unani* といふやうになつてゐる。按司(諸侯)以上は、結婚以前も結婚以後も、おしなべて之を *uni-me* といつてゐる。 *ani* といふ語は、かうして複合語となつて遺つてゐるだけであるが、古くは一般に使はれたらしい。二百年前の山原の女歌人ウンナ・ナビの歌に、「よかてさめ(幸福な)あねべ、しのぐ(豊年祭の踊りで、)しち遊で、我等世になれば、お止めされて」といふのがある。又その頃創作された戯曲の中にも、一三ヶ所にあねといふ語が見出される。それから、百年前までは、城中の女官の位階に、あねべといふのがあつたとのことである。オモロの中には、あねやあねべは所々に見出される。卷十六の十七章に、「あねのきみぐ、しない(品が揃ふの義から、似つ)かはいの意になつた)

といふのがある。宮古島の七嶺といふ民謡にも、「我が愛す勝りやあね香とす」とあり、其の子守歌にも、「大樹だけ生ればしうて、島製り村おそり生ればしうて、我がよまい(ヲモ)守りたるあねてい(ト)見あげ呉るやうい」といふのがある。

儵妹子有麼 *우라아리* (*wonari ari*)

汝妹ありや。今では *wunayi nu wuni* といへば、姉妹ありやの義で、姉には *si* *za* *wunayi* といひ、妹には *utu wunayi* といつてゐる。清人徐葆光の中山傳信録附載の琉球語に、姉を洗之烏乃、妹を屋多烏乃と音譯したのを見ると、二百年前も今日と同じ意味に使はれてゐることが知れる。混効驗集には、「おめなり (*uninari*)、男より姉妹を云。唯、おなり (*wunari*) 共」とあつて、之に對しておめけり (*uniki*) を「女の方より男兄弟を云」としてあるが、*uninari* (*uninayi*) は *wunari* (*wunayi*) の敬語で、*uniki* (*uniki-yi*) は *wikiyi* (*wiki*) の敬語である。ところが、語音翻譯に、*wunari* を姉に對する妹の義にして、今日と異なつた用ゐる方がしてゐるのは、注意すべき點である。オモロにも、「をなり」「ゑけり」といふ語は澤山出てゐて、大方「姉妹」「兄弟」の義につかはれてゐるが、十四の卷の四十五章に、「きこる金丸が、おもひぐわのきみの遊べば、見ぼしやしよわちへ、とよむかねまるが、おなりがみの遊べば」といふのがある。これは語音翻譯が採録された時の王尙眞の七八歳の頃に出來たオモロで、尙眞が妹のおとちのものいがねと睦しげに遊んでゐるのを父の尙圓(かねまる)が見とれてゐるところを時の宮廷詩人が歌つたのであるが、こゝでは、「をなり」が妹の義に用ゐられてゐる。之を「をなり神」といつたのは、「をなり」は兄弟を守護する生御魂と

考へられてゐたからだ。十三の卷の二百二十章にも、「あがおなりみ神の、守らでておわちやむ、やれゑけ。おとおなりみ神の、あやはべるなりよわちへ、くせはべるなりよわちへ」といふのがあるが、これは我がをなりみ神我を守らむとて、來ませり。エンヤラヤ。妹の生御魂、美しき胡蝶となりて、奇しき胡蝶となりて、の意である。「をなり神」の同義語なる「おとをなり」は、若きをなりの義で、後世の如きせきをなりに對する語ではなかつたと思はれる。ことによるとこれは「うない子が振別髪（ウナイ）の云々」など云ふうなると同語かも知れぬ。多分最初振別髪（ウナイ）の稚い妹の義であつたのが、後には姉妹の義に轉じたに違ひない。兎に角何よりも、證據は語音翻譯中の用例である。たゞ疑問となるのは、「をなり」「ゑけり」と同語尾になつてゐることであるが、これはうはなり（後妻）に對するこなみ（前妻）が、前者にひかれてこはなりになつた例から類推出來るやうな氣がする。この語は後には養ふ人即ち「晝間持ち」の義にも轉じたが、それは恐らく「をなり」が田の神の犠牲になつた風習から來たものに違ひない。宮古の方言では、「をなり」は *wunari* 又は *wunarya* に變形して、やはり兄弟から姉妹をいふ稱になつてゐるが、女の義にも轉じてゐる。八重山の方言でも、*bunari* 又は *bunari* に轉訛して、例の姉妹の義に用ゐられてゐるが、女の名にも用ゐられてゐる。オモロの中にも、「をなり」の女の名になつたのがたつた一つある。

儵幾時離了本國 *우라이인스마라제기* (*ura isü shima tatchi ga?*)

終りのががの誤寫で、しかも濁音であることは、次の次に出て來る用例でよくわかる。貴方はいつ國を立つたかの義で、*ura isü shima tatchi ga?* と讀むと「立つて」といふ形に疑問辭が附いて、今の語法とは、

少々違ふが、すぐあとにも斯ういふ形が二ツ出てゐるから、間違ではなかつたらう。シマには、郷里・田舎・采邑・島・國等の義がある。オモロでは、「しまでんくにでん（シマをも）」「しまが命、國が命、みおやせ（奉）」「しま襲ひ國おそひ」「しまぐしやん、くにたづな（シマを杖に）」といつたやうに、いつでも「しま」が「くに」よりも先に來てゐるが、この語はもと「住む所」即ち郷里の義であるが、轉じて國王が自分で持つてゐる國即ち「御持親島」（直領）の義となつて、「國々の按司部」（百按ともいふ）、諸侯の義の領邑を意味するクニと對してゐて、やがてシマクニといふ複合語も出來て、國家の義に用ゐられたが、これは自然島國を意味するシマグニと清濁によつて區別されてゐる。オモロではシマをかういふ義で用ゐたから、従つて島にはハナレ（離）又はヂハナレ（地離）といふ語を用ゐてゐる。これは今でも各方言で使はれてゐるが、この語の死語となつた方言でも、島名の語尾にハナレが附いて、昔の倂を留めてゐる。

我舊年正月起身 *우라이인스고마지가* (*wan kuznu siô gwatsü tatchi*)

私昨年（去年）の正月に立つたの意。今の言表し方と殆どかはらない。こゝで一言して置きたいことは、過去の終止形は *tatchan* であるが、「立つて」は *tatchi*（立つて）で、その疑問形は *tatchi?*（*tatche ya*）である。これから考へると、前に述べた *우라이제기* の如き疑問形も、今の語感からいふと變だが、當時は *tatchi* に *ga* を附したものであつたらう。

儵幾時到這裏 *우라이인스고마지가* (*ura isü komi chi ga?*)

貴方いつ此處に來たかの義だが、動詞の疑問形はやはり *chi*（來て）で、多分 *tehi* と發音したらう）に *ga*

が附いてゐる。これは今なら *cha ga?* とすべきところである。「此處」を意味する語は *kom* になつてゐるがこれより二十五年後即ち明の嘉靖六年崇元寺の門前に建てられた下馬牌には、「あんじもげすもくまにてむまからおれるべし」(裏の漢譯、但官員人等至此下馬) と此が *kuma* になつてゐるから、當時 *o* は *u* に變つてゐたか、*u* に餘程近くなつてゐたかがわかる。

我門今年正月初三日纔到這裏 *고두시샤오파스고제* (*wan kotushi shōgwachū kitchi*)

私は今年の正月三日に來たの義だが、音譯には三日が落ちてゐる。これは *wan kutushi shōgwatsū tstaichi mikka kichi* といつたに違ひない。終りの *kichi* (來て) は *kichan* (來たて、今では *chan* になつてゐる) の代りに用ゐられてゐるが、この語尾は今もかはりは無く、オモロでもさうなつた所が多い。その語尾の「て」は列になつた所と列になつた所とあるが、當時は多分兩者の中間位の所であつたらう。列はオモロの表記法の「ちへ」又は「ちゑ」と同じものであると思つたら間違ひがない。列(來て)は *kitchi* と發音したか、それとも *kichi* と發音したか、その邊は判然しないが、兎に角第一音節の子音は未だ口蓋化しないで、第二音節の子音だけ口蓋化してゐた。さうして其の中間の *i* が無聲化し、*k* も *ch* に同化されて *eh* となり、いつしか長子音の *teh* となつて、今日に至つた。

徐初到江口是好麼 *오라파라도모든가* (*ura funanutu chi ga?*)

貴方は港に着いて御氣分はどうかといふ意味だらうが、この音譯だけでは意味が取れない。 *ura funanutu*

teh は貴方は船元即ち港に來てといふことであり、*ga* は *ikya* (如何) 等に伴ふ疑問辭だから、其の間に多分

ikya (如何) といふ語が落ちてゐるに違ひない。

一路上喫食如何 *오라미지미지아기리모르판너* (*ura michimichi agrimunu natto?*)

航海中御食事はどうだつたかの意である。終りの疑問形は何かの誤りであらう。今なら *nati* (なつたか又は出來たか) といふべき所である。 *agrimunu* は食事の義。混効驗集に「あげれ、食などくふを云」と見えてゐるから、 *agrimunu* はこのあげれ (*agiri*) と物 (*munu*) との複合したものであらう。あげれもとうに死語となつて了つて、今では右の辭書に出てゐるだけである。但、これは同じ形の奉れの義の *agiri* とは自ら別種の語であることを知らなければならぬ。

多酒 *오부시* (*upushi*)

酒が過ぎるの義か。 *upushi* (多し) は國語流の形容詞の終止形で、かつて琉球語でも用ゐられた(酒無了 *다시* の項参照)。 *시* は或は *하* の誤りかも知れない。標語を「酒多」としたのは、琉球人が酒を強ひられて、たゞ *upushi* といつたので、之をさう宛てたと思はれる。

好下飯 *오사가라네* (*usakarana*)

御肴の義か。 *라* が餘計に附いたのかも知れない。

無甚麼好下飯 *사가라무아라비탄두모* (*sakana mu aryabiran dumu*)

何もお口に合ふのは御座いませぬがの意。 *sakanamu* は肴もで、今では *nu* は實辭に融合して、 *sakanan* になつてゐる。 *aryabiran* はあり侍らぬの義で、今では *aryabiran* になつてゐるが、大島の方言では *aryawiri* になつてゐる。

ran である。この動詞は ayabira (未然)・ayabiri (連用)・ayabin (終止)・ayabiru (連體)・ayabiri・(已然)と活用するが、その第二音節の ya は yi に移りつゝある。終りの ya は、「何も」を意味する nānu (√nān) の義にも取れるが、「けれども」を意味する dānu (√dān) の義であらう。この短文は現代語に直すと nūn ushagaransé nōyabiransiga になる。

請一鐘酒사키부데스아그라 (saki putrohiu agrā)

一杯上げようの意。現代語に直すと saki futusi agrā になる。『おもろさうし』の中には、「一ツ」をふてつと表記した所が三つある。五の巻の七十九章には、「さとふてつちよわれ」(里一ツに在せ)とあり、七の巻の一章には、「あふてつそろいて」(心を一にして)とあり、十五の巻の六十四章には、「いみやはなわふてつ、いみやわいとふてつ(もうはや緩れて一筋の紐のやうになつてゐる)とある。前の二つは首里のオモロで、後のは地方のオモロだが、古琉球語では、「一ツ」を putōsiri といつて、語音翻譯のと同様に發音してゐたと見なければならぬ。しかしこれは改まつた時や韻文などに使つたもので、口語ではすつと古い時代から第一音節の脱落した tisi (√tisi) が使はれてゐた。それは琉球館譯語に、「一、的子」とあるので知れる。

湯酒사키와가시 (saki wakasi)

酒を酎せよの意。wakasi は wakasa (未然)・wakashi (連用)・wakashun (終止)・wakashuru (連體)・wakasi (已然命令)と活用する語で、普通水などを沸す場合に用ゐる。即ち chā wakasi yā wakasi などとさす。同義語には fukashun があつた。

酒酒來사키와가디 (saki wakatikā)

酒を注いで來いの意か。와가디は一寸見當がつかない。가がもし기又は개의誤寫だとすれば、wakin (分け)になつて、大きな容器から小さい容器に移す義になるから、能く聞える。

撒酒風사키구리 (saka kurii)

酒癖の悪いこと又は其の人(酒狂)。古くは國語同様、之を「さかぐるひ」といつた事がわかる。因にいふ。酔つた人を witch といひ、酔つばらひを withā といひ、酒にひたつてばかりゐる人を wichū といつて、語尾の母音で使ひわけをしてゐるが、酒亂をかうして簡単に言表す語はない。wimun-furimun (酔者・狂者)といふ複合語が稍々近いが、これは酔つた人は氣違ひも同様だといふ程の義に使はれてゐる。

不要讀他喫아리로마수라 (ari numasūna)

飲まして呉れるな。아리는「あれ」で、私の語感で判斷すると、他に拘泥して入れたらしく思はれる。numasūna) は今でも使はないことはないが、かういふ場合には、numché kwina といふのが普通である。直譯すると「飲まして呉れるな」になる。

小讀他喫아리계키로미세 (ikirku numasi)

少し頂かうの義。少しく飲ませといふことで、今でもその通り用ゐてゐる。ikiraku は副詞形で、其の形容詞は ikirasa である。語幹の ikira が、形容詞又は名詞の前に附いて、後に「……では無い」といふ意味の述語が続く時、「尠からず……である」の意味をあらはすことがあり、又疑問辭²²を伴ふ形容詞の前に附いて、

「どんなにか……だらう」といふ言廻しを作ることもある。ikira usshā aran (並大抵の嬉しさぢやない) ikira mun sshé non (僅ばかりの物では間に合はない)は、前者の例で ikira usshā gai (どんなに嬉しいだらう)は後者の例である。但、前者の ikira が平調で、形容詞になつてゐるに對して、後者の ikira は、第二音節にアクセントが附いて副詞になつてゐる。後者は一寸見ると、國語の「いくら」と關係がありさうに思はれるが、最初は前者と同じく形容詞で文の終りに「知れない」といふ意味の句があつたのが、省略されたもので、自然 ikira にアクセントがついて、副詞的のものになつて了つたと見るのが穩當である。イキラの語根はイキ(イケ)であるから沖繩島の東岸にある離島伊計離いけはなや宮古島の離島池間いけまなども、もと小さい島の義であつたに違ひない。これと類似の語は國語の辭書中には見出せないが、この語はポリネシヤ語(特に布哇語)中に見出される。少・僅に・殆ど・尠らす等の義を有する *iki* に能く似通つてゐるやうに思はれる。

酒盡了 *사크미라코* (saki minanati)

酒が無くなつたの義。今でも saki nu nuanati といふ。酒が皆になつたといふことである。其の現在の終止形は nuanayun (全部無くなるの義)で、國語の皆になると全く同じ言表しである。その他動詞は nuanashun (皆になす)で、一代男の「朝に貰ひためて、夕に皆になし」なども、asa ylanéti, yusanéti nuanachi と逐字譯をすることが出来る。

請裏頭要子 *우치바라외저아슴비* (uchibara wzech asibi)

内に行つて遊べの意。之をオモロ流に表記して見ると、「うちばらおわちへ、あすべ」になる。「おわちへ」

は敬語で、「あすべ」は卑語だから釣合はないが、前者を「いぢへ」(行つて)に直すか、後者を「あすびめしよわれ」に直すかすれば、立派な古語になる。現今の口語に直すと、uchibara ndji, asibi となる。敬語にする と uchibara ndji, asibi mishōri となり、もつと敬語にする と uchibara imenshōchi, asibimishōbiri となり、最上の敬語(按司以上の人に向つて)にする と uchibara uchenshōchi, wāshimshōri となる。今一つ、自分より階級の下の方者(平民の老人などに向つて)には uchibara mōchi, asibimshōri といふ。この外にぞんざいな言表し方が二ある。uchibara は uchibara に n (御)の附いたもので、貴族の家の夫人の居間にいふが普通の家ではさうはいはない。私は二三年前渡名喜島にこの uchibara といふ語が遺つてゐると聞いて、面白いと思つたが、語音翻譯を披いて、四百年前にはその一般に使用されたことを知つた。

平坐 *마고우와리* (masūgu yuwari)

これはおらくにしないの意であらうが、まつすぐ坐れの意に解して譯してある。마고우는 masūgu と發音したかも知れない。「坐る」は今では yiyun といつてゐるが、オモロでは「あちへ」などのやうに表記してあるから、古くは文字通り發音したに違ひない。宮古八重山の方言で、この「る」が *ri* になつてゐるのでも知れる。「酔ふ」などの如きは、今でも原音が崩れずに居るが、その發音は國語のそれとは可なり異なつた、兩唇の摩擦音で、b に餘程近いからである。ところがその頭音を *pi* であらしたのを見ると、當時既に *y* に移つてゐたと見なければならぬ。それは兎に角、*pi* 와 리は組躍り(戯曲)などに出てる、*yiyōri* (坐れ)に近い發音であつたと思はれる。

面紅스라루아개사 (tsurana nu akasa)

顔が赤いの意。아개사는 akasa と發音したか、^{아개사}と發音したか判然しない(々)は那覇市の垣花の方言にある)。今では akasa といつてゐるが、オモロにも「あけのよるい」(赤の鯉)などと出てゐるから、ことによると、^{아개사}と發音したかも知れぬ。さうしてかういふ言表しの場合、今では akasa は動詞と同じく、語尾にnを附けるやうになつてゐるが、當時はオモロなどと同じやうに、nを附けない事もあつたと思はれる。「酒無了사기나」の項參照)今でも古風の老人などは、之を附けないでいふ場合があるが、その方が力が強いやうに感ずる。

面白스라루시루사 (tsura nu shirusa)

顔が白いの意。

這箇叫甚麼子구리야루옹가 (kuri ya nu ga?)

子は衍字であらう。昌平館學問所本には、子になつてゐるが、内閣文庫朝鮮版本には、予に近くなつて居り、南葵文庫本もやはり同様で、しかも縦の棒が折れて、左に曲つたのではないかと思はれるふしがある。ことによると原稿で諺文の子を書きそこなつて、消さずに置いたのを、漢字だと思つて、あんな變な字を刻んだのかも知れぬ。それは兎に角、この短文の意味は、これは何かといふことである。前にも述べた如く、主格をあらはす互爾遠波「ハ」は華夷譯語時代には ^미 であつたが、この時代には ^야 になつて、いつしか實辭に融合して、今日に至つたものである。即ち現今では kuri ya は kure になつてゐるが、實辭の語尾が長母音である

る場合には、融合しない。kami ya (龜は)、jira ya (次郎は)、ta ya (田は)などのやうに、原形を保存してゐる。それがuの短母音で終る實辭につき場合には、tako (鮫は)、iyo (魚は)のやうに融合し、nで終る者につき場合には、tino (天は)、ino (犬は)などのやうに融合する。しかし方言には古形を保存してゐるのかなりある。私は大正三年から同六年まで腎臓病を煩つて、那覇市の郊外で靜養してゐたことがあるが、その邊の士族の老人たちが、kuri ya (これは)、wan ya (私は)などと古風な物言ひ方をしてゐるのを聞いて、最も變化してゐる都會地の附近にも、「方言の地離れ」のあることを知つた。

這箇人心腸好고노피조기모로요다사 (kunu helu kimu nu yutasha)

この人は心が好い。之を現代語でいつて見ると、kunu helu chinu nu yutashan である。chinu (√kimu) は、古代國語同様、kukuru (心)の同義語として使はれ、今尙並び行はれてゐるが、これと複合語を作る語は一定してゐて、混同することがない。これには一定の法則があるといふわけではなく、銘々の語感に相談して、使ひわけるといふことになつてゐる。yutasha は、yutashara (未然)・yutashayi (連用)・yutashan (終止)・yutasharu (連體)・yutashari (已然)と活用する語で、yutashiku とすると、副詞になる。オモロには、その同義語に、misha といふ語が出てゐるが、この語は八重山の方言では、今尙ほ盛んに使はれてゐる。

這箇人心腸歹고노피조기모로요알사 (kunu helu kimu nu yuwarusa)

この人は心が悪い。yuwarusa の yu は、yutasha の頭韻の耳に残つてゐた採録者の手が、無意識的に活

た結果で、無論 *varusa* の誤りである。この語は今では *wassa* に變化してゐるが、活用は *yutasha* と同様である。かうして相對立する形容詞の語尾が、一は *sha* で他は *sa* になつてゐるが、あらゆる形容詞の語尾は、どちらかに屬して、しかも一つの方言では、殆ど一定してゐて、容易に混同しないといつていい。初めて琉球語を學ぶ人は、一々覺えるに骨が折れるが、私などは語感に相談して、誤りなく之を使ひわけることが出来る。兩者の統計はまだ取つてゐないが、*sha* が大多數を占めてゐることは明白である。兎に角、形容詞から副使を造る時、概して語尾が *shiku* になるものは *sha* から來たもので、*ku* になつてゐるものは *sa* から來たと見たら間違ひがないが、いくらか例外のある事を知らなければならぬ。琉球館譯語には、「好、約達撒」「不好、哇祿撒」となつて、兩方とも *sha* になつてゐるが、明時代の北方の言葉には、*sa* といふ音節がなかつたから、その間の消息を窺ふことは出来ない。だが、オモロには殆ど「しや」になつてゐるから、*sa* は後に發達したやうにも思はれる。置縣以後は所謂言語教育が全くなつた結果、その *sha* はたんだん廢れて（そして其の外の拗音も之と道連れをして）、今日では五十臺以下の人たちの琉球語からは、殆ど聞かれなくなつてゐる。その結果、「しく」語尾の副詞が、漸次「く」語尾のに變りつゝある。

天 (tin)

これは今では *tin* になつてゐる。もしあの時今と同じく發音してゐたとすれば、朝鮮語には口 (ㄷ) の音節があつて、他の場合には、それを用ゐて表記してゐるのだから、正しく表記することが出來た筈なのに、わざ／＼と *tin* と表記してゐるところを見ると、當時は *e* は口の開きが狭まり、同時に舌端も上つて、*i* に

近づいてゐた、と考へなければならぬ。序説にも一寸觸れて置いたが、琉球館譯語には、「天、旬尼」と見えてゐて、それよりもつと古い形になつてゐる。旬尼の發音は *tienni* だから、當時の琉球人は *ti* と發音してゐたに違ひない。丁・定 (*ting*)、町・亭 (*ting*) 等を有つてゐた支那人が、それを用ゐずして、故更に旬尼を用ゐたのは、その母音が *e* と *i* との中間音であつて、しかも語尾の *n* が *i* を伴つてゐたことを語るもので、オモロの表記法の「てに」と符を合すやうである。オモロの中には、「てに」が二十六、「天」が四十二現れて、「てん」と表記したのは一つも見えてゐない。五の卷の一章の中に、「てに」が三ツ、「天」が一つ出てゐるのを見ると、右にあげた四十二の「天」も、皆悉く「てに」と同様に發音したことは疑ふ餘地がない。それは同じ頃に建てられた金石文に、「てに」としたのでも明らかである。韻文及び文語では、この語の發音が *tin* に變つて了つた後までも、古い假名遣を踏襲して、しかも古風に發音してゐたのである。琉球館譯語のはそれとは趣きを異にするもので、當時の發音のまゝを表記したのだから、「旬尼」の一例だけを見ても、琉球館譯語が語音翻譯より遙に古いといふことが知れる。

天陰了 (tin kumoti)

空が曇つた。琉球館譯語には、「天陰、旬尼奴姑木的」(*tin nu kumoti*) とあるが、傳信録の琉球語では、之が、町奴姑木的 (*tin nu kumoti*) となつて、現今同様になつてゐる。語音翻譯時代にもかういふ場合には *tin* の下に *nu* を附けたと思はれる。

天晴了 (tin faniti)

空が晴れた。琉球館譯語には、「天晴、甸尼奴法立的」(tini nu faniti)とある。この法立的を見て、斗利詞が faniti で、諺文で琉球語を表記した時、無氣音の P を寫し、有氣音の F で F を寫したことを十分確めることが出来る。

下雨아의뽀네 (ami futi)

雨が降る又は雨が降つて來たの意で、今でも ami nu fuyun (∨fuyin) 又は ami futi と云ふ。ami futi は雨が降つて、又は雨が降つたの意にもいふ。試みに、琉球館譯語以下に出てる下雨の音譯を掲げて見ると、

(一)華夷譯語	(二)音韻字海	(三)中山傳信錄
失莫嗑七福錄	嗑七福錄	阿梅福的

となつてゐる。(一)は多分「下雨」の譯をきかれて、一字々々 shimu ami と直譯し、更に日本語流に furu と意譯したのを、そのまゝ採録したやうな氣がするが、冬寒い時分驟雨が降ることを shimukakiyun と云ふから、或はさうした言表しがあつたかも知れない。福錄は日本語流の終止形で、これは fuyun 又は fuyun といつてゐるのに違ひない。後世(一)を臺本として、琉球語を採訪した(二)には、shimu が省かれてゐる。(三)は現今のと同じものになつてゐる。

下雪이귀리 (yuki furu)

雪が降るの義だらうが、これでは連用形になつてゐる。之に對する例の三譯語の用例を掲げて見ると、

(一)華夷譯語	(二)音韻字海	(三)中山傳信錄
失莫由乞福錄	由乞福錄	又急福的

になつてゐる。(一)は下雨の場合と同様であるが、戯曲の詞の中に、「雪霜も降ゆり(連用形)とあるのと比較すべきである。(二)にはやはり shimu が省いてある。(三)のは二百年前のものだから、近代音で讀むと、yuehi futi になつて、現今のと同様になる。序に琉球では雪が降らないので、霰のことを普通 yuehi といつてゐることを附加して置く。

雪任了이귀리다 (yuki furida)

雪が晴れたの意。

日頭리다 (tada)

太陽。オモロには「てだ」になつてゐるが、今では tada になつてゐる。奄美大島諸島の方言では、tada で其他 tidan や ehinda になつてゐる方言もある。この語は tiyan (∧hiryan 照る) と縁を引いてゐると考へられてゐる。オモロの中にある「てでかちちよわれ」(照り輝き給へ)ので、(tidi)とも比較して考へるべきものであらう。安藤正次氏は「言語と文學」第一輯に、「登陀流」「血垂」考——わが古代國語におけるアウストロネジャ語系要素の一例——を發表されて、「わが古典に見えてゐる「トダル」「チダリ」が、琉球語

生蕃語（アミス蕃では日のことをチラルと呼んでゐるが、多くはチダルと呼んでゐる）を中間において見れば、遠くインドネジャ、メラネジャ、ポリネジャの諸語に見えてゐる *sinaru* と同系のものであるといふ考に對して、肯定の答を與へ得ることを立證し得たと思ふ。」といつて、「まづ、古事記に見えてゐる、登陀流天之新巢のトダルは、光り輝くの義と解して、少しも支障を見ない」と結論されてゐる。

日頭上了^ㄷㄷ^ㄷㄷ^ㄷ (tuda agati)

日が出たの意。今でも *tuda agati* といつてゐる。

日頭落了^ㄷㄷ^ㄷㄷ^ㄷ (tuda yasimjitehu)

日が落ちたの意。日が休み入つたの意味らしいが、今ではさういふ言廻しはない。序にいふが、*nindjan*（寝る）の敬語は *wesimishen*（お休みなせる）である。老人などは時偶 *tida nu utimishochi* と敬語法でいふこともあるが、一般には *tida*（或は *fi*）*nu utiti* といふ。日が傾くには、*tida nu sagayun* といひ、歌などにも「日や西下て云々」とある。

風간^ㄷ (k'adij)

今は *kadzi* と發音してゐる。

天亮了^ㄷㄷ^ㄷ (yü kamii)

夜が明けたの意だが、この音譯の意味はわからない。きつと脱字や誤字があるに違ひない。今の口語では *yü akiti* といつてゐる。「おもしろうし」の五の卷の三章に、首里杜^{しり}上^{の上}て行けば、よのあけて、^{夜が明けて}、

日の照りよる様に」と見えてゐる。十三の卷の五十二章に、「ようあけ出^いちへて、あげどまに帆走^{はふ}ればとあるが、今の口語には、天亮^{あけ}といふ語はなく、その代りに *yükiaki* を使ふが、これは黎明^{あけ}にといふほどの義で、副詞的に使はれてゐる。戯曲などには、「夜明け白雲^{あけ}」などと見えてゐる。オモロでは、あげどま、あげだちがその同義語として使はれてゐる。稀に、あがるい（東）のあけもどろといふ語も使はれる。口語では東雲^{あけ}のことを *yüki-gata* といひ、その動詞的言表しは *yü nu shira-aki shun* 又は *agari*（東天）*nu aka-gayun* である。混効験集に、「あか^いい、晁暉^を云。夜の明^あんとする時分も云。映の字敷」と見えてゐるが、今でも *akagaton* 又は *akagayü indjton* といへば、東天の白むにいふ。たゞ *akagayü* といへば、明るい方の義で、*kurasin*（暗き方）に對する語となる。別に *akami*（赤み）*akanun* といふ語があるが、かういふ場合には使はないで、顔や果實などの場合に用ゐる。以上述べたことから考へると、*iyugami* はそのまゝでは、どうしても解けない。ガミの前に^あを入れて、*agaami*（*akami*）としても都合がわるい。多分^あガミの間違ひに違ひない。

清早^あㄷ^ㄷ (stomiti)

つとめて。今では *sutumiti* 又は *stimiti* といつてゐる。「混効験集」に、「す^あとめて、朝の事」とある。今一つ、「みすとめて、未明の事。和詞には明闇^{あけぐら}と云。琉歌に、「みすとめて起きて、庭向て見れば、綾胡蝶^{あやぶ}無藏^{むざう}が花と吸ゆる」とも見えてゐる。琉球館譯語には、「早起、速多密的」とある。山原地方及び中頭地方（沖縄島の中部）では、其の同義語として、*akatumchi*（あかとま）が使はれてゐるが、首里那覇では、*akatsichi*

(曉)は yuakiaki (よあけ) と sitimiti との間をいつてゐる。

晌午날마 (gima)

當時は正午(まひる、むひる)を *hinna* といつたらしいが、今では午後のことをいつてゐる。國語の「ひるま」は晝間のことであるが、琉球語のは、かなり制限されてゐて、午前十時頃から午後三時頃までの間をいつてゐる。混効驗集に、「わかひるま、九ツ時分。ひるまは八ツ時分也」と見えてゐるが、わかひるまは若晝間の義で、俗に早晝間ともいふが、午前十時頃から正午までのことで、ひるまは正午から午後三時頃までのことである。俗にたかひるまといふ語もあるが、多分その中間のことであらう。それから同集に、「すかま、四ツ時分」といふのもあるが、午前八時頃から同十一時頃までをさういつたのである。この語は耳遠くなつてゐるが、私の子供の時分には、盛んに使はれてゐた。「おもろさうし」の十三の卷の百十五章にも、「すかまうちにはりやせ」といふ句があつて、すかまには、「八ッ内をすかまと云」と註がしてあるから、ひるまのうちに出帆せよの意である。今は故人となつた琉球の古老で、南嶋八重垣(未定稿)といふ首里語の辭書の著者山内盛熹氏の話によると、中頭郡の越來・美里邊には、*cho*スカマといふ語が遺つてゐて、一朝即ちすかま中の義があるとのことである。スカマは三十年前には八重山の方言にも遺つてゐて、午後の義に使はれてゐたが、今ではもう使はれなくなつたと見えて、宮良當壯君の八重山語彙稿には出てゐない。同語彙中に、「スカマフシ、宵の明星、仕事星の義。其の出現を以て仕事を終る時刻とせるが故に云ふ。(竹富)」とあるスカマも、もと同じ語であつたかも知れぬ。といふのは、利子などの代に月に何回と労働に来るものを *sikama* といつて、大抵すかま即ち四ツ時分に来るやうになつてゐたからだ。かういふところから、スカマに農奴の義が生じ、いつしか労働の義にも轉じたのではなからうか。

晚夕ヨサビ (yusabi)

よさび。今では *yusandi* に轉訛してゐる。宮古島の方言では、*yusarabi* といつてゐる。與那國の方言では *dusabi* といつてゐるが、こゝでは *y* は悉く *d* に變じてゐるから、これが *yusabi* と同語であることはいふまでもない。清の乾隆六十年に編纂された琉歌百控乾隆節流といふ歌集に、「筵敷き召しやうれ。疊敷きめしやうれ。夕さべ降る雨や雪の眞米(中頭郡中城の民謡)といふのがあるのを見ると、沖縄本島の方言でも、*yusabi* といふ語が一世紀前まで使はれてゐたことがわかる。

黑夜ヨサビ (yuru)

夜。これは今日も別に變りはないが、首里語では、つめて *yuyu* と發音してゐる。但、*yuru* と長く引張つて發音してゐる方言でも、複合語の時には、つめて發音するのが普通である。

白日ヨサビ (firu)

晝。琉球館譯語、「晝、必祿 (*pilu*)」

暖和ヨサビ (nuksa)

暖。 *nukusa* 首里語には無氣音がない爲に、*k* と *s* の間の *u* が無聲化されるので、朝鮮人の耳には、これが *nuksa* と響いたたらうと思ふ。この語の語尾も昔から今日まで *sa* であることがわかる。

天熱악사 (aksa)

暑さの義。朝鮮語ではかういふ場合のフは入聲だから朝鮮人には、aksaksa が akka のやうに聞えて、さう表記したのであらう。これは今では atsisa と發音してゐる。

涼快산사 (suidasa)

涼しさ。今では sidasha になつてゐる。この da はすすしのすの變形したものであらう。それを着てゐると涼しい感じのする着物を sida-mun といふ場合があり、そこにあると暑さを忘れるやうな所を sida-dukuru (涼しい所) といふことがある。その他 sida-kadzi (涼風)・sida-gisa (涼しむ)・sidagiku (涼しむ) などと複合語を造る。sidaan (sidanyun) は動詞の終止形で、sidaku は副詞である。過去の終止形は sidadan で、涼みては sidadi である。

向火피루구미 (fi nukumi)

火にあたれの意で、これは今も變りはない。

春하루 (haru)

今では haru になつてゐるが、いまだにその古形の paru の遺つてゐる方言もある。琉球館譯語には「春、法祿」

夏비스 (natsui)

今では natsui といつてゐる。

秋아기 (aki)

achi に變化してゐる。琉球館譯語には、「秋、阿及」となつてゐる。この a は e と i とが併合して了てゐる方言ではケから變化した a と區別する爲に、chi になつてゐるが、e が i になつた結果、在來の i が i となり、或は e が i になつて、在來の i が其のまゝで留つて、二母音の對立してゐる方言では、兩者を母音で別區してゐるから、口蓋化しない。八重山方言では、e a は aki には、穀物の取入れと秋の義があるが、沖縄方言では、農作物の時期が過ぎて、市場に出なくなるを achagayun といつてゐる。その古形は akya-gayun で、「あゝあがる」の義である。この頃は時めいた者が衰へる義にも使はれてゐる。山原の方言では、最適當な獵期のことを aki といつてゐる。「伏山敵討」といふ戯曲の狩人の詞に、「今や猪狩のアーキだやべる」といふのがある。この aki も aki と同語である。

冬푸 (fuyu)

今も別に變りはない。が hyun と發音してゐる人もある。傳信録に、「冬、灰哨」とあるのを見ると、二百年前にもさう發音してゐた人があると見なければならぬ。但、P 音がまだ F になつてゐない方言では、今尙 puyu と發音してゐることも知らなければならぬ。琉球館譯語は「冬、由福」と誤寫してゐる。

今日쿄 (kyō)

琉球館譯語の音譯交 (kiao) と殆ど同様である。これはオモロには、「けお」になつてゐるが、短歌ではけふで寫すことになつてゐる。その語は、今では甚しく變化して、chu になつてゐるが、いまだに kyū と發音

してゐる方言がかなりある。前二者は純粹の *kyo* ではなく、*kyu* に歩み寄つてゐたかも知れぬが、其の間にはかなり開きがあつたに違ひない。クラシカルな歌を謡ふ時、*kyu* と發音してゐるところから、かつて *kyu* と發音したと推測し、ケフ（或はケブ）を文字通り發音した期間の、南島移住後まで續いてゐたのではないかと想像したこともあるが、この *kyu* は一寸くせもので、なほ十分研究しなければならぬと思つてゐる。といふのは、「けふのはこらしやや、なをにぎやなたてる。苔で居る花の露きやたこと」（徂徠が琉球聘使記中に間違つて解釋し、そのまゝ弓張月にも取り入れられた有名な歌）を歌ふ場合には、けふをキユと發音するが、その曲では *kyu* と長母音にしては具合が悪い爲に、キとユとの二音節に分けたままで、この形が或時期の口語中に存在してゐたとは考へられないからである。

昨日기리우 (*kinjū*)

琉球館譯語には乞奴 (*kinū*) になつてゐる。今では *chinū* になつてゐるが、*kinjū* といつてゐる方言もあれば、*chinyū* になつてゐるところもある。

明日아자 (*acha*)

琉球館譯語では阿者。オモロでは「あぢや」になつてゐる。那覇の方言では、若いものや婦人は、之を長く引張つて、*acia* と發音するやうになつてゐる。

後日아산디 (*asati*)

あさつて。オモロには、「あさてや平良たかちの祭り、日本やまとのこらに見せたなやたる」と出てゐる。今の口語でも

asati と云ふ。明後は *asati nu naeha* で、*naeha* には、翌日の義がある。

這月고르스기 (*kunutsuki*)

混効驗集「こんつき、今月也」。今では *kuntsichi* といつてゐる。

來月데왕과스 (*towagwatsū*)

内閣文庫本では、第一音節の所磨滅して、この通り書入れてあるが、至つて不明で、昌平館本では、*de* になつてゐて、やはり不明である。之を *tivagwatsū* と讀むと、現代語に類似の語がない。試みに第一音節の字を *de* に代へて讀むと、*rewagwatsū* になつて來月に近くなる。*de* (*de*) にしても、首里語の *r* は舌端が振動しないで、歐米の採訪者も往々 *d* と思つた位だから、結局同じことになるわけである。大島方言では、來月を *degetsu* といひ、來々月を *dedegetsu* といふから、これから類推して、琉球語でもかつて *dəgwatsū* といつてゐたと考へることも出来る。今ではこれは *tatsichi* といつてゐるが、混効驗集にも、「たつき、立月也。立の字を略すなるべし」と見えてゐる。方言には、*tatatsūki* (宮古)・*tatumū* (與那國)・*tatuchi* (鬼界)・*tatūki* (大島) などがある。

開年마우년 (*myōnin*)

改年、年のあらたまること、琉球館譯語には、「明年、昔年」とある。これは學問のある階級でのみ使はれて、一般には用ゐられなかつたらしい。今は全然使はれないで、*yam* といふ語が用ゐられてゐる。大島諸島や兩先島の方言では、*yane-yani-yani-yayin-yū-en* 等の形になつてゐる。與那國の方言では、*din* になつ

てゐるが、前にもいつた通り、ここでは他の方言の y は d になるから、別の物ではない。オモロでは「やね」になつてゐる。十二の卷の十二章に、「やねの年ならばむかう年ならば」とあつて、「むかう年」(向ふ年)がその同義語になつてゐる。又「あけまどし」もその同義語として用ゐられてゐる。しかし後の二つは今の口語では使はれてゐない。又おしあけどし(押し明け年)・なおりどし(直り年)といふのもあるが、これも今は用ゐられない。この「やね」は彌明後日を意味する「やなあさつて」「やのあさつて」の「やな」「やの」と同語であらう。

拜年 ㄱㅇㅍㅅㅇㅍㅅㅇㅍㅅ (siŋgwatui nu fæ)

正月の拜の義。舊王朝時代には、元旦の朝、位階のある人々が、登城して國王を禮拜したが、之を ㄱㅇㅍㅅㅇㅍㅅㅇㅍㅅ (unifê) とつた。朝拜の義か。ni-fê は u-nifê の轉訛したもので、u (御) と ni (御) との敬語が二重に附いたものである。琉球館譯語には、「拜、排是 (Pai shien)」とあるが、禮拜せよの義である。今でも老人などが ㅍㅅㅇㅍㅅ (pe si) といふことを時偶耳にすることがある。借用した當時は、支那音通り Pai と發音したが、二重母音が長母音に變じ、p 音が f 音に遷つた結果、なになつたのである。それに ni (御) をつけて、ni-fê (ni-fê) にすると、有難いの義となり、後に「にて侍る」の義の dēbiru (dayabiru) (du yayabiru) をつけると敬語になる。この言表しは、kafushi (果報)・sidi-u-gafu (冥加) と並び行はれてゐる。

地 ㄱㅇㅍㅅ (dji)

琉球館譯語「地、只尼」。

地平正 ㄱㅇㅍㅅㅇㅍㅅㅇㅍㅅ (dji masigu)

土地が平坦の義か。今では dji nu massigu といふ。平坦をなといひ、平坦にするを tōniyun 又は tōnashun といふ。小高い平地を tōbaru といひ、地名に多くのことつて、桃原があててゐる。

山頂 ㄱㅇㅍㅅㅇㅍㅅ (san nu tsidji)

山の下にしが落ちてゐる。山の頂の義。そこでは yama は藪の義になつてゐる。山の同義語に、muyi (munri) (mori) があるが、萬葉などのもり(杜)と同義で、神の在す處、神の下りつく處の義である。普通サンよりは低い所にいつてゐる。その同義語には、タキ(嶽)がある。tsidji は、伊豆七島の方言にも見出されるが、琉球で普通「辻」を當てた地名は、皆それである。mitsidi-wi nu kami といへば、巫女などの頭の頂に宿つてゐる神のことである。tsidji hi kamiyun は頭に頂いて感謝する意である。yantantsidji は家のでつへんの義である。

山底 ㄱㅇㅍㅅㅇㅍㅅ (san nu shicha)

山の下即ち麓の義。今では yamasuku とつて、san nu shicha は山麓の義に使はれてゐる。童話に、zinzin zinzin sansuku nu yana nji utifi, miizi kwé yó (瑩さん、瑩さん、山底の藪へ行つて、落ちて、水を飲めよ) とあるのを見ると、古くは山底に sansuku とも言つたに違ひない。麓山のことを fayama といふ。

大路 ㅇㅍㅅㅇㅍㅅ (upunichi)

今は ufumichi といふが、山原地方及び宮古八重山の方言では、upunichi といつてゐる。古くは upudjō

ともいつた。「大門」と書いて、*ufudio*とよんでゐる地名はその名残りである。これについては、「門金」の條で述べることにしよう。

小路子ミチ (*kū michi*)

今では *gunna michi* 又は *michigwa* といふのが普通である。

酒サキ (*saki*)

今は *saki* になつてゐる。琉球館譯語には「撒及」。オモロには「おざけ」。その同義語は、「しげち」「みき」「みしやく」。英祖王(一二二九年—一二六〇年)を謳歌したオモロに、「なつはしげちもる、ふよはおざけもる」とある。混効驗集に、しげちは酒のこととしてある。山原のオモロに、「わが國の習ひ、粟みき造て、黍みきつくて」とある。明の嘉靖十年に琉球に使ひした冊封使陳侃の使琉球錄に、「造酒則以水漬米越宿令婦人口嚼手搗取爲之名曰米奇」と見えてゐる。續昆陽漫錄には之を引用して、「琉球にて今も米奇を造ると云ふ。まことに國々の俗あやしむべきものあり」と記してある。みきは今では神酒の義にのみ使はれてゐる。米を磨りつぶして、水に和して造つた、一夜造りのものだが、米を嚼んで混することはなくなつてゐる。混効驗集には、「おむしやく、御神酒の事也。むしやくみきとも云。和詞にもみきと云説あり。口にて米をかみくたきて、昔は酒を作ると吳竹集に見ゆ」と説明してある。天保の頃薩摩の人が書いた「南島雜話」に、「西東屋木内邊に調ゆる造酒は女共嚼碎き調ゆるとなり、是を嚼造酒と云ふ。甚だきたなき仕方なり。(中略)名瀬も此以前は總て嚼造酒なりしが、今は嚼みて調ゆることを止めたり。(中略)西方にて嚼造酒の調方年若

き女半時計鹽にて齒を磨き又紙にて能く拭ひ、白齒にて二嚙位嚼て交する迄なりと云」とある。沖繩では、この風習は、一時代前まであつたが、之をカンオンシャクといつてゐた。嚼御酒の義である。宮古島では、之を *nki* (神酒) と云つて、精米を水にひたし、後水氣を去り、臼で搗きこなし、煮て糊の如くにして、鹽で口を清め、更に之を嚼み碎いて又水を混じ、瓶に入れて密封すること五日位で酒にしたが、之に拂はるものは處女であつた。八重山の民謡「仲良田節」中に、「我等宮童みやどうの作である御酒、御待ちしど居たる、待ちはるて居たる云々」とあるのも、之をいつたものである。現今沖永良部で、米を磨りくだいたものに水を和して、夏の飲料にしてゐるミンヤウも、その遺物であらう。みしやくのシャクが酒の轉であることはいふまでもない。お酌のシャクもそれであらう。「琉球國中山官王府制」に出てゐる酒庫理はサクダイと發音してゐたことを序にいつて置く。それから、世間では能く琉球泡盛といふけれども、現今琉球人自身はアワモリといふ語を使はない。しかし八重山の民謡五篇と宮古島の民謡二篇とに出て居り、伊江島の歌の囃子には、それが酒盛りの同義語として使はれてゐるから、ことによると、そのアワは古い時代の酒の原料の粟の義で、チェンバレン氏の琉球文法中に出てゐる、「暇乞よと思て、持ちやる杯や、涙あはむらち、飲みもならぬ」のあはむらちは、アハモリを活用させたもので、酒に爲しての義かも知れない。兎に角泡盛には普通カラザキといつて、右にのべた弱い酒類と區別してゐるが、明の薛俊の著「日本寄語」(續説鄂卷第十一)の飲食門中にも、「燒酒、隔辨曬箕」とあるから、其の頃九州地方でも、さういつてゐたことが知れる。混効驗集にはまた、「あまおざけ、醴の事」とも見えてゐるが、これは冬至・元日・十五日などの大祭に用ゐたもので、特に之を

造る家があつて、嫡子相傳で次男以下は其の製法を知らなかつたといふことである。昔は酒のことを「おくすり」ともいつたと見えて、同集に、「おくすり、御酒の事也。首里王府御双紙にも見ゆ」といふことがある。例の陳侃使録に、「其南蕃酒即出自暹羅釀如中國之露酒也」とあるのを見ると、室町時代に、その南蠻貿易が隆盛をきはめてゐた頃には、暹羅の酒の盛んに輸入されたことがわかる。現今琉球で出見される南蠻酒はその頃酒類をつめて來た用器と見て差支なからう。

白酒링(白)사(白)기 (nigūri dzaki)

第三音節の(白) (sa) は多分(白) (zi) の誤りであらう。濁酒の義で、みしやぐの異名に違ひない。

清酒요(白)사(白)기 (yūka saki)

良か酒の義で、所謂泡盛や南蕃酒のことであらう。「よか」といふ形容詞は九州方言特有のものであるが、琉球語にも夙に現れてゐる。オモロには、「みしやぐ」に「能か子」と註した所がある。さむらひ(士族)の同義語に、yukatohuといふのがあつて、さむらひよりも餘計に用ゐられてゐるが、これは「善か人」の義で、宮古八重山の方言では、ユカルビトとなつて、ブザ(百姓)に對する士族の義に使はれてゐる。(オモロでは、吉日のことをきやか、日といふが、其の同義語はよかる日である)。ユカッチュの出來た経緯は、多分かうだらう。古風な人特に婦人は、何か爲になる事をして呉れた人又は自分の爲に盡してくれる人を賞讃したり感謝したりする時に、能くユカッチュ(yukatohu)といふ、名詞であるか感歎辭であるかわからない言葉を發するが、これにも「善か人」の義がある。思ふに、今から四百年前、中央集權が斷行されて、階級制度が

出來た頃、其の統一事業に助力した人に、「善か人」といつたのが、いつしかユカッチュと轉じて、さむらひの同義語として用ゐられるに至つたのであらう。「よか」といふ形容詞が、室町期に日琉の交通が盛んであつた頃輸入された九州方言であることは、推測するに難くない。

飲酒(白)미 (numi)

これは酒を飲めの義で、今も變らないが、少し鄭寧にいふと、numi wa となる。numé ともいふが、これは wa が實辭に融合した形である。wa には「よ」といふ程の義がある。チェンバレン氏は琉球語の命令形の語尾には、i と é との二形があるといはれたが、その實は i 一つだけである。

酒有(白)미(白)아(白)리 (saki ari)

「有」は琉球館譯語には、阿立と音譯してあるが、この時代にもやはり同様で、さういつたに違ひない。或は國語の文語風に譯したのではないかとも思はれるが、大島・徳之島・鬼界の三方言で、ari 若しくは ari になつてゐるのを見ると、その頃まで沖繩方言にも、この古形が遺つてゐたと見なければならぬ。この形は an (an) に變じ、最大多數の動詞の終止形と調子を合せたと見ることが出来る。(次の條参照)。今では「酒が有る」は saki nu an だ。「酒はある」は saké (<saki ya) an だ。

酒無(白)미(白)아(白)리 (saki na)

今では「酒がない」は saki nu nēn といふ。「酒はない」は saké nēn といふ。nēn は又 nēran ともいふがこれは後に發達した形らしい。nēn の古形は nainu で、短歌などには、「ないぬ」又は「ないらぬ」と表記

し、山原方言には、*nenu* 又は *neranu* といふ形で保存されてゐる。一寸 *nen* の形をみただけでは、*an* (有り) の類推で、一般終止形の語の語尾の *n* ($\wedge m$) を *ne* ($\wedge nai$) に附けたやうにも思はれるが、之を疑問形にすると、*neni* (無しや) になるから、この *n* は *nu* で、*aran* (有らず) の類推で *n* を附けたものであることがわかる。今一つの形の *nenam* も、やはりその類推で *ran* を附けたことはいふまでもない。この二重打消は、他の方言でも同様である。宮古方言では、*nyan* となつて、*aran* と同形になつてゐる。加計呂麻方言には、*ne* と *nen* の兩形があるが、後者は *aran* (あらず) と同形のものである。華夷譯語に「乃」と表記し、語音翻譯に *ni* と表記してある *no* が、「なし」から轉訛した「ない」と同語であるとすれば、それに否定辭の *n* ($\wedge nu$) が附くと、二重打消の形になつて、論理と語法とは一致なくなるが、かうした例はどの國語にもあるから、さう珍らしくはない。たゞ問題になるのは、いつ頃どうしてさうなつたかといふことである。この邊の消息を窺ふ前に、八重山方言を一瞥する必要がある。同方言では、沖繩方言の長母音の *o* は、殆どすべて二重母音の *ai* になつて、古形を保存してゐるのに、この語に限つて、*no nu* (その複合語は *nen-nasin* 無くする、*nen-harun* 無くなる) となつて、新しい形になつてゐるのは、沖繩方言の二重母音が長母音に變つた後に、この語の輸入されたことを語つてゐるのではあるまいか。私は「有り」「無し」を意味する各方言の形と比較しようと思つて、宮良當壯氏の南島語彙稿を披いたら、この肝腎な語が一も集められてゐないのを見て、失望した。もしこの語を八十いくつかの方言と比較することが出来たとしたら、もつとはつきりしたことがわかつたであらうに。仕方がないから、兎に角僅ばかりの文獻を辿つて、之を補ふことにしよう。琉球館譯語に、「無、乃」になつてゐるのを見ると、十五世紀の初葉から十六世紀の初葉までの一世紀間、この形容詞(用言といふ方が穩當かも知れぬ)の形は *nai* だけで、*nu* はまだ附いてゐなかつたやうな氣がする。然らば *rai* の前身は、どんな形をしてゐたのだらうか。これについて、文獻は餘り語つてゐないが、今日の口語中には、かなりその痕跡を見出すことが出来る。國語の「びなし」に相當する「びなさ」や國語の「いとなし」に相當する「いちゆなさ」等の複合語中の「なさ」が即ちそれで、これが他の形容詞と同一の形になつてゐるのは、「無し」の義の九州方言「なか」を比較すべきものである。この「なか」が古代國語の影響で「なし」になつてゐたことは前項「酒多、オ早々」の例でも知れるが、その痕跡は「行衛なし」「沙汰なし」「カミーなし」「おかまひなし」といつたやうに、いまだに終止形の氣持で使はれてゐるのも知れる。仲宗根文學士の話によると、同君の郷里今歸仁村では、今尙ナ一ッといふ語が「からツぽ」といふぐらゐの意味で使用されてゐるとのことである。一例をあげると、*ari ya mi itchushi ga, furi ya nashi* (あれは實が入つてゐるが、これはからつぽだ) のやうなものである。尙又複合語としては、*nashi-mudui* (目的を達せずして、手ぶらで歸つて來ること、首里語の *nna-muduyi* に當る)・*nashi-mum* (やく者)・*nashi-munui* (嘘をつくとか、無駄をきくとかすること) 等がある。又九州方言の影響も多分に受けてゐるらしい。「おもろさうし」の十四の卷の六十二章に、「きこる國直入りて水乞へば、水無きんま神酒出ぢやすらしい。「おもろさうし」の十四の卷の六十二章に、「きこる國直入りて水乞へば、水無きんま神酒出ぢやすらしい。とよむくになお」といふオモロがあるが、一首の意は、名だたる國直(今ではクンノイ)に入つて、水を乞うところが、水は無いといつて、眞神酒を出すといふ、よい國だ、鳴響む國直はといふことである。

「なきゃん」は、今の韻文では「ないらぬ」とす可きところである。これは九州方言の「なか」の轉訛したものに、否定辭 n のついたものである。かういふのは、金石文中にも見出される。嘉靖三十三年に建てられたやらざもり城の倭寇碑中に、「むかしからかちよくいくさのきちやすることはなきやものやれども云云」と見えたるが、それは昔より海賊外寇の來たりしたためし無しといへども意で、「なきやもの」は「なかもの」の轉訛したものである。この外にも國語特に九州方言の影響を受けたのがかなり見出されるが、鎌倉・室町の兩期に、日琉の交通の盛んであつたことは、琉球史の語るところで、オモロの中にもそれを歌つたのがかなりあつて、しかも「京鎌倉」「大和」「筑紫」等の名が澤山出てゐるのを見たら、思半ばに過ぐるものがあらう。特に慶長十四年の島津氏の琉球入以來、琉球語に大變化の起つた消息は、混効驗集の序に、琉球入より半世紀もたないうちに、「みせざるのことば」(古代琉球語)の夥しく減少したことを嘆じたのを見ても窺はれる。國語の「なし」は、鎌倉期に「ない」に變じて、室町期以後勢力を得たといはれてゐるが、右に述べたやうな事情で南島に這入つて、其の「なき」を征服したに違ひない。毎日毎時間使用されるこの語が、他の形容詞と手を別つて、その姿をかへて了つたのはいふまでもない。其頃形容詞は、語尾に n (「有り」を意味する an の縮まつたもので、八重山方言はいまだに古形を保存してゐる) を附して、動詞と同形になつたので、nai とはますく、かけ離れてゐるに違ひない。だが、いつまでも仲間はずれになつてゐるわけにもいかないで、まづ否定形の動詞にまねて nu を取り、nu が n に變つた時に、あらゆる用言と同一の語尾を有するやうになつたが、前に述べた如く、加計呂麻方言では、また na と non とが並び行はれてゐる。non

の n が、「有り」の義の n でなく、打消の n であることは、前にも述べた如く、これを疑問形にする時、noni となるので知れるが、又今一つの形に nonan (無い) といふのがあるのもわかる。これは aran (あらす) の類推で出來たもので、non より後は後に出たものに違ひないが、中山傳信録に、「無、儻」(ナシ)と出てるのを見ると、西曆一七二〇年(清の康熙五十九年)迄は迎れるが、恐らくもつと古くから行はれてゐたのであらう。だが、オモロの中には現れてゐない。それから序に附加して置きたいのは、「ない」の前身「す」のことである。琉球館譯語に、「不知道、失籃子」と出てるのを見ると、この「す」の使はれてゐた事も知れる。「おもしろさうし」の十四の卷の二章には、「おもひかけす首里赤頭行會て」と副詞句となつて現れてゐるが、これは今では uninehakiran とらつてゐる。だが、今でも unakai-furadai (思はず知らず) といふ疊語レヂュウケイ法が使はれてゐる。時には taradai shon (足らずしてゐる即ち食物などをもつと喰べたいと思つてゐるの義) といふ言表しもしてゐる。この語法が、原始國語より受繼いたものであるか、それとも後世になつて、國語より拜借したのであるか、その邊は判然しないが、いまだに行はれてゐることは事實である。それは兎に角、中が當時の朝鮮では nai と發音してゐたか、今日のやうに non と發音してゐたかによつて、當時の琉球に於けるこの語の發音は決定されるわけであるが、この否定の終止形が、室町期のそれと同様であつたことだけは知るに難くない。

酒醉了사귀이아리 (saki yūti)

酔つたの意。saki は直譯した爲に入れたので、今日と同様に、たゞ saki といつたに違ひない。이아리는

であるか、それとも *wi* の音が朝鮮語にない爲に、それで間に合せたのか、その邊は判然しない。琉球館譯語を見ると、これが「酔了、由的 (Youti)」となつてゐるが、もし當時の琉球語で、今日のやうに *witi* であつたとすれば、*wai* (威・位・畏・爲・委等) の音節を有した明人は、何故それを用ゐて表記しなかつたらうか。琉球語の *w* が、語頭に現れる場合に、*y* に變る傾向は古くからあらはれてゐて、*yiyun* (居る)・*yi* (猪) 亥) などの在來のイ列のものはとうに *y* に變じ、*wigosa* / *yitosa* (酔し) は過渡期で、兩方使はれてゐるが、*wiyun* (酔ふ)・*wbachun* (嘔吐)・*wiguyun* (扶る) 等のエ列から來たイ列のもの、及び *wun* (居る)・*wa* (緒・字)・*wiki* (桶)・*wiyun* (折る) 等のはオ列から來たウ列のものも不相變 *w* で、少しも動搖してゐない。*wiyun* の發音が古は *w* であつて、四五百年前に *y* となり、二百年前に再び *w* (傳信録、「大醉、威帝」) になつて、古形に戻つたとは考へられないから、「おもしろさうし」の十一の卷の九草の「おざげやゑよてどたちよる」の如きも、*udzaki ya wiyuti du tachuru* と發音したと思はれる。これは直譯すると、お酒は酔うてぞ立つて、この人は泥酔しない限りは歸らないといふ程の意である。

飯音바리 (ubani)

琉球館譯語にも、「飯、翁班尼 (wungpani 即ち ubani)」とある。混効驗集に、「みおばに、美飯の事也。おばにと云」と見えてゐる。今では *ubun* に轉じてゐるが、素敵においしいものを喰べる時、*uban nu guton* (ウバンの如し) といふ言廻しをする。同集には、又「おばのがなし、和詞にはおものと云。源氏桐壺の卷に、大床子のおものなどはと有。御膳を申也。膳とよめり、と云々」とも見えてゐる。がなしは愛しの義の

接尾語で、之を神又は身上の人に附けると、最上の敬語となるが、其の人に關する事物にも附ける。*ukami-ganashi* (神様)・*shun-djanashi* (首里がなし即ち國王殿下の義)・*unde-ganashi* (を叱り)・*unudan-djanashi* (お還御) 等の如きものである。乞食なども物を乞ふ時には、*usand-ganashi utabinsiori* (を残りを下るませ) と言ふ。御飯のことを普通 *munu* といふが、鄭寧な言葉では *ubun* といふ。

喫飯아기리 (agiri)

お上り即ち食事をせよの義。食事に古く *agimunu* といつたことは、前に述べて置いた。この語が差上げよの義の *agiri* とは別種のものであることも序に述べたから、茲には贅しない。たゞその同義語について少しく述べることにしよう。混効驗集に、今では死語となつた「食などがれ」といふ意味の語が三つ出てゐる。一つは「にきやびれ」で、山原の方言には、*nkyagiri* / *nehagiri* といふ形で使はれてゐる。もつと鄭寧な言葉では、*nehagimishori* といふ。鬼界島の小野津にも、*kkyagiri* といふ形で遺つてゐる。今一つは、「にきやがうれ」であるが、これも或田舎では *nehagomishori* といつたと山内盛熹氏はいはれた。それから今一つは「あがふれ」であるが、これもやはり *agomishori* といつてゐることであつた。これは八重山の方言にも遺つてゐる。琉球館譯語には「喫飯、昂乞立翁班」と出てゐるが、これは支那語流に主格と述語とを顛倒したもので、*ubani agiri* といつたことはいふまでもない。それからこれにはウバニが翁班となつてゐるが、他の二ヶ所では翁班、尼になつてゐるから、尼を書き落したに違ひない。

做飯오바리니 (obani sūri)

御飯の用意をしるの義か。現代の北平官話では做菜は料理するの義である。suri は今の口語では使はないが、戯曲ではせよ(ㄱ)といふ語の代りに、「すれ」(si:ni)が使はれてゐる。この形が古くからあつたことは、琉球館譯語に、「作揖、撒哇立是立」とあるので明白である。この語は、すら(未然)・すり(連用)・しゅゆん(終止)・しゅゆる(連體)・しゅゆれ(已然・命令)と活用し、前者はㄱ(未然)・si:ni(連用)・suri(終止)・shuru(連體)・si(已然)・ㄱ(命令)と活用する。(序にいふが、「して」はㄱとなつて、自ら連用の si:ni と區別されるやうになつてゐる。)この活用は、國語の「爲」のそれに似て、しかもオモロにもあらはれてゐるから、この方が前者より古い形だと私は思つてゐる。それから、山原の方言にも、この二形の存在してゐることは注意すべきことである。「拵へる」を意味する語には、shikōyun があつて、其の命令形は shikori である。別に shinyukuyun があつて、準備するの義で、仕事特に遊びなどの場合に用ゐられる。今一つ igumashun といふ語があつて、何かしようとして、準備するまでにはいかないが、心の準備をするの義で、その同義語には umitashun (思立つ)がある。これらとは關係はないが、やる氣を起して緊張する義の語に chitdashun といふのがあることを附加して置く。

大米飯 ㄱ ㄱ ㄱ ㄱ (kumi nu ubasi)

米の飯。最後の ㄱ (ka) は明に ㄱ (ㄱ) の誤寫である。今ではさうはいはないで、たゞ ubun といふ。そんな言ひ方では me であるが、これは米の音から來たものであらう。小米のことは inyabi である。inya は ini (Vine) の轉訛したもので小の義、hi は米の義である。米の種類に「まぐ米」といふのもあつたが、

混効驗集にはその解を附せずして、たゞ「嘉靖三十三年やらざもりまうはらへの時にみせたる御双紙に見えたり」とあるから、二百年前既に死語となつたことがわかる。田舎の古歌に「我嫁なて來すやまぐ米と抱きゆる」といふことがあるから、上等の米の義のあつたことが推測される。韻文には米のことが「しらちやね」と見えてゐるが、今でも巫女などは、神に祈る「おたかべ」では、shirachani と唱へる。白種の義である。その對語は「あまぢやね」(甘種)である。又 yuni (よね) ともいふ。米を入れる大きな扁平な箆を yuna-baki といふ。混効驗集に、「よねゆき、米の事又砂をもよねといふこと有、元三の且内裡の御庭に砂を置をよねまくといふなり」とある。又國語同様に、米の異名に菩薩といふのもあるが、混効驗集にはばさつ花を五穀の花と解してゐる。歌にのみ用ゐられてゐる。

小米飯 ㄱ ㄱ ㄱ ㄱ (awa nu ubasi)

粟飯のこと。今では awa ubun といふことは餘り聞かないが、awa nu とはいつてゐる。因にいふ。麥飯を firan といふが、かなり耳遠くなつてゐる。それに野菜などを交せて、雑炊のやうにしたものには、firan me といふが、これは今でも使はれてゐる。

做下飯 ㄱ ㄱ ㄱ ㄱ (sakana yorari)

お敷を拵へるの義か、肴を喰べるの義か、判然しない。今の口語では、sakana は酒の肴のことである。同時代のオモロ(八ノ四)に、「おもしろねがりや、せるむねやがりや、おもしろそない、せるむどさかな」といふのがある。「そない」は和物、「さかな」は肴也、と註してあるから、一首の意は、オモロの詩人は、セル

ムムの詩人は、オモロオモロがそない（この解は後に出る）で、セルムセルム（オモロオモロの同義語で、もと形式化された神の言葉の義）が肴だ、といふことである。サガキサガキ（*sakana*）がこれと同じ意味に使はれてゐることはいふまでもなく、その述語の *yurari* と一致してゐる。今では *yurayun* は、一つの食卓で、もしくは一つ食器から、一緒に喰べる義になつて、さうして喰べるを *yurati* といつてゐる。*yurayun* が寄合寄合義から、會食する義に轉じたことは、女官御双紙に、「女性方へ御振舞被下候時は、大小身によらず、御菓子盆にて、二三人も御寄合被下候」とあるので明である（「筋斗」の項参照）。さうすると、この短文は肴を寄合つて喰べよ、即ち會食せよといふことになる。

師米シメゴシメリシメカシメガシメ（*kumi shiraga ti*）

ガガがガの誤寫だとすれば、米を精げての意となり、今一つ口を口に直すと米を精げよの意となる。

肉ニクシシ（*shishi*）

今では（一）肉と（二）豚肉との二義がある。さうして、第一音節と第二音節との間にある *i* が無聲化して脱落した結果、*sh* が二重子音となつて、*shhi* となつたが、また古風に發音してゐる人もある。琉球館譯語には、失失失失になつてゐる。混効驗集には、「つつのあつたため、牛肉の事」「つかないあつたため、豕肉の事」（飼育の義）などであつて、あつたためが肉の義になつてゐるが、舊王家では、今でもシシシシと言はないで、アツタミアツタミといつてゐる。肉の兒童語はビービーであるが、ビ及びミは、時偶肉を意味することもある。

魚イサイイサ（*iru*）

オモロには「いよ」は卷七の二十九章に、「首里杜城、る、おきなわのいよわ、あちおそい（王）に、みおやせ（獻ぜよ）」とある。音韻字海には、「魚、游」とあり、中山傳信録には、「魚、一由」とある。琉球館譯語には「鮮魚、必撒莫只（*pishanuchi*）」とあるが、これは舊王家内では、今でも *nshamuchi* といつてゐる。混効驗集に、「わかむしやもち、元三の御捧物（各地より國王）いかにこぼしめ（賊鳥）たこ・鮪・章魚とも書。此類也」とあり、又「むしやもち、魚類をいふ。さかななどと云が如し」ともあるから、一般魚類のことを「むしやもち」といつたことが知れる。又「しらつなの御初、なまむしやもち。那覇より上る。」とも見えてゐる。しらつなは一種の漁方で、繩にいろ／＼の物を垂れたものを延へて、魚類を追ひこめて取ることである。那覇の近海で取つて、早速獻じたものだから、これにはなまむしやもちといつた。これが鮮魚に相當する語のやうに思はれる。又「歳暮の御捧、なまむしやもち、かれむしやもち、むはじきやみ、此外に餘多上る。大體記之」とある。かれむしやもちは干した魚の義である。「むしやもち」は良き貢物の義ではないかと思つてゐる。それから、「寄物の御初、へと江豚の事、しゆこ（小魚）の名。知念玉城より上りたりと也」といふことがあるが、よりものは餘多群をなして居るものにいふ。高離島の巫女が六月と八月のシノダ祭（豊年祭）の時に神に告ぐるおたかべに、「あまん世のしゆ、野原米たち出ちて、すぢや百姓の祭りしやべらば、豊年お賜べ召しよわち、ニライ・カナイ（常世の國）から、つゝもんより、もんお助けてお給べ召しよわれ。國も榮え、代も榮え、諸臣下茂へ榮えしめらちお給べ召しよわれ」といふのがある。これらのよりものはいづれもニライ・カナイから寄つて來ると考へられてゐるのである。

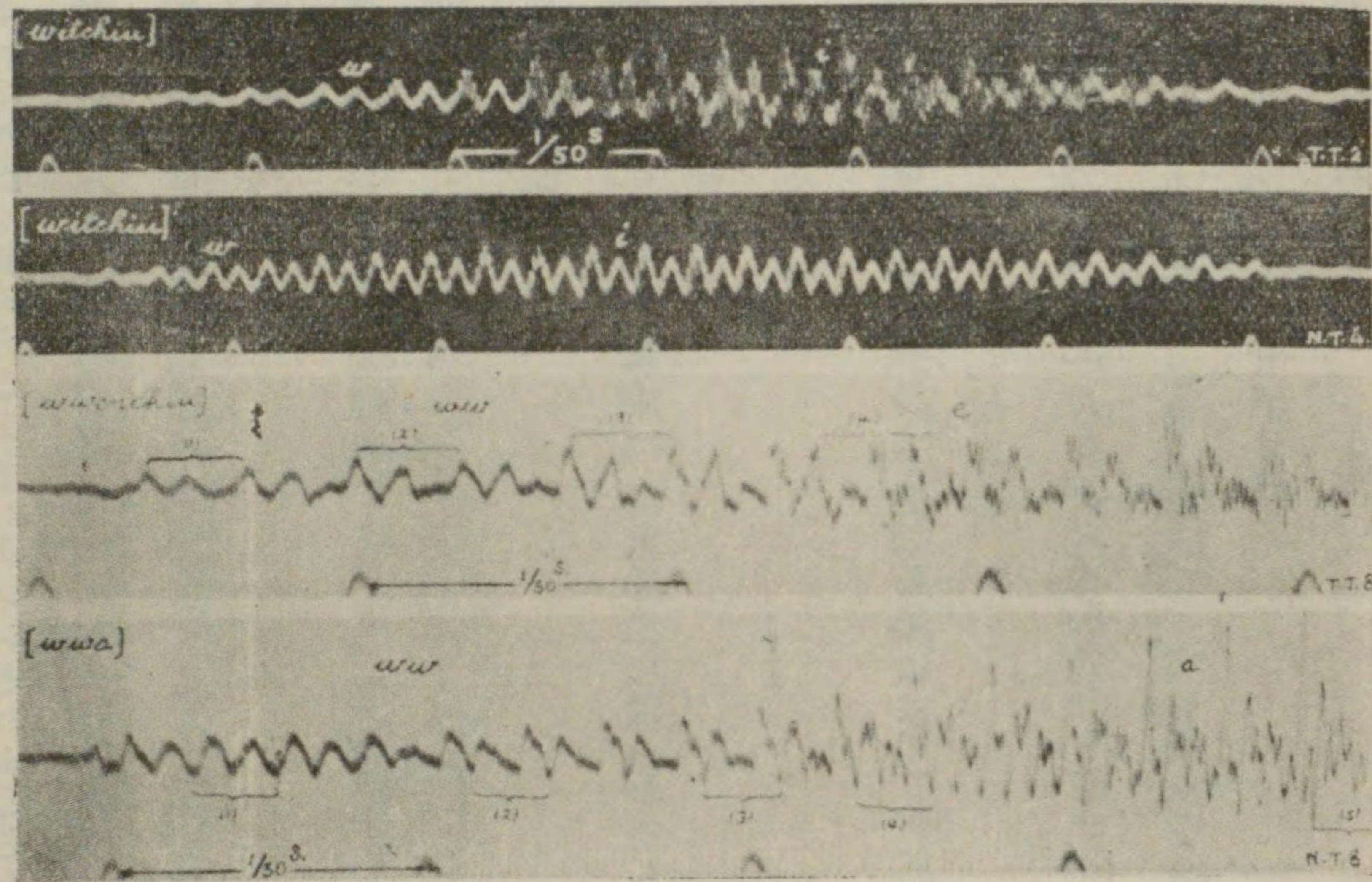
鹿肉 *カウノシ* (*K'ó nu shishi*)

琉球館譯語には、「鹿、加目」とある。カモシ、といふ複合語もあつたに違ひない。今は一般にシカといつて、カウノシ、は耳遠くなつてゐるが、私の子供の時分には、カウノシ、といつて、シカといふ語は普通の人は知らない位であつた。この二語が僅半世紀の間に、全く位置を顛倒して、今の小學校の生徒の中には、カウノシ、の名を知つてゐるのは恐らくゐないだらう。麩かに織る毛のある鹿の義だから、かもし、となり、轉じてカノシ、となつた。この古代國語は、二形とも南島方言中に輸入された。さうしてカウノシ、は鹿と鹿肉とを兩つながら意味した。混効驗集に、鹿を「かうのあつため」といつたことが見えてゐるが、とうに死語となつたらしい。

猪肉 *ウヰシ* (*wa shishi*)

豚肉のこと。今では *shi shi* *shu* だけで、豚肉を意味する。*wa* は喉頭破音グロツクレストップを伴ふ音であるが、沖縄本島内でも南部地方の糸満附近や久米島では、たゞ *wa* と發音してゐる。但、それは喉頭破音の無い地方であることを知らなければならぬ。因にいふ。*wa* といふ音節の語が、もと *oa* *ua* 又は「おは」であつたことだけは確である。*wa* *auri* (御新下)、*wa* *iyun* (追はれる) の如きものである。*nya* *wa* (御)、「うへ」*wa* (上) 等も参照すべきである。八重山では *wa* といつてゐる。豚は明初山東省から輸入されたといふ言傳へがあつて、現に *santun wa* などといつてゐる。この頃私の友人は、山東省の人から、彼の地方でも豚のことを *wa* と稱へてゐる、と聞いて驚いたとのことだが、直接聞いたことでないから、半信半疑である。しかし後

witchu (醉人) の頭音 *w* と *'wa* (豚) 及び *'wENCHU* (鼠) の頭音 *'w* との區別 (小幡博士の實驗による)



海東諸國記載古琉球語の研究

琉球語子音 (*w*) 及び *ww*; *witchu*, *wENCHU* 及び *wWA* の頭部
發音者 { 1.3 : T. T. (男)
 2.4 : N. T. (女)
(*ww* は *w* に喉頭破音の伴ふものを寫す Chamberlain の表記法で、私の表記法の *'w* に當る。)

藤朝太郎氏の語る所によれば、仔の福健音は *wa* で、特に小豚にさういつてゐることだから、*wa* の語源がこれで解けるやうな氣がする。(「琉球人の命名法」参照) 琉球館譯語に、「猪、烏哇」とあるから、永樂頃にも、今日と同じ稱へ方をしてゐたことがわかる。チエンペン氏はこの語を猪ぶ (*mi*) と關係のあるものといつて居られるが、疑はしい。混効驗集に、「つかないあため、豕肉の事」とあるが、このつかないあつためには飼ふあつための義があるから、古くは猪のことをあつためといつたやうな氣がする。「つかないあつため」の同義語に、プタアツタメといふの

がある。それから豚肉のことをハクシンといふこともある。

兔肉우상기시시 (usag'i shishi)

琉球館譯語には、「兎、烏撒及」とある。今は usagi といつてゐる。

油아부라 (abura)

中山傳信録には、「油、阿咄打」とあり、混効驗集には、「あむだ、油の事」と見えてゐる。今は anda に轉訛してゐる。

鹽마시오 (mashio)

中山傳信録には、「鹽、麻蝦」。混効驗集には「おましほ、鹽之事也」とある。今では mashu 或は u-mashu ともいふ。

醬미소 (misho)

中山傳信録には、「醬、彌沙」。混効驗集には、「おむしよ、御味噌の事也」とある。今は nshu といふ。

醋소우 (suu)

今は su と發音する。suu ともいふ。八重山方言では、pahi といふ。混効驗集には「おはいり、酢の事也」とある。「はいり」の語源は多分葉入で、古い製法を語つてゐるやうに思はれる。夜分は su 又は tevi を思ひて、amazaki といふ。甘酒の義。

芥末단다리카다시 (nadani karashi)

辛子、からしなの實を粉にしたもの。今はたまカラシといふ。

胡椒후신 (k'u shu)

琉球館譯語には「姑燒」、中山傳信録には「窟受」。今も kushu といふ。koré-guein といふ。koré は高麗の義。朝鮮傳來のものには、大方この名が冠せられてゐる。koré (人參)・pakoré (人參の一種)・koré-dishiri (陶器の煙管)等の如きものである。

川椒산시어 (sanshō)

山椒か。shenshu といふ。

生薑샤옹가 (shōga)

今は shōga といふ。

葱김바나 (king bira)

混効驗集に「김바나・雍の事也。さりびら共云」とある。今では kimbira は殆ど使はれなから、chiribira が使はれてゐる。

蒜피루 (firu)

にんにくのこと。混効驗集に「おむぎやうと、蒜の事。俗にはへると云」とある。今は firu といつてゐる。これから firu-gusasa (生臭し)といふ複合語が出来た。

菜蔬소나 (sonae)

今は *siné* といふ。あへもの(和物・蓋物)の一種。酢と味噌と豆腐とをすりまぜて野菜を蓋へたもの。普通手であへる。かうするを *siné-éyun* といふ。轉じては赤子が自分の手を握りつ擴げつするにもいふ。國語にぎくくに似た言表してある。「飯下飯」の條でも述べた通り、「おもろどそない」のそないには和物と注がしてあるから、それがあへものであることはいふまでもない。混効驗集には「おしやしもの、おそないと云。俗にしやしもの」と見えてゐる。シャシモノは死語になつてゐる。*siné* に似て水つばいものに *use* といふのがあつたが、之を拵へるにも、*use-éyun* といふ。*use* はお茶の義らしい。「そない」も蔬菜の義から轉じたものかも知れぬ。

燒茶茶外がし (*ch'a wakasi*)

お湯(茶の)わけの義。今は *ch'a wakasi* といふ。首里語の *ch'a* は軽い有氣音である。簡単な御馳走を拵へて、内輪でお祝するじと *ch'awakashé* といふ。かうするを *ch'awakashé shun* といふが、その同義語に、*yá funikashun* といふのがある。*yá* は家の義で、*funikashun* は九州方言のホメカスと同じ語である。身寄りの者が寄集うて、家をはめかすの義で、一種特別の言語情調が伴うて、一寸説明しにくい語である。

甜阿米沙 (*amisa*)

甘さの義。*mi* は *mi* の誤寫である。中山傳信録には、「甜的、阿媽悠」とある。混効驗集には、「あまろ、甘さを云」とある。

苦リがし (*nigashi*)

にがしの義。今は *nigashi* になつてゐる。混効驗集には、「にぎやき、苦きを云」とある。「おもろさうし」の卷十九の五十章に、「にが世あま世なすてた」とあるが、世並の凶しき吉きにかへす君といふことで、こゝでは「にが」が第二義に使はれてゐる。

酸汁サ (*suisa*)

今では、*suisa*。混効驗集には、「すいさ、酸きを云」と見えてゐる。中山傳信録には、「酸的、關爽悠」になつてゐる。

淡叶バサ (*apasha*)

今は *apasha* になつてゐる。鹽氣のうすいこと即ちあまいの義。混効驗集には、「あはさ、淡きをいふ。鹽加減のあまさをいふ」とある。

酸ムバガバサ (*shipukarasa*)

mi は早の誤りに違ひない。後の三音節の母音が、何れも *a* になつてゐるために、これまでもさう聞えたのであらう。中山傳信録には、*シブカカ* *シヤ* (□はいふまでもなく羅である) となつてをり、*バジル・ホール* の『琉球探検記』(一八一八年) の附録クリップフォードの『琉球語彙』中にも、*spookarasa* となつてゐる。首里・那覇の方言では、*P* はとうの音 *F* に遷り、今では *F* も大分 *H* に變つてゐるのに、この語は *shipuyun* (吸ふ) と共に、今尙太古の姿を保存してゐる。鹽はその子音さへ落ちて、*shin* になつてゐるのに、それから出來た *shiputayun* (しほたる) は、それと道づれしなごで、*shipukarasa* のがはに附いてがんばつてゐる。

練カニサ (karasa)

からし。けはけの誤り。發音は今も同様である。中山傳信録「辣的、喀喇煞」。混効驗集には、「からさ、辛きを云」とある。

硯ススリ (sudzuri)

今は sudziri 琉球館譯語「硯、孫思立」。混効驗集「みすゞひ、御硯」、ひはりの誤りか。

墨スミ (sumi)

今は simi 書と學問との義にも轉じてゐる。書家には dji-kachi (字書) 又は simi-kachi といひ、學問を習ふには simi harayun といふ。其他 simishiri (學者)・chashidzin-dzimi (無用の學、消し炭同様の學問の義)・simi-nchu (百姓に對して士族をいふ。文筆にたすきはる人の義) 等の語がある。琉球館譯語には「墨、思墨」とある。音韻字海に「勅書、倭眉脚都司墨」とあるが、この音譯は「おみきよとすみ」で、四百年前の琉球文の辭令に「首里のおみこと」と見え、同時代の琉球文の金石文には、「この碑文」といふことを「このすみ」としてあるから、「おみきよとすみ」も能く聞える。

筆フヂ (fudi)

發音は今も同様。琉球館譯語には「分帖」、中山傳信録には「夫的」。

弓ヨロロ (yumi)

今も同様。琉球館譯語には「由蜜」としてある。混効驗集には「みちやう、弓の事。和詞にはみとらしと云」と見えてゐる。俗に胡弓を小弓と書いて、コウチャウ (kacho) と發音してゐるから、「みちやう」は御弓の轉訛したのかも知れぬ。しかしこの語は所謂内裏言葉で、一般には使はれなかつたらしい。オモロには「七十人のみ持ち」と出てゐる。

箭イヤ (iya)

今も同様だが、yumi nu iya ともいふ。

弓袋イアマシ (yumi nu sui)

ゆみぶくろの義。今は巢の義で、今ではと發音してゐる。刀の鞘 (刀室) のことを tachi nu ai といひ、筆冠を fudi nu ai といつてゐる。(八卷冠を容れる折箱のことを hachimachi nu 1 といふが、この 1 は室の義で、ととはかなり意味が違つてゐる。) 弓袋を yumi nu fukuru とつてゐるが、yumi nu ai とつてゐるたか、はつきり覺えてゐない。

箭袋イヤシ (iya nu sui)

箭のこと。これはたしかイビラといつてゐるたやうに思ふ。「おもろさうし」の卷十九の十三章に、「よなみねの大や(苗代の大親)、竹筒(竹筒)に、造て置ちへ、あんじおそいぎや(君公)島討(島討)ちする、いやころ(矢と)、なわしろの大や、だけ(つばに)ちてゐる(が落)」とあるが、「矢の巢」の同義語に、「竹つば」のあつたことが知れる。このオモロは尙眞王の中央集權(語音翻譯の採録された時代)よりすつと古く、洪武頃(琉球館譯語の出來た頃)のものであることを序にいつて置く。

ヨ弦ヨイヨミヤクヤ (Yumi nu tsūru)

今は Yumi nu tsūru と發音してゐる。

窓窓ヨリ (tori)

琉球館譯語には、慢多 (mado) とし、中山傳信録には馬都 (matu) としてある。しかし今ではさういはない。た、takadu (高戸の義) 又は hayidu (張戸の義) といつてゐる。それから、tori も死語になつてゐるが、南島方言中でそれに類似の語を求めらば、與那國方言の tūri が稍近いやうに思はれる。

門金 (djo)

デョー (djo) は、今でも門の義に用ゐられてゐる(一)。門前の道路の義にも用ゐられるが(二)、耳遠くなつてゐる。私は四五年前鬼界島を訪れた時、同島の方言でデョンクチが門の義に用ゐられ、デョーは門前の道路の義に用ゐられてゐるのを見て、デョーの第一義は道路で、門は寧ろ第二義でないか、との疑問を抱くやうになつた。試みに、宮良當壯氏の「南島語彙稿」について調べたら、石垣・黒島二島の方言でも、やはりさうなつてゐるのを見て、そこには何か意味がなければならぬといふことに気がついた。不圖、子供の時分、門道の道路をフカデョーといつてゐたことを思ひ出して、それに外通りの義のあることを知り、ことによると、沖縄方言のデョーにも、古くは道路の義があつたのではないか、と想像を逞しうして見た。それから、門及び通りを意味する各島の方言を調べることにしたら、大島及び與論島の方言でも、之をデョーグチといつてゐることを知つた。これは言ふまでもなく、道路の口即ち通りへ出る口の義である。宮古及び八重

山諸島の方言では、デョーは沖縄方言と同じく大方門の義になつてゐるが、就中新城のは、デヤウになつて其の古形をほめかしてゐる。但、石垣・黒島二方言のデョーに、門と門前の通りとの二義があるのは、與那國島のドゥー (du) に、門と門前の通りとの二義があるのと共に、多大の注意が拂はなければならぬと考へた。序にいふが、古くは琉球語でも、國語同様に、門のことをかど (kadu) ともいつたらしい。といふのは、「デョー立チ・カドゥ立チ」(何か仔細あつて常住) といふ疊語的言表しに、面影を留めてゐるのみならず、現に徳之島及び鬼界島の二方言にも遺つてゐるからだ。古代に於ては、南島でも、家・屋敷の外構——柵・生垣・石垣——といったやうなものがなく、従つて門などは無かつた筈だから、屋外をフカ・デョー若しくはたゞデョーといひ、戸口をデョーグチ若しくはたゞデョーといつたのが、後世圍ひを造つて、門が出来た時、これらの語が門の義に轉用された、と斷定しても差支ないやうに思ふ。現に徳之島の片田舎で、戸口をデョーといつてゐるのも、一證とすることが出来る。『言海』を引いて見ると、「かど(名)門(外戸の上略カ)(一)家敷ノ外構ニ、柱屏アリテ、路ニ出入スベク設ケタル處。門。(二)門ノ外。——ニ出ヅ、——田」門前。云々」とあつて、「かど」にも、デョー同様に、二義のあることがわかるが、其の語源説は、今を以て古を推測したもので、當を得てゐない。兎に角、デョーの原義は固有名詞中に澤山遺つてゐる。一時代前まで首里市の入口には、中山門といふ大門があり、王城の正門近くには、今でも守禮門といふ、前者と同じ恰好の大門が立つてゐるが、兩門の間の大道を綾門といひ、稀に綾門大道ともいふが、これはデョーの原義が忘れられた頃に、綾門といふ漢字が宛てられたもので、もとは美しい道の義であつた。この大通り

には石が舗いてあつて、上の方を上石門ウヘイシカドといひ、下の方を下石門シモイシカドといつてゐるのも、上石道・下石道の義であることはいふまでもない。那覇市の中央に、明の洪水間に歸化した閩人の後裔の部落があつて、其の眞中に一筋の大道があるが、之には久米村大門クニメノカドといつてゐる。昔南の入口に大門ウツチカドといふ門があり、北の入口に西武門シブカドといふ門があるところから、その名を得たといつてゐるが、これも、大道の原義が忘れられて、大門の漢字が宛てられた後に起つた一種の民間語源説に過ぎない。今歸仁村の今泊の村落の中央の大道をウツチャウといつてゐるのも、大道から來た名であらう。其他、古波藏コハシラチヨ一・座波ザハチャウなどと馬場の名には、大方チヨウがついてゐるが、これにももとの大道の義があつたに違ひない。私の子供の時分には、那覇市の西海岸へ下りる通りをウミチヨ一といつてゐたが、これなどもと海への道の義であつたらう。この説をもつと確實にする爲には、下痢を意味する各島方言の造語法を一瞥する必要がある。沖縄本島内のあらゆる方言では、下痢をフカダチ(或はフカダチ)といふが、これはフカ(外)とタチ(立ち)から往復の義に轉じたものとの複合語である。其の動詞はフカダチ・シユンであるが、後にフカ・タチ(外)といふ形も出來た。この語は八重山方言にもあるが、其處にはその同義語に、*satu-hiri* といふのがある。これは外に坐ることの義である。(沖縄方言でも厠に行くことを *yiyun* とこつてゐるが、「坐る」の義から轉じたものである)宮古島及び徳之島の方言では、之をヤマダチといつてゐるが、前にも述べた通り、ヤマは藪の義であるから、其の意味が能くわかる。鬼界島の方言では、之をチヨ一アッチャ一といつてゐるが、いふまでもなく、門前の道路と家とを頻繁に往復することの義である。南島では厠が家の中に出來たのは、近代になつてからで、今尙屋

敷内に特別に建てた所が多い。昔はそれさへもなく、外にいつて用を便じたのであらう。これは右に述べた四方言の造語法を一瞥しただけで能くわかる。以上述べたことによつて、「門」を意味するチヨ一が、「門前の通り」の義から轉じたことは、いよく明白になつて來る。太古に於ては、それに家の外即ち原野の義があつたに違ひない。四百五十年のオモロには、「門」を「ぢやうぐち」といつてゐるが、それから五十年後のオモロには、「あまへのぢやうはげらへて」と見えてゐる。これは「歡びの門を造つて」の義で、首里城の歡會門を造つた時のオモロである。琉球館譯語には之を「勒那」とし、音韻字海は之を「郁」としてあるが、解せない。中山傳信録の「濁」はチヨ一である。私は今迄チヨ一を南島特有の語とばかり思つてゐたが、この頃この語が内地の方言中にも、複合語となつて遺つてゐることに氣がついた。今では「かどぐち」が多く「門」(中にはクマリトの義に縮用された所もある)の義に用ゐられてゐるが、青森・岩手・山形・秋田・新潟・佐渡・富山・千葉・茨城・東京郊外(玉川邊)・神奈川・静岡・愛知・山梨・三重・鳥取・熊本等の方言では、その代りにチヨ一グチが多く用ゐられてゐる。特にこれが東北方言に多く現れ、南漸するに従つて、段々カドグチに壓倒され、九州に入つて一旦とぎれようとして、南島に渡つて、最も盛んに行はれてゐるのは、不思議なことと言はなければならぬ。人或は東北と南島とは、餘りにかけ離れてゐるから、偶然の一致に過ぎないといふかも知れないが、この外にも共通の語がかなり見出されるから、これは兩方言が原始國語から分岐した時、「かど」と共に持つて來たものであることは、疑ふ餘地がない。徳川幕府及び大名の間取に、表と奥との界に御錠口といふのがあつたが、これなども原義が忘れられた結果、この漢字が宛てられて、新しい意味を生じ

たのであるまいか。(「フカダチ考」参照)

掛帳カサ (k'acha)

カはカの誤寫に違ひない。帷帳かたのことは、今でもさういつてゐる。その敬語は *nchaecha* であるが、混効験集には、これが「むぎやちや、御蚊帳」と見えてゐる。「み・きやちや」の轉で、*nkyacha* と發音したであらう。「ちもろさうし」卷二十の三十七章には、「ちこ(幕)ひきやり、かちやさびて」とある。中山傳信録「帳子、喀着」。

帳子 (maku)

幕のこと。今は *maku* といつてゐる。オモロには「まじ」。

席子 모시루 (moshiru)

むしろ。今も同じ。

靴 피자가 (fisaga)

fisaga (足皮)か。*fisha* は足、*ka* は皮又は獸皮の義。今はフヤといつてゐる。中山傳信録に「靴、呵牙」とある。(日本館譯語にも「鞋、不牙」とある)。琉球館譯語には、これが「姑足」になつてゐる。

紙 카미 (k'ami)

今ではカビに轉訛してゐる。その敬語は *nehabi* で、混効験集には「お・きやび、紙」となつてゐる。しかし普通 *nehabi* といへば、祖先の祭や佛時などに、紙錢を焚くことである。琉球館譯語には、紙は「嗑かセ」で

あるが、音韻字海には「堪把」とあるから、萬曆頃には音韻變化の起つてゐたことがわかる。中山傳信録にも「瞎皮」になつてゐる。カビは複合語の場合には、籃紙・藍紙傘・鼻紙・鼻紙袋といふ形になつてゐるが、これらが最初薩摩から輸入されたことを語るものであらう。

匙 匙 (k'e 或は k'o)

匕・杓子。今では散蓮華にのみいつてゐる。飯をすくふ杓子には、*ajié* (飯匙)又は *mishigé* (飯匙)といひ、汁をすくふものには、*nabigé* (鍋匙)といふ。混効験集に「むぎやまがい、鍋匙」とあるのは、飯匙の内裏言葉で、*nehanaagé* と發音する。同集には「むぎやま、鍋之事」とある。「む」は御である。

筋 피시 (fashi)

箸のこと。匹は匹の誤寫である。文求堂本には匹になつてゐる。(「南島方言資料」附録語音翻譯の終りに、内閣本と文求堂本との校異表が出てゐるが、十中九は前者が正しく、たゞこの一字だけは後者が正しいといふことを、序にいつて置く。)今では *fashi* 又 *fashi* になつてゐるが、*f* は *h* に變りつゝある。*umi* を冠して敬語にすると、*u-moshi* となる。これを *moshi* と發音する人もある。筋は琉球館譯語には「扒只」、音韻字海には「麥匙」、中山傳信録には「賣生」となつてゐる。後の二者は *moshi* を寫したに違ひない。混効験集に「みよまへしむちへ、金の御箸、極上の美稱也」とある。みよまへはみよまへ(み・御前)、國王につける敬稱で、この「しむちへ」は箸の義である。又「みよむしつきのむはし、正式御盆おぼん加那志かなし御上り被召御箸より別に、右之御箸引御菓子盆にのせ、御飾まで御側に被居置なり」と見えてゐる。みむしつきは、おめし

つき(男の隨行)に對する女の隨行のことである。又「みつむはし、すき箸也。上の箸ははしの口に筆の寸のやうにして、巢の附たると也。むかし御内原(解釋前に出づ)にて、女姓方へ御振廻(夕餐又は晚餐)被申候時は、大小身によらず、御菓子盆にて、一三人も御寄合(「做下飯」の項ヨロシの解釋を見よ)被下候。此時は右之御はしにて候由也」とも見えてゐる。この箸は薄で作つたもので、島尻の祝女から神前の供物を捧げた時に、あつたやうに覺えてゐる、と南嶋八重垣の著者はいつてゐる。

篩平目 (furi)

ふるひ。今はさうはいはないで、sho(水囊)といつてゐる。その同義語に tiburū(手篩ひ)もあるが、那覇の方言では、轉訛して tindi になつてゐる。奄美大島諸島の方言には、「ふるひ」が furi 又は fuyi の形となつて遺つてゐる。

椀子まがり (makari)

混効驗集に「おまかり、茶碗の類を云。和詞にもまかり」とある。又「わんぼうまかり、大まかりの事」とも見えてゐるが、今はたゞワンプーといつてゐる。「おもしろさうし」の十七の卷の百二十五章に、「きこるみやきぜん(地名)、もまかり積上げて」と見えてゐる。琉球館譯語には「碗、麻加立」、音韻字海には「碗、麥佳里」とある。この語は makari に轉訛して、今尙使はれてゐる。中山傳信録には「飯碗、麥介衣」とある。鬼界方言には mairi 又は mayi といふ形で遺つてゐる。同方言では語間の *ma* は子音が脱落するから、それがマカリと同一のものであることはいふまでもない。同島には又まるといふのもある。この語は南島の

どの方言でも、毎日使用されてゐる語であるが、國語ではとうの昔消滅して、古典中にしか遺つてゐない。

(琉球語彙 nakari の項参照)

砂貼是すり (suiri)

皿。今では sari といふ。混効驗集には「おそろい、御茶皿の事。それいともいふ。」と見えてゐる。八重山の方言では、surai といふ。

木貼是すち (fachi)

鉢。今では haehi と發音す。多く木製のものに云ふ。ひろぶたには haehinuku といふ。

櫛子カト (kai)

支那製の長持。琉球語譯語には、「箱子、凱」とある。中山傳信録には「科阿里阿哥」となつてゐるが、これは kuyibaku (入庫理箱) 即ち *kyū* のことである。八重山の方言では、yafugai 又は yafungai といふ。其の民謡首里子節に、「我櫃ばはねあけ、やふが、いばさしあけ、胡蝶形取出し」とある。胡蝶形・蜻蛉形は紅型と稱する女の晴着のことである。カイは大島の方言でも yafungé といつてゐる。

刀子カト (katana)

大刀。今でもさういつてゐるが、fachi といふのが普通である。琉球館譯語には倭刀を「達只」と音譯し、音韻字海には之を「嗑塔拿」と音譯してある。「おもしろさうし」中には、「かたな(一ノ五)」、「大かたな」(しかたな(十四ノ五))、「つるぎ」(十三ノ二)、「なだかつるぎ」(おしあけつるぎ(二ノ十四))、「たまか」(十

ノ十五)、「おさはつるぎ脇差」(十五ノ五)、「かねわかご」(かねみさき) (十一ノ七二)等の名が見えてゐる。又「つくしちやら」(十八ノ十九)といふことも見えてゐる。これには寶劍千金丸(宮古の酋長が尙眞王に奉つた劍)と注がしてある。之を奉つたいきさつは、殉死を禁じた時の國王頌徳碑中に見えてゐる。「つくしちやら」には筑紫の王の義があるから、もと筑紫から渡來した倭刀の名であつたかも知れぬ。序にいふが、筑紫から來た玉に、「つくしたま」といふのがあつて、オモロに「つくしたまみ玉島統ねるみ玉」と謳はれてゐる。混効驗集に「めしよわへ・おみこし、御腰物。是は二通有之、一通はおちよはへ(御出座)且又節供々々御召、一通は番の日番中下庫理出御之御時被召也」と見えてゐる。(番の日・番中は國王出御の日の名であるが、之を説明する長くなるから、混効驗集の研究及び琉球語大辭典に譲る)國王の出御は一日置きであつたが、朝叱ツ〜といふ警蹕の聲で、王が下庫理に出座される時に、お側の者が短劍を捧げて従ひ、それを御前の机の上のせて置く。暫らくして王は退座せられ、御劍はそのまゝで、その置かれてある間は各員退廳してはならないことになつてゐた。この劍を俗に「おこしおやもの」といつてゐた。「おもしろさうし」の二十の卷の「よそいのみこし」(國を統治するみ腰の義)が即ちそれである。これは御腰物といつたが「おむきよし」に轉じ、更にウンチュシに轉じた。

鍋兒ナバ (nabri)

なべ。今は naboi といふ。中山傳信録にも「那脾」となつてゐる。

幕과오기 (foki)

今は fochi だ、hochi に變りつゝある。中山傳信録には、「掃帚、火氣(huochi)」とある。

火盆판지 (ffachi)

火鉢。今は ffachi 又は ffuyi (そんないな語では、ffuyá) といふが、どちらかといへば、これは香爐のやうな小さいものにごふ。これには又 uehiriyui ともいふ。混効驗集に「おされとり、火取の事」とある。同集に「おされて、火のながるゝ事」とあるが、今も木炭火の灰になるを uhiritan といふ。uehiriton とはなご。しかう uehiritation とはごふ。ukiri (uehiri) は、國語のお(煥)と同語で、ukiriyun (uehiriyun) の名詞形である。南伊豆の方言でもオキリとなつてゐる。内裏言葉では、火を umatsi といふ。混効驗集に「おまつ、火の事。火をけすをおまつさますと云ふ」とある。さます(サマシユン)は普通チャーシユン(消す)といふ。奄美大島では、火のことを umatsu といふ。同方言では、女陰がはだからこれをさけてさういふやうになつたのである。u が接頭語の「御」であることは、十二月末の火の祭をば matsi nu yiwé とごふので知れる。

衣服기루 (kinu)

琉球館譯語にも、「及那」(kino) になつてゐる。宮古八重山方言では kinu であるが、沖縄方言では chin になつてゐる。混効驗集には「しろばしやぎぬ。白朝衣の事」とある。「ばしやぎぬ」は芭蕉衣の義で、bashudin (葬式の時に着けるものには shiruchó といひ、祝儀の時に着けるものには kuruchó といふ) と bashudin (常の夏服) とに分化した。又「ちやうぎぬ、朝衣也。三司官以下束帯の時用之」といふこともあ

る。chin (V kinu) の敬語は nshu である。同集に、「たうむしよ、唐御衣」「おやむしよ、御衣」とある。オモロには「みしよ」とも「みそ」とも使つてある。(八重山の方言では麻のことをソといふ)「おもしろさうし」の十三の九十八章に、「るがきみはね」といふ語が見えてゐるが、それは神羽のこと、混効驗集には「綾ぎぬの事、衣の事はあけ(赤)のはねあけむかけ(オモロ十三ノ一〇八)と申事候へば、綾ぎぬの事なるべし」と解してある。絹地に胡蝶や蜻蛉を繪いたもので、オモロでは「はべるみそ」「あけづみそ」といふ同義語も使つてある。

袴兒カガマ (hakama)

今は hakama になつてゐる。猿股の寛くて少々長いもので、もと麻や芭蕉布で製したもの。日本風の袴には特に immanuyi-hakama (馬乗袴) といつてゐる。中山傳信録には「裨子、哈加馬」とある。琉球が初めて明に通じた時、其の船員が袴の代りにふんどしをしめてゐるのを見て、明人が莫袴 (mok'u) とつたのを、「無い」の義に解して、爾來琉球では、何でも「無い」ことには之を冠して、鬚の無いのを fujimóká (下略) fujimó) といひ、手の無いのを timóká (轉じて timóká 又は timukka) といふやうになり、いつしか mókú hayun (身體についでゐたものの無くなる) といふ動詞も出來た、と言傳へられてゐる。

裙兒カマモ (k'akamo)

第二音節の母はガの誤りのやうに思はれる。中山傳信録にも「裙、喀甲眉」と見えてゐる。kakamo/kakamou/kakam/kakan と變遷して、今日に至つた。婦人のつける裳で、朝鮮婦人のそれに似通つてゐる。そ

の敬語は nehushi (V nikiyoshi) で、御腰の義である。明の陳侃はその使録に、婦人の服装について「上衣之外。更用幅如帷蒙之背上。見人則以手下之而蔽其面。下裳如裙而倍其幅。裙細而制長。覆其足也」と記してゐる。上衣は即ち「どぎぬ」で、下裳は kakan である。裙には細裳がついてゐる。童話に、「彼方からめんせる美ら嬢小、どぎんの緒にも總つけて、かんの緒にも總つけて、打ちはういはうい歩ちめしやいさ」といふのがある。この風習は今尙八重山に遺つてゐる。

瓦カラ (k'ara)

今も同様。ni-g'ara (めがはら)・wá-g'ara (をがはら) といふ複合語も遺つてゐる。

車子カラマ (kuruma)

今も同様。

卓子ラキマ (takidze)

竹で造つた卓。dakidai と發音したであらう。琉球館譯語には「卓、代」。今はとといつてゐる。

炭火 (sūmi)

今は消し炭のことを simi といひ、炭には tan といふやうになつてゐる。

柱ノヤ (fāya)

今はに hāya になつてゐる。宮古方言 para、國頭方言 paya、鬼界・永良部方言 faya、大島方言 hara V harya。

身子トウア (du)

今でも同様。これは琉球館譯語には「度」になつてゐる。身體の義。轉じては自身の義ともなる。nna-dā (空身、即ちからて)・(kara-dā 上の同義語)・dāyafarā (弱體)・dā-kuru (自分で、人手を藉らずに)・dā-misigara (からだだけで、身を以て)・dā-muyi (稚子が母の手を離れて獨りでいちらしく遊んでゐる事。自分で自分を守ることの義)等の複合語がある。チェンバレン氏は第二人称の代名詞の敬語 undju は unatchu (其人) から來たといはれたが、それは思に「思」即ち「愛」を意味する umi を冠したもので、(umidu) V undju と變遷したものである。この場合、du が dju に變じたのは、chiduri (オセロ)には千鳥は「ちどり」となつてゐる)が chidjuyi に變じたのと同じ音現象である。undju に今一つ mi (御)を冠すると、myundju となつて、最上の敬語になる。近代になつて、これは nundju に變化した。dā kuru (自分で)の敬語は undju kuru で、その最上の敬語は、myundju kuru である。歌などに「おんぢよしぢおんぢよ云々」とある場合には、初めのおんぢよ「御身分」の義で、後の「お身體を」の義である。

[tsūra] (tsūra)

今は tsira になつてゐる。その敬語は unchi で、最上の敬語は myunchi である。混効驗集に、「みおむぢ、御顔の事」とあるみおむぢは myunchi の古形である。tsira nu akaku nati (面が赤くなつての義(一)で、轉じては酒がまはつて(二)の義ともなる。)第二義の敬語は unchi agati (agati は上つての義)である。其他、unchi-wugan (御機嫌伺ひ)・unchi-taka (傘の敬語で、unchi-kataka の轉。kataka は蔭の義)等の複合語がある。混効驗集には「おむきやたか、御傘」とある。

眼目 (mni)

今は ni。その敬語は ni-mi。琉球館譯語「せ」(mieh)。

鼻斗叶 (fana)

琉球館譯語には、「花那」(hua na)になつてゐる。今では hana になつてゐるが、稀に fana と發音してゐる人もある。その敬語は npana。國頭・宮古・八重の方言では、勿論 pana である。

口モシ (k'iehi)

今では kuehi。琉球館譯語では「姑之」。その敬語は ni-kuehi。kuehi は言葉の義にも轉じてゐる。yamatu-guehi (日本語)・tō nu kuehi (支那語)・uchina-guehi (沖繩語)の如きものである。kuehi nu itehōn (口が這入つてゐるの義)といへば、呪はれてゐるの意になる。そして ichi-guehi (生口)は呪ひの義である。

耳 (mi)

琉球館譯語にも「眉」と音譯してあるが、昔はさういつてゐたのか、判然しない。今では mimi といつてゐるが、八重山及大島の方言では、min になつてゐる。これから mimi nu lkwa (耳の子即ち鼓膜の義)・mimi nu fa (耳の端)・mimi nu tayi (耳朶)・mindjayi (耳漏)・minkū (聾)等の複合語が出來てゐる。

頭ガナ (karadzu)

多分 karadzu と發音したらう。今では karadzi である。琉球館譯語にも(嗑籃子)(kalantzū)と音譯してある。今では頭には tsiburū (つむり)といつて、殆ど karadzi とはいはないやうになつてゐるが、「頭が痛

「*い*」を *Karabzi nu yanun* といふ時の *Karadzi* は、頭の義である。南島八重垣「*からす*」は頭の義なれども、多くは毛髪の事にいふ詞なり」と見えてゐる。その敬語の *unehobi* (〈*umi-kyōbi* 〈*umi-kōbe*)) にも、やはり「義」がある。

手_レ (t₁)

今でも同様。その敬語は *nchi* (〈*mi-chi* 〈*mi-te*))。琉球館譯語「帖」(t₁h)、音韻字海「剃」(t₁)、中山傳信錄「蹄」(t₁)。

足_レ (t₁sha)

今も同様。その上品な語は *ashi*。そんないな語は *shu*。日本館譯語「*亞失*」(ashi)、音韻字海「*匹香*」(pi-shah)、中山傳信錄「*燦*」(shao)。鬼界島の方言では、*shu* 又は *sha*、沖縄の方言でも、*sha* といつてゐるところがある。

舌頭_レ (shicha)

中山傳信錄にも「*失着*」(shicha)。この語は今では *shicha* と *shita* との両者が行はれてゐる。

手指_レ (nibi)

今は *nibi* となつてゐる。與那國方言では *nyubi*。永良部・與論方言では、*nibi*、鬼界方言では *yubi* だから、國語同様に「*および*」といつた時代もあつて、それが *nyubi* 〈*nyubi*〉 〈*nibi*〉 等と變遷したことがわかる。中山傳信錄には「*威彼*」(weipi) とある。

頭髮_レ (kashira)

琉球館譯語には「*加籃*」(子脱?)、音韻字海には「*嗑十藍其*」(kashiangki 即ち *kashiragi*)、中山傳信錄には「*哈那子又喀拉齊*」とある。二百年前に出来た戯曲にも、「*かしら洗ひなづけ云々*」「*かしらげのあすが人間*の髪ならぬ」とある。今では *karadi* といつて、*kashira* とはいはないが、*ちんまげ* を意味する *katakashira* (片頭) といふ複合語に遺つてゐる。(片頭すなはち丁髷の位置が頭の右方に片寄つてゐるところから来たことは、陳侃使錄に、「*結髷於首之右*」とあるので知れる)

牙齒_レ (ta)

音韻字海には *pa*。中山傳信錄には「*夸*」(hua 或は *wa*) とある。今では *ta* になつてゐる。

國頭・宮古・八重山の方言では、いまだに *pa* である。

花_レ (fana)

琉球館譯語「*法那*」(fana)、音韻字海「*法拿*」(fana)、中山傳信錄「*豁那*」(huana)。今では *hana* になつてゐる。

國頭・宮古・八重山の方言では、いまだに *pana* である。

綠_レ (aosa 或は *osa*)

こゝで *ao* が *綠* をいつてゐることは、青を他の語で音譯してあるのであきらかであるが、混効驗集には、「*あをばせうむしよ*、*青芭蕉御衣也*」「*あをしよみそ*、*青色の衣也*」とあつて、*あ* をは青のことをいつてゐる。後者と同時代の例の傳信錄にも、青を「*啞悠*」と音譯してある。この語の概念は今でも判然せず、或時は *綠* を

あらはし、或時は青をあらはして、兩者の總稱であるやうに思はれるふしがある。又青をオールーといふに對して、綠を木の葉色といふ場合もある。みどりといふ語は、國語ではもと芽と其の色とを兩ながら意味してゐたと思はれるが、琉球語では、芽を意味するのみで、其の色にはいはない。

黒子^{ウサ} (kurusa)

これは今も同様である。

青^{ウサ} (fanching)

この音譯は淡綠色を意味する支那語の淡青を借用したもので、*fanching* と發音したに違ひない。當時も一般の人は、色彩に關する語をはつきり區別しなかつたが、畫家などが必要上この語を青にあてて、オーサとし、漸く有識者階級で使用されてゐたのであらう。この語は今使はれてゐない。

牛^{ウシ} (ushi)

琉球館譯語「烏失」音韻字海「吾失」、傳信錄「兀失」。これは今もかはらない。普通牡牛には *uushi* といひ、牝牛には *muushi* といふ。特牛には *kuti* (又は *kutushi*) といふが、之に對して雌を *unami* といふ。與那國では、特牛を *kutto* といふに對して、牝牛を *nama* といふ。

馬^{ウマ} (uma)

琉球館譯語「烏馬」、音韻字海「吾馬」、傳信錄「嘸馬」。今は *uma* といふ。嘉靖元年に建てられた眞珠湊の碑文には之を「むま」と書いてある。オモロには「うま」の同義語に、「みちや」といふのがある。

猪^{ウヰ} (uwa 或は、waka)

今は *wa* と *uwa*。

鶏^{トリ} (turi)

中山傳信錄には「雞、推 (*tu*)」とある。今は *turi* といつてゐる。混効驗集に「みやとり、雞のこと」「みやかい、雞の事。庭鳥共云。庭飼と書」と見えてゐる。*hiwaturu* ともいふ。鶏の一種にカラハートリといふのがあるが、交刺巴鶏の義である。室町時代に南蠻貿易の盛んであつた頃は、交刺巴即ち瓜哇に往く事を「カラハ旅」といつて、利益の多い旅の義に用ゐられ、轉じては長い旅の意にも使はれたが、カラハは音の錯置でカハラに轉じ、オモロでは「かわら」と書くやうになつてゐた。南蠻貿易が衰へるにつれて、カラハートの原義も漸く忘れられ、いつしかそのカラが唐の義に解せられるに及んで、支那渡來のものに對して、在來種を島ハートリ又は單にハートリといふやうになつた。又矮雞のことを *chama* といふが、那覇の方言では、*chama* といつてゐる。

狗^{イヌ} (ino)

多分 *inu* と發音したであらう。琉球館譯語では「亦奴」、傳信錄では「因」。今では *inu* といつてゐる。オモロには「いぬこ」(犬子)といふ人名となつてあらはれ、嘉靖二十二年に建てられた金石文にも「いぬたる」(犬太郎)といふ人名となつてあらはれてゐる。

羊^{ヒツジ} (pitsudja)

えとの未は、*fisidji* といひ、山羊には *tuja* といふ。山羊を傳信録には「皮着」としてあるが、四百五十年前のオモロにも「ひぢや」と見えてゐる。音韻字海には、「匹牝啞」(*pipidja*)とあつて、西表島の方言でも *pipidja* といつてゐる。混効験集にも「ひんじや、羊の事」と見えてゐる。それから琉球館譯語には羊は「非都只」(*feituchi*)となつてゐる。この譯語の音韻は、語音翻譯のよりは、大多數古い形になつてゐるのに、これだけが新しくなつてゐるのは、どうしたわけだらう。

老鼠 *uyapichu* (uyapichu)

今では *wenchu* になつてゐるが、方言では *uyanchu* になつてゐる所もある。ことによると當時は、*mo* の音はまた現れなかつたかも知れない。*uya* は親若しくは大の義であるが、*we* に轉訛して、敬語の接頭語「御」の同義語として用ゐられてゐる。下の *pichu* は擬聲語に違ひない。鼠の兒童語は天井ビービーである。*uyapichu* が *wenchu* に轉訛したのは、*やまぢぢぢ* (*yamato pichu* 日本人) が *yamatuchu* に轉訛したのと同じことである。琉球館譯語にはこれは「聾」(*nieh*)と音譯してある。因にいふ。沖縄島の北部山原地方には、鼯鼠の大き位のアヂといふ鼠があるが、廿日鼠にアーヂ・グー (小さきアヂの義) といつてゐるところから考へると、古くはアヂが *uyapichu* の同義語として用ゐられたであらう。

蛇斗 *famu* (famu)

今は *habu* とつてゐる。古くは *fibu* とつた。 *Mikkwa nu fibun udairan* (めくら蛇におぢぢ) といふ俚諺中に遺つてゐる。又 *garasi-fiba* (烏蛇) といふ複合語となつて遺つてゐる。琉球館譯語には「蜜蜜」(*mi mi*)、音韻字解と傳信録には「密密」(*mi mi*)とあるが、これは今遺つてゐない。それから、夜分は *habu* とつてゐる語を思ひ、*nagamun* (長じもの義) とつた。

龍 *tastu* (tastu)

琉球館譯語・音韻字海・傳信録には「達都」。今は *tu* とつてゐる。*tyu* の轉訛した形である。

象 *dzao* (dzao)

琉球館譯語には「槽」(*tsao* 即 *dzao*)、音韻字海と傳信録には「哨」。

獅 *shishi* (shishi)

琉球館譯語・音韻字海には「失失」(*shishi*)、傳信録には「施失」。今は *shishi*。

虎 *tora* (tora)

琉球館譯語・音韻字海「它喇」(*tola*)、傳信録「土拉」(*tula*)。今は *tura* と發音してゐる。

弘治十四年四月二十二日

啓下承文院

琉球語彙

Kuchubi〔コクビ〕疣。鬼界島の方言では kumbi 又は kubbī になつてゐる。琉球語の音韻變化の法則に従へば、オ列の ko は ku となり、ウ列の ku は chu となり、mi は時偶 bi となるから、この語は古事記の國つ罪の中の胡久美と同語根のものに違ひない。和名抄疾病部瘰癧中に、瘰癧は寄肉也阿末之之胡久美とあり、琉球語でもグーフ(瘤)やクチュビ(疣)を shishi-nu-anayi(剩肉)といふことがあるから、胡久美にはもと贅肉の義があつたであらう。コクはコブ又はグーフと關係があるやうに思はれるが、琉球語でビに肉の義のあることは、シンの同義語アッタミ(單にミーといふ場合もある)といふのがあり、小兒語で肉をビービーといつてゐるので明である。これは朝鮮語で lok にこぶ(贅)いば(疣)の義があり、ミーに肉の義があるのと比較して考ふべきものであらう。クチュビのビはまたイチユビ(莓)タービ(胡頹子)のビ、イチユビヤー(木母)のビヤーと同じく、實の義に解することも出来る。これに就いては白石も既に『東雅』の中に葡萄を赤實と解し、葡萄を赤實と解してゐる。それから、疣を意味する八重山方言は futsibē で kuchubi に似通つてゐるが、鳩間島の方言では putsumē になつてゐるから、これは直接胡久美から轉訛したのではなく、その同義語布須部から轉訛したものゝやうに思はれる。胡久美と布須倍とは語根を異にするものゝやうに考へられてゐるが、二者から銘々の音韻法則に従つてそれゝゝ轉訛した二語が、殆ど同じ形になつてゐるのを見ると、胡久美と布須

倍とはもと同語根のもので、古い時代にどちらから分化したものに違ひない。それは殆ど同じ概念を表す語に、「衝む」「含む」等が存在してゐるのを見てもわかる。因にいふが、語源を取扱ふ人に取つては、その音韻法則を心得て置くことが基礎的知識の一でなければならぬから、「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」を参照していただきたいら好都合である。

Kameyūn〔カマヘル〕探す・拾ふ・求める等の義を有する語で、其の同義語には、tunēyūn (トメル)といふのがあつたが、後者は國語「とめこかし」のトメルと同語である。娶る或は妻帯するには、tuji kameyūn又は tuji tunēyūn とつて、南島の島々では殆ど同一の言表し方をしてゐる。序でに言ふが、池間島の舟漕歌の中に、「や里から、妻覓ぎ」といふのがあつた。この覓ぎには、國語同様求めの義があり、又交接する義もある。この語も古くは前の二語の同義語として、南島全體で使はれてゐたに違ひない。私は先達而東恩納寛惇氏から、『提中納言物語』のこの語の條に kameyūn に似た語があることを教へられて、早速明治書院發行の久松潜一氏校註本を播いて見たら、

物隔てのけはひいと氣高う、凡人とは覺え侍らざりしに、ゆかしうて、物はかなき障子の紙のあなを、かまへ出で、覗き侍りしかば、簾に几帳そへて、清げなる法師ばかり、すべていみじくをかしげなりし人、几帳のつらに添ひ臥してこの居たる法師近く喚びて物言ふ。

といふくだりがあつた。そして頭注に、「障子のあなをかまへ出で、は障子に穴をあけてのぞいたのであらう。あなたへとある本もあるが、穴をかまへての方がよく文意が通る」とあるのを見て、面白いと思つた。試みに

日本文學大系博文館本その他二三の活字本について調べたら、なるほど「穴をかまへ」が何れも「あなたへ」と訂正してある。私は最古のテキストにどうなつてゐるかは、毛頭知らないで、何れどなたかにおきゝしたと思つてゐるが、常識的に前後の關係から考へると、久松氏が據られたテキストにある方が無理がないやうな氣がする。たゞ一つ、久松氏に伺ひ度いのは、「かまへる」に「あける」の義があるかといふことである。數種の辭典を引いても、見出せなかつたが、何か古典にでも出てゐるのだらうか。暫らく琉球語といふ生きた辭書を使用することが許されるならば、「かまへ出で、」は現代琉球語の kanē 'ijachi に相當するやうだから、「探し出で、」の義に解したい。所謂「あかり障子」(琉球語ではアカイ)なら穴をあけるのも造作ないが、當時の障子といふのは多くは「衾障子」の事だから、それに穴をあけてのぞいたと解するのはどうであらうか。この場合には、あいてゐる穴を見つけ出して、其處からのぞいたと解する方が穩當のやうに思はれる。思ふに平安朝期にはカマヘルはトメルの同義語として用ゐられてゐたが、前者が死語となつて解し難くなつた結果、次の時代には「穴をかまへ」が「あなたへ」にすげかへられるといふことなども出て來たのではあるまいか。このカマヘルが kameyūn の形で今尙南島方言に生きてゐるから、之を以て古典中の疑義をたゞすのも亦一つの方法だと私は考へてゐる。

Ubi (オボヒ) 御水の義。u は接頭語で、bi が語根である。O-boi-tu-bui-tu-bi と轉訛した語で、更に mi (御)といふ接頭語をつけて、mi-ubi とすることもある。『混効驗集』に、「みおべ井、水の事也。あまものとも云

と見えてゐるが、あまもの (amamun) は甘物の義で、航海中にのみ用ゐられる語である。Dhi は池や川や井戸などにたゞある水をいふので無く、古くは汲んで飲む水の義に用ゐられたらしいが、今では神事に關係した時で無ければ用ゐられない。「聞得大君御殿並御城御規式次第」といふ記録に、「二月御祭之前日首里殿内よりさやは(靈地の名)之美御水・久葉之根・麥之美穂差上云々」と見えてゐる。又年中行事中に、二月と六月とに ubi-nadi (御水撫) といつて、見晴らしのいゝ井泉のある場所で、祖先の墳墓の地を遙拜することもある。其時錫瓶或は其他の器に清水を汲んで、このウビーを額につけるが、さうするのを ubi nadyun と云ふ。ubi といふ語は、甚しくなまつてゐるので、その原形がわからなくなつてゐるが、古事記延喜式等に見えてゐるおもひ (御水) や日本書紀催馬樂等に出てゐるみもひ (御水) と同語であることはいふまでもない。音に音韻の類似ばかりからでなく、其の内容から見ても、二者は決して別物ではあるまい。試みに、『古事記傳』中の數行を拜借して説明に代へよう。

玉器は多麻母比と訓べし、書紀武烈ノ卷ノ哥に、柁摩慕比爾瀾逗佐倍母理、玉盃に水さへ盛なりとあり、和名抄瓦器類に、説文云、盃小孟也、字亦作柁、辨色成云、末里、俗云毛比、(毛比はいと古き名なるを俗云とあるは誤なり) 萬葉四に片坑、(坑ノ字は、坑の誤りか) 大膳式に、片坑十二口、片坑四十八口、片坑八十七口、豐受宮ノ儀式帳は、御水四毛比、御水六毛比、など見えたり、(主水、又さいばら飛鳥井ノ哥に、御母比も寒しなど云る母比は、水を云り、但池川などにたゞある水を、凡て母比とはいはず、母比は、汲て飲む水の名なり、其はかの武烈紀の哥などを以て思ふに、盛る器の名より出たるにやあらむ) また内膳式に、理十一日 (汲運水料) 由加十六口、(汲運水料とあり、和名抄に、俗人呼二大桶爲二由加乎介) 主水式に、汲水料器に、缶一口、土坑一合、(加盤) 片盤五口など見え、此、外も水を盛器種々、式に見えたり、さて後ノ世には、井より水を汲揚るには、必繩など著たる都流倍を用ふる事なれども、(和名抄に、罐汲水器也、楊氏漢語抄云都流閉) 上代の井は、淺き泉なるなども多かりしかば、(今も山里などは然なり) 盛器を以て、直に汲揚もしつとおぼしければ、此の玉器も、盛器以て汲ふにもあるべく、又汲たるを盛る料にても有べし、(次の文に、酌水入玉器貢進とあれば、汲揚るのみの料には非ず) 書紀には此を、玉鏡玉壺玉瓶など作れたり、皆タマモヒと訓べきなり、(玉鏡をタママリと訓たり、麻理も、古き名とは聞えたり云々)

さながら南島の井川の説明でも聞いてゐるやうな氣がする。これで ubi の語源を知ることが出來ると共に、これによつて日本々土でとうの昔死語となつた語が南島にまだ生きてゐる適例をも見ることが出來よう。おもろさうし」卷十二の三十二章に、「ともへみまかり」と見えてゐるが、十坑三碗のことで、これで古くは國語同様に、水を盛る器を「もみ」といつたことが知れる。現今の國語で、器中に汁などの一杯這入つてゐるのを形容してチュモイといふのは、正にその名残りで、これはウフサ(多し)が副詞になる時、ウホーク(多く)になるやうなものである。序でに、この麻理に類似の語が南島の方言に遺つてゐることも言つて置きたい。鬼界島の方言では、陶器の碗をマリー若しくはマイイといつてゐるが、同方言ではマカはマゝとなるから、その古形はマカリ若しくはマカイである。琉球語では、今でも碗のことをマカイといつてゐるが、華夷譯語の琉球語に、「碗、麻加里」とあり、オモロにも「百まかり」と見え、混効驗集にも「おまかり、茶碗の類、を云。和詞にもまかり」と書いてあるから、三四百年前にはマカリと發音したことが知れる。皇典講究所本倭訓栞中に收めてある増補語林に、

まかり、徒然草、久我相國殿上にて水をめしけるに主殿司土器を奉りければ、まかりを參らせよとて、まかりしてぞめ

しける、信云、一條兼冬公御説云、まかり木名合子といふ、出家などの用るまろくぬりたるものごとし、殿上人の殿上にてものなど食ふもの也、昔は當に殿上に有より古書に載す、今はなし、こゝにいふは主殿司相國なれば、あがめて土器を奉りければ、相國は、よし相國にもあれ、殿上にあるうへは殿上人の格あるべしとて、まかりをめしける也、四季物語、菊のみきは云々、上戸まかりしていくたびもかたむく、夢窓國師百首、奥山のあら木のまかりそのまゝにうるしつけねばはげいろもなし。

と見えてゐるが、これなども本土で消滅して、南島に保存されてゐるものゝ一で、どの島でも使はれてゐる、至つて普通の語である。

Kakô「カ、フ」襦袢ほろすて。南島で一般に使はれてゐて、鬼界島ではそれが縮まつて、kko又はkoになつてゐる。國語の古語カカフの轉訛して保存されてゐることは言ふまでもない。奈良の方言で襦袢をカッコといつてゐるのもこれであらう。例の増補語林に、

かゝふ、字錦、殘帛也、也ヤ不福加々カカ不、八雲四、つゞれの名をいふ也、萬五、布肩衣のま海松の如 わわけさがれる
かかふのみ 肩に打かけ、顯昭云、きりくすはつりさせ、かゞはひろはんとなくといへり、かゞとはきぬ布のやれ
て、何にもすべくもなきをいふ。

と見えてゐるが、その同義語に、かかは（幡）がある。琉球語では之をヤリ・カコー（也）不禮加々不の義（と）もいつてゐる。そしてそれでこさへた雑巾のことをカコー・ズズイといひ、布などの焦げる臭即ちきなくさいことをカコービカザ（殘帛火臭の義）といつてゐる。

Fukuta 衣の一種。言泉に、「ふくだい、古の衣の一。その制、詳かならず。〔古語〕宇治一年頃のふくだいをのみ著て行ひければ」とあるが、このふくだいと同じものかも知れぬ。増補語林には「宇治拾八、ふくだいといふものを、なべてにもにす、ふとさいとして、あつく」と、こまかにしたるを云々、このふくだいをのみ著て」を引用してあるが、これを見ると、ふくだいの制は Fukuta のそれに稍々近いやうに思はれる。こは襦袢布などをつきはぎして、太い糸で厚々と細かに縫つたもので、赤貧者が冬季に著ることになつてゐる。これを身に纏ふを、fukuta haehun 又は fukuta abaeahun といふが、後の動詞には、むさくるしいといふ言語情調が伴ふやうだ。その動詞の前に wabuwabu といふ副詞がつくと、もつとひどい意味になる。

Bissa べそ。(一)小兒の泣き出さうとすること。(二)不興で強ひて口を噤んでゐること。それに shôn (する)といふ動詞がつくと、「べそをかく」「べそを作る」の義となり、kuehi (口)がつくと bissi-guehi になると、「べそぐち」「へしくち」と同じく、不興なる口つき又は泣出しさうな口つきの意味になる。「とがめだて」を意味する bitta も、それから分化した語に違ひない。それに shôn とついで、bitta shôn にすると、咎めだてをするの意になる。

Binasa ぶつゝか、ぶてうはぶ、ぶのきとらき等の義を有する語で、口語では binasa-wassa といふ複合語としても使はれる。この語は首里市及び田舎では盛んに使はれてゐるが、那覇市では全く使はれてゐない。琉歌

の中には、binasa-haganasa といふ複合語となつて現はれてゐる。この語は平安朝時代の物語類に能く出て來るびなし(たよりなきこと・不都合なこと・あるまじきこと等の義で、便なしの約まつたものだといふ)と同語であらう。この語は奄美大島諸島の方言にもあるやうだが、宮良氏の『八重山語彙』には見えないやうだ。鬼界島の方言では、間に合はないといふ事を binaran 又は bi-tan といつてゐる。そして間に合はせて呉れには binachi kuri といつてゐるが、之に相當する琉球語は mi-nachi kwiri で、mi には實御（完成の義があるから、びなしが便の約であるといふ説は考へ直さなければならぬかも知れぬ。

Agayun 上の義から轉じて、集まつた者が退散する意になつた語か。Machi (市) nu agayi jibun (時分) bukko (學校) nu agayun といつたやうに用ゐられてゐる。國語にも古く之と同じ言表し方があつた。増補語林に、かういふことがある。

あがるゝ、あつまりたる物のかたぐゝにわかれゆくを云、天武紀、悉散走（悉く散走す）、同、入陣衆亂而散走之（入陣衆亂れ散走す）不可禁、柴式部日記たちあがれやすむ、源箒木、これかれまかりあがるゝところにて、空懸俊蔭、もとめ奉らんにおはしまさずば、くびをも奉らんと申しければ、いとまたびて、みな十人廿人とあがれて、よべの道をもとめ奉る。

これで見ると、agayun の語源は他に求めなければならぬやうな氣もする。それは琉球語にも國語同様に、akariyun (別（わか）) といふ語があるからだ。この語は戀人同志が離縁するとか禽獸が親を離れるとかいふ義に用ゐられてゐるが、後者の場合には、その他動詞は akashun になる。これは引裂く・引きはなす等の義にも用ゐ

られる。Uya-akari (幼（若）ものが親から離れること)・chi-akari (離乳) 等の複合語もある。果物その他農産物が季期が過ぎて市場に現れなくなるを、achagayun といふが、これは agayun を基礎とした語に違ひない。

Sashun ます (差す)。人を使にやるの義。古語で、琉歌に遺つてゐる。

首里加那志奉公取る人や多（おほ）さ、必ずと里前御差し召しやうち

國家の御奉公は、何人も喜んでするものです、あなた、是非お使ひに行つていらつしやい、といふ意である。海外に使ひする役人の妻がよんだ歌である。

だんじよ嘉例吉や、撰で差し召しやいる。船の纜取れば、風や眞（ま）體

ほんとに、縁喜のいゝ旅には、特に人を撰んで、使はされることよ、船が纜を解くと、風は早や追手になつてゐる、といふほどの意である。婦人たちは、見送りの場合には、今でも波止場でこの歌を合唱してゐる。『竹取物語』にある「勅使には少將高野のおほくにといふ人をさして云々」のさしても使にやりての義で、右の琉歌中の語と同じ意味に使はれてゐる。オモロに、「あまみきよ（琉球開闢の神）がうさししよこの大島おれたれ」
「日神がうさしやれば」とある「うさし」も、命令又は御使者の義である。

hi (イベ) 單に神といふよりは、國つ神といふ方が適當かも知れない。漢字で書いた記録には、「威部」があつてゐる。『琉球國由來記』は、清の康熙五十二年(西曆一七一三年)に、琉球國王の命によつて編纂された

もので、其の序に

凡國中諸島各處名山大川其外復有神靈者必能祭焉是天下所共行也我國所有各處林嶽及神社祭壇每年皆能祭之者眞可謂大禮矣雖然各處林嶽及神社祭壇何世何年肇建之今不可考焉亦文獻不足故於茲今奉王命遍尋遺老隱士詳問咨闕其所疑存其信仰清冊十卷恭具上覽伏願神威烜赫護國庇民則祭祀之盛將與國祚共千古矣

とあつて、國中の神名を悉く網羅してあるが、その最大多数は、「何々ノ御イベ」となつて居り、稀にその同義語「何々ツカサ」になつてゐる。そして火神（外來神）又は火鉢の神などには、決してイベといつてゐない。その外に、「何々ノミ神」「何々ノ大神」となつたのがいくつかはある。「辨財天ノ御イベ」といふものが一つ出でゐるが、これは後世國つ神と外來神とが混同された爲に、さうなつたものに違ひない。琉球の正史『中山世鑑』の神代記に出て來る天神又は海神も、神又は君眞物と稱して、殆どイベとは言つてゐない。又其處では、國家最高の神官聞得大君から村々の祝女に至る迄、神と呼ばれることもあるが、これらも亦決してイベと呼ばれることはない。そしてオモロでも、「いべ」は悉く國つ神の意味に使はれてゐる。一の卷三十四章に、「いべの祈りしよわちへ、浦々は寄せ給ちへ、つかさ祈りしよわちへ、なでるわ（人民）は集せて」とある。戯曲女物狂に「引合ら給うれ。引付けてたばうれ。辨の御嶽御いべのお前」とあり、例の由來記の晁の嶽の條にも、「同小嶽ノ御イベ、神名 天子」とあつて、正月・五月・九月の大祭の祝詞に、

「晁ノ御嶽大嶽小嶽イベ司ガナシ、今日ノ吉カル日ヨリマサル日ヨリニ、首里天嘉那志美御前ノ行幸召シヨワチへ、御手ツカラ 御拜ミ召シヨワル故ニ、齋場嶽サヤハ杜ノイベツカサガナシト相手ナリ召シヨウチ、御祝物（禮物）組手御袖（祭典）請ケ召シヨワチへ、天チアメヂ（祭天）通シ召シヨウチへ、御日御月三ツ星七ツ星ノ御前ト相手爲リ給シヨ

ワチへ、首里天嘉那志美御前御歳ノ御厄御月ノ御厄御日ノ御厄御シ退ケ召シヨワチへ、御命ノ綱御星ノ綱イ強ク眞強ク十百年十百歳迄モ百果報ノ有ル様ニ御守リ召シヨワチへ、御賜ベ召シヨワレ。年々正五九月ニ、三平等（首里の行政区劃）シチへ、御崇メ拜デ、首里天嘉那志美御前御拜ミ召シヤイベル、デテ（とて）」

といふことがある。首里市のかたのはなといふ所には、この靈嶽を造營した時に建てられた琉球文の碑（裏には漢譯がある）が立つてゐるが、その中に

「大りうきう國中山王尙清は、そんとんよりこのかた二十一代の王の御くらひをつきめしよわちへ、天より王の御なをば天つぎ王にせとさづけめしよわちへ、御いはひ事かぎりなし。王がなしはむまれながらむかしいまの事をさとりめよわちへ、天下をおさめめしよわる事、むかしもろこしのていわりぎようしゆんの御代ににたり。しかれば御たかべめしよわるもありあり、だいらのひがしにあたりて、べんのたけといふ。これはきこゑ大ききみんぐかみほとけの御あそびめしよわるるところ云々」

と見えてゐる。これは實に明の嘉靖二十二年（西曆一五四三年）の事で、中央集權直後の王尙清（その神號の「天つぎの王にせ」には、天の意を綴ぐ王なる支配者の意味がある）が、支那の帝王が泰山を祀つたに仍つて、首里城の東に聳えてゐる晁の嶽を祀つたいきさつを語るものであるが、由來記にも見えてゐる通り、後世その側なる小嶽に祖神アマミキヨ（天子）をも祭つたので、これによつて、祖神の稱なるイベが、いつしか大嶽にありつく天神（おぼつかぐらの君眞物）に轉用されるに至つたいきさつも窺はれよう。それから祝詞中に、「齋場嶽サヤハ杜ノイベツカサガナシト相手爲リメシヨウチへ」とあるやうに、遠來神なるカナイ（ニライ）の君眞物を、イベと稱へたのも異例である。この神は古くはサヤハ杜を足溜りとして、首里杜を訪れるといつ

たやうに考へられてゐたのが、新に冕の嶽が靈所になつたので、今度はそこまでやつて來ると考へられて、所謂小嶽の前にはサヤハ杜への「おとほし」(遙拜の義)も出來、其處で國王がニライの君眞物を遙拜する祭祀まで行はれたので、小嶽の神を呼んだイベが、「相手」なる遠來神にも轉用されたに違ひない。(遠來神については、『琉球文献叢考』所收「神歌双紙卷一研究序説」参照。)一般民の場合でも、特に太祖だけを葬つた墓には、イベ墓といつて居り、又どの部落でも外來神と考へられてゐる火の神は、嶽火の神と呼んで、イベとは云はず、いつもイベ嶽と對立してゐるのは、注目に値ひする。それから琉歌に「坂元のいべやたんじよ鳴響まれる。よぎよら(くろつぐの事)で、節と節との間の美しいものゝ義、マーニとも云ふ。が一本、蒲葵(あぢまさの事)で、マーニと共に神木になつてゐる)の三本」といふのが、こゝでは「いべ」は「せぢ高き者」神聖なるもの(の在所の意に用ゐられてゐるやうに思はれる。『琉球國由來記』中には「くばづかさ」「マーニ司」といふ神名が澤山出てゐる。『海南小記』中の『阿遲麻佐の島』参照)宮古の島民が、イベには神の鎮座する所といふ言語情調が伴ふといつてゐるのも亦注意すべきことで、それには直接神の名を稱へることを避けて、その在所の名を以て之に代へた氣持がほの見えてゐる。八重山では、この種の神社には、イベの同義語のツカサが使はれてゐる。もしかしたら、イベは「いんべ」(齋部・忌部)と關係のある語かも知れない。それとも、朝鮮語には、神をあらはす語に *nal* と *op* とがあつて、後者には特に國土の神の義があるとのことだが、イベは *op* と遠く縁を引いた語だらうか。兎に角イベの語源については、なほよく考へて見る必要がある。序に祖神の稱呼について、一言附記して置く。祖神には、普通「神御元祖」又は「御神親ほち」といひ、それを拜むことには、「神拜」といふ

が、祖神を天神や海神と區別して、特に *nohan* (み神の轉訛)といひ、それを祀つた所を *nohan-utana* (み神御柵)と云つてゐる。琉歌に、「あまみく(國初の神)の御神・天降りめしよち、造る島國(國家)や代々に榮る」といふのがある。戯曲「忠孝婦人」にも、「御神一ツの近おんばだん」(祖神を一にする近い親類)といふのがある。

Kwizukuri (コエ・ヅクロヒ) 咳ばらひに似たことで、自分がやつて來たことの合圖。國語の「こわづくり」(聲作)や「こわづくろひ」(聲繕)と同じ語である。人の家を訪れる時、或は外出してゐた主人などが歸宅する時、門先で能くそれをやるのだが、隣の部屋で自分の悪口などしてゐる時にも、自分は此處に居るぞ、と警戒を與へる爲に、能くそれをやることがある。そして「たちよりにこわづくりたまへば、このうつばの人は琴を引きやみて、あやしがりて見たまへば」(宇津保物語)のこわづくりと同じ用の方は、今でも盛んにやつてゐる。試みに、この「こわづくりたまへば」を琉球語に直して見ると、*kwizukuri mishōha kutu* になる。だが *kwizukuri* には「とららに聲をつくるひて言ふこと」の意はとうに無くなつてゐるので、「有國、砌にさむらひけるが、すこぶるこわづくろひを申したりければ」(十訓抄)のこわづくろひに相當する言表しには、*tsukuri-kunhi* といふ疊語法が使はれてゐる。*tsukuri* は「つくるひの義で、*kunhi* には別に意味はない。「このこわづくろひを申したりければ」も琉球語に直して見ると、*tsukuri-kunhi sshi myūnūkia kutu* になる。*Sshi* は國語シテに當る。

Si-zukuri〔ス・ヅクロヒ〕 牝鶏が卵を生む前に、方々から材料を集めて来て、せはしさうに巢を作つてゐること。巢繕ひの義。

Kōga-gwi〔コガ・ゴエ〕 牝鶏が巢へつかうとして、頻りにクークーといふ聲を出すこと。卵聲の義。

Sukunun〔スクム〕 その古形は sukunyun で、那覇の方言に遺つてゐる。巢へつくの義で、スクム又はスクマル（竦即ちちぢこまつて動かないの義）から来たものである。

Si-muru〔ス・モル〕 國語のすもり（古語）と同語で、孵化しないで、巢に残つてゐる鳥の卵即ちすもりこの義。和名抄には「暇、和名、須毛里、野王按、暇者、卵不_レ孵也」と解してある。その語源は巢守たといふ。この語はスイムラ・スイムリ・スイムン等とは活用しないで、語尾にナユン（爲る）をつけて活用させる。

Sidiyun〔ス・デル〕 孵るの義。スモルに對する語だから、其の語源は巢出に違ひない。Sidira（未然）・sidiyi（連用）・sidiyun（終止）・sidiyuru（連體）・siri（命令・已然）と活用し、其他動詞は、sidasa（未然）・sidash（連用）・sidashun（終止）・sidashuru（連體）・sidasi（命令・已然）と活用する。この複合語の後接動詞 sidiyun が下二段の古形でなく、新しい形であるのを見ると、この造語の時代はさう遠くは溯れないやうな氣がする。

蛇や蟬などの蝮もよほくには、sidi-kayun（すでかはる）といひ、其のぬけがら（蝮もよほ）には、sidi-guru とす。guru は殼の義である。

『おもしろさうし』の十三の卷の百五十六章に「君南風きみなはえ（久米島の祝女の頭）はたかべて、たすこ山登のぼて、撫なで松はげらへてはねうちがま（羽撃さする小）すだちへ、飛ぶ鳥と競あそひして、帆走ほりやせ」といふオモロがあるが、君南風は神に祈りて、タスコ山に登り、素性よき松を切倒して、小舟を作りぬ。飛ぶ鳥と競争して、帆走らしめよ、といふこととで、之を見ると鳥類を靈物と考へてゐた南島人が、船を造るを雛ひなを孵ひすに譬へて、その船に命名するに海鳥の名を以てしたことがわかる。同卷の百六十三章にも、「はねうちとみ（羽撃さする舟の義）すだちへ」とあり、百九十八章にも、「親御船おやうねふねすだちへ」とある。

そしてこの語は、やがて高貴の人が誕生する義にも轉じた。即ち生なるは imariyun であるが、其の敬語は sidiyun である。貴種は直接女の腹から出るのではなく、或聖なる存在から、所謂中間宿主を経て、他の存在に移されると考へたから、之を表現するに孵化する義の sidiyun を借りたのは當然なことで、竹取物語の赫映姫かげひめが竹の中から出たといふ傳説や、新羅の太祖赫居世が卵から生れたといふ傳説と照合せて考ふべきものであらう。この語が國語のあれままと比較して研究すべきものであることはいふまでも無い。この語の語幹は sidi であるが、それから種々の複合語が出来てゐる。例をオモロに取つて見ると、十九の卷の十章、琉球統一の英主尙巴志の誕生を歌つたオモロに、「佐敷苗代さしきなほしろに、すでもの眞物まもの、眞玉またまの跳上とよがる善子みよこ」といふのがある。眞物はすでもの（産兒）のシノニムで、これには靈物の義がある。おたかべの詞にも「思子おもなご・御すでもの、左右百果報ひだりもももりもかまう

の有る様に、お守り召しやうち云々」と見えてゐる。思子は御子様おんぎやうの義で、おすでもののシノニムである。こゝでは何れも王子王女の意に用ゐられてゐる。又戯曲「護佐丸敵討」にも、「道障りしゆたる護佐丸も殺ち、産し子茹捨てて、すでぐわ茹捨てて、云々」とあるが、このすでぐわは産し子のシノニムで、こゝでは遺子の義に用ゐられてゐる。今少し例を戯曲に求めると、銘苅子めいげこ（羽衣）に、「やあ、父親よ。すだし母親や尋めればも居らぬ。思姉おも姉と我や如何がしゆゆら」「すだし母親や、世界の人あらぬ。天降りあまくだしやる女、天降りしやる女」といふのがある。このすだしは生みの義である。

『混効験集』に「すだしやり、拜でする事也。きこる大君がなし、だにすとよみよわれ。下司眞人げすまひひとすだしやりちよわれ、と有」とあつて、すだしやりを拜謁しての意に解してあるが、これはこの語の意味を取りちがへた上に、自他を混同したものである。引用してあるオモロは、六の卷の十五章に出てゐるもので、そのすだしやりには生みて、生みてマア、生んでからに等の義があるから、後半だけを意譯して見ると、國民の慈母に在せといふことになる。これに似た表現法が、十六卷の二章にも出てゐる。即ち「きこるあまわりや、國の兄弟産しよわちへ」で、名だゝる阿摩和利は國民を生み給ひて、の意であるが、語をかへて言へば、阿摩和利は國の親になり給ひてといふことで、「國の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします云々」（源氏桐壺）と比較すべきものである。

それから、姪めい娠ごんしてゐるには Kasagiyun といふが、sidi-ugafu shon（すで御果報おがほうをしてゐるの意）といふ場合もある。これには恵まれた状態になつてゐるといふ程の意味がある。後には目上の人から物を頂戴すること

を sidi-gafu いふやうになつたが、これには御手厚おんてあつき御恩命おんおんめいの義がある。「銘苅子」に「たうく、果報事おがほうじこやゆる、すで事ことよたいもの、押列おしりれて宿に、躍おどて戻ら」といふ文句がある。そして後には sidi-gafu sidi-ugafu u-sidi-gafu などと用ゐられ、やがては sidiyun が頂戴するの義にも用ゐられるやうになつた。『混効験集』にも、「百すでやべて、冥加難有と云事也」といふことが見えてゐる。やべては侍りての義である。オモロの七の卷の四十三章に、「首里降る雨や、すで水みづ降りよる」といふことがあるが、このすで水はありがたい水の義である。戯曲「忠臣身替」にも、「あたら突然の義よしれやり（参上し）、御褒美ごほうびすでゆすや（頂戴す）、我が身みとも（位）似合ぬ、恐おそしやよ有もの、夜晝よぢうも御奉公ごほうこう肝かんも肝盡かんじんち、あまく（精出）して（働）きやり、行き積ゆきつる年に、島里しまさとも拜まがで（拜領）、位階いざなもすでて、御掛おかけぶさい（ゆ）御代ごしろに樂たのよ歡よろこべら」といふことがある。琉歌にも、「二葉ある松の老木おきななるまでも、御掛おかけぶさい召しやうれ。拜まがですでら（拜見した）」といふのがある。

今一つ注意すべきは、「すで水」に産湯若しくは若水の義のあることである。『混効験集』に、「すで水、誕生の時明方あきほうの井水いみづより水みづをとり撫なでさする也。其の水みづを撫なす（一本に）と云」と見えてゐる。それから一般に沐浴するを sidiyun といふやうになつた。琉歌に、「源河走川げんがそうがわや、潮うしほか湯ゆか水みづか。源河乙女げんがおんなのおすでところ」といふのがあるが、このおすでところは沐浴齋戒する所の義である。多分水たぶんみづの女神たちの誕生でも見た氣持きもちで歌つたのであらう。近代に至るまで、貴人の沐浴するを、u-sidi-mishon といつたが、一般人の沐浴する義の sidiyun は殆ど廢語となつて了つた。序にいふが、その同義語の minadi-shun は、化粧する義に轉じて、時偶韻文で用ゐられてゐる。琉歌に「油あぶら買かうて賜たまれ。簪かんざしも買かうて賜たまれ。捨すて夫おとこのみるめみなでしやべら」といふのがある。

一首の意は、今日の遊びには、あの男もやつて来るだらうから、つらあてにうんとめかして行きませう、上等の油を買つて頂戴、立派な簪も買つて頂戴、といふことである。「みなで」の原義は、身撫でか、水撫か、はつきりしない。口語では化粧するを *sideshun* (第一音節にアクセントを付けて、孵化させる義の *sidasun* と區別する) といふが、品物などに手入れて光澤を出す義にも轉じてゐる。化粧には普通 *sidasshi-gata* と云ふがこの時には、第一音節のアクセントは落ちる。

『俚言集覽』の中に、「あらふ、生を活用して新の義となり、新を活用して洗の義となる也」といふことが見えるが、*se-shi* (孵化) から貴種誕生の義が生じ、それから沐浴の義が生じたといふ考へ方に似通つたところがある。

以上は、數年前脱稿した『琉球戯曲新辭典』(雜誌方) 中に出したものを書直したのだが、琉球語に誕生を意味する二種の語のあることは、折口信夫氏もとうに気がついて、「若水の話」(古代研究上巻一四) の中で、同様なしかも意味深重な説を發表されてゐる。氏の論文を読む人は、氏が所謂表面採集家達と選を異にして、南島の民俗及び方言中に、「生活の古典」を見出したことを驚かすには居れまい。卑説の如きは、言はゞ氏の説の補足に過ぎない。たゞ氏と説を異にする點は、氏が稜威(其語源出づか)若しくは神聖を意味する「すぢ」(稜威)から *sidi* (誕生) が來たとするに反して、私は孵化を意味する *sidi* が誕生の義に轉じたことだ。オモロに「せぢ子産ちからや、我が身若くなて」といふことがあり、*sidi-gata* を「せぢ果報」と表記した文献もあるが、それは「せぢ」(*sidi*) と「すぢ」(*siti*) とが音韻と意義との類似から混用されたもので、語源は全く別だと思はれる。

れる。それからどんな抽象的な形而上のやかましい語でも、そのもとはごく淺薄な物質的な事から出來てゐる例が少くないから、巢出から貴種誕生の義が、いつしか神聖といふ言語情調を伴ふに至つたと私は考へてゐる。

Ara-kami (アラ・カミ) 『琉球國中山世鑑』に、「荒神と申すは海神也。是は世澆季に及び、不仁亂逆の者共出來る時、三十年や五十年に一度現給て、刑罪を行て、使諸狂者直。是も二七日の訛遊也。ワウに出現し給ける。俗にワウノミオヤダイリとは申す也。」云々とある。ワウは澳の義で、港の入口などにある小島のことである。同様な事が球陽にもあつて、細注に、この神は、必于奥(澳の誤か)出現故俗云奥之公事、と見えてゐるから、一旦小島に上陸して、それから國土清淨の公事に従事したと考へられてゐることが知れる。(「第一尙氏球の創世記並に祭祀に及ぼせる影響」参照) 荒神はもとより宛字で、そのあらは生洗と關係のある語に違ひない。「若水の話」に、「すぢの原義は謂はゞ出現する事であつた。日本で言へば、出現の意のあるといふ語である。或は、いづである。すぢのつく動作を言ふ語で、即、母胎によらぬ誕生である。あると言ふ日本語も、在有の義と言ふよりはすぢの義があつたのではないか。荒現顯などの内容があつた。あら人神などいふのも、すぢ(人間)にして神なる者と言ふことで君主の事である。地方の小君主もあら人神なるが故に、社々の神主としての資格に當るの、其を回して、其の祀神にも言うた」とあるのを参照して頂き度い。

Shikyami [シキヤミ] 鬼界の方言。shiehami ともいふ。初浴の義で、沖繩方言の midzi-nadi (水撫) 又は ubi-nadi (御盥撫) にあたる。舊曆八月の初の丁の日即ち節折目(節折の義)に、七歳迄の男女の子のゐる家では強飯を炊き、(その年に生れた稚兒の爲には特に赤飯を炊き)、其日また誰も汲まない新井川につれていつて、握り飯を頭上に置きながら、薄の葉で初水をかける儀式があるが、この頭上に握り飯を戴かせる祝ひは、平安朝時代の戴餅のそれに似通つてゐる。因にいふ。沖繩にも新川といふ地名は方々にあるが、古くは鬼界島のアラハーと同じく、すで水又は若水に關係をもつた所であつたらしい。之に對してミーガー(新井戸)といふ語があるが、新しく出來た井戸をさういつてゐる。ミーは國語のニヒに當る。

Ara-mi [アラ・メ若しくはアラ・ミ] 能く死靈を見る人のことで、普通睫毛の長い者に多いといはれてゐる。新目(或は新見)即ち誰よりも先に死靈を見る者の義である。

Ara-zôri [アラザウリ] - nke-zôri [ムカヘザウリ] 昔は舊曆十一月、田植に先立ち、吉日を選んで、苗代から苗二本を田に移し植ゑる行事があつたが、之をアラゾーリといつた。十二月に入ると、ンケーゾーリと稱して、更に苗七本を田に移植し、それから數日經つて、一般の田植が始まつた。(『琉球國由來記』アラは「新」で、ンケーは「迎へ」だから、アラゾーリに初めて苗をおろす事の義があり、ンケーゾーリに再び苗をおろす事の義のある事は言ふまでもない。『俚言集覽』に「さおり、上總の方言、五月初めて苗を植るをサオリと云。遠江も同じ。又サウリとも云」とあるのを見ると、琉球語のさお(サウリ)が古代日本語の遺言であることは明かである。思ふに、苗を植ゑる形式も、古俗の保存されたものであらう。

Yeyisâ [エイサ] うたまひを意味するあそびの同義語で、農村に於る男子の踊り。盆踊りの事だが、Yoyisâ とも云ひ、那覇市では、その歌に shichigwatsi yoyisâ (七月踊り) と云つてゐる。木遣(王城の普請或は王子家る用材を那覇から曳上ること、此時首里那覇の各部落各階級の人)の時、那覇の平民の諺つた歌に、民は、假裝して、鉦や太鼓を叩き、歌を諺ひ、踊りつゝ進行した)の時、那覇の平民の諺つた歌に、

首里天ぎやなしの(囃子、ヨイシー、ヨイシー)
御材木だやべる(囃子、ハイルレー、ハラーラー。ハー、ハリガヨイシー。ヨイシー、
國頭捌吏、
二才等も參やめ。
名護山榎木や
鰻の眞肌
御萬人まぎりや
皆肝揃として、
世果報の續きや
ふだかちや御代さめ。

といふのがあつたが、一首の意は、首里の王様の御材木で御座りまする、國頭の役人も、二才衆も、よく來て下さいます。名護山の榎木は、鰻の眞肌のやうに、する／＼とよく曳かれる、お百姓と云ふ限り、皆心を一に

して、御奉公をするので、豊年がかうも続くことよ、これこそ言傳へられた、フダカチヤの御代といふものだと
いふことである。さて、こゝで問題に必要なのは、その囃子中のヨイシーである。ヨイシーは、力を入れる
時發する掛聲で、國語のヨイヤサに當るが、古くは多分 *yeyishi* とも云つたに違ひない。 *Yeyisa* が *yeyishi* か
ら來たことは言ふまでもない。

『おもろさうし』の卷十四いろくゝのゑさおもろさうしは、地方のオモロ七十篇を収めたものだが、この「ゑ
さ」は *yeyisa* の古形であらう。『校訂おもろさうし』に、「え」の假名が卷十一の六十二章中の「きこえあんじ
おそひ」と卷十四の二十一章中の「ごえく世のぬし」との二ヶ所に出てゐるのは誤植で、えは悉く「ゑ」にな
つてゐるから、「ゑさ」はもと「えん」で、*yeyisa* を表記したものと思はれる。これは古代國語の掛聲を表す語
で「えさ」と比較すべきものである。試みに、大言海の「えさまき」の項を見ると、

カヲ入ルルトキ、發スル聲、榮花物語、十五、疑「大ナル木ドモニハ、太キ綱ヲツケテ、聲ヲ合セテ、えさまさト引キ
上ゲ騒グ。」

とあり、高野博士の『日本歌謡史』(七七三頁)木遣の掛聲の條にも、

木遣は榮西法師が建仁二年寺を建てる時、人夫どもに自分の名を掛聲に用ゐさせたのに起るといふが、既に榮華物語の
疑の卷に「御堂の上を見上げれば工ども二三百人上り居て、大きな木どもには太き綱をつけて、聲を合せて、えさま
さと曳上げ騒ぐ」とあつて、掛聲に「えさ」と呼ぶこともずつと古くからである。さうして掛聲を用ひることは、更に
遠く遡つて人類が共同生活を營んで、協力して物を運ぶ必要の生じた時まで行くべきである。
と見えてゐる。

「ゑさ」は『おもろさうし』の卷名中にあるだけで、オモロの中には見出せないが、現今でも *yeyisa* が男の
たづさはる團體的踊りの名であるのを見ると、「ゑさ」も古くはさうであつたに違ひない。

中頭郡の西原村字翁長で、舊曆八月十一日から十五日迄の五日間に行はれる行事に *yonshi* といふのがある。
一般に「翁長のヨンシー」といふ名で知られてゐるが、藁で造つた長さ一丈の大蛇を、宇の中央なる根所の神あ
しやげの庭にとぐるを巻かせて置き、十七八歳位の五六名の處女が、それをついで七回程庭をまはつてから、
南の方シジといふ所迄持つていつて、そこでも七回まはり、再び根所に引つかへして、又七回まはつた後で、
北の方カータといふ所迄いつて、そこでも又七回まはり、すぐ根所に引つかへして、又七回まはる。そして進
行中は絶えず蛇の尾をふるることになつてゐる。さてかうしたことを一日に七回もくりかへして、五日間つゞけ
るが、その時道々唱へる掛聲がヨンシー、ヨンシー、翁長ヌヨンシーなので、この行事がヨンシーといふ名を
取り、いつしか藁の蛇までヨンシーと呼ぶやうになつた。ヨンシーがヨイシーの轉訛であることはいふまでも
ないが、私の耳には、ヨンシーはヨイシーよりかなり弱く響く。那覇の女子の三月遊びの時の歌の囃子に、
ヨーン・サーサーといふのがあるが、これなどもヨイサーから來たものに違ひない。

Asibi (アソビ) 小中村清短博士は、『歌舞音楽略史』中に、書紀に「天稚彦が死みまかりし時、その親族等集ひて
喪葬の式を行ひ定め、日八日、夜八夜、遊びたり」と見えてゐる。あそぶを、管絃歌舞の樂を爲すをいつた、と
解されたが、沖繩島の東海岸を少しく沖に離れた津堅島でも、一時代前までは、風葬の俗があつて、一週間は

どは毎晩のやうに、親戚朋友が、酒肴や樂器を携へて、死人を後生藪に訪づれ、思ふ存分に遊ぶを「別れ遊び」といつてゐた。これは單なる葬宴ではなく折口信夫氏が喝破された如く、かうしたら、蘇生もしようか、といふ希望をもつて、踊り狂つたのが、後世その古義が忘れられて、「別れ遊び」の義に解されたに違ひない。折口氏も「萬葉集辭典」中に、あそぶを解して、「古くは管絃の類の音樂を樂しむことをいうたやうで、遊部などの部曲すらあつたのである。後には廣く心を慰め、霽れさせる行爲をいふ事になつたので、本集中にあるあそぶも、この兩義を持つてゐるやうである」といつて居られるが、琉球語の asibyu もやはりこの兩義に使はれてゐるやうだ。しかも asibi と名詞形にすると、誰でも第一義に解するのが普通である。「おもろさうし」の卷十二いろ／＼のあそびおもろさうしは、例のあそびの時に誦はれたオモロを收めたものである。具志堅のろくもいおもり帳に出てゐる、舊八月十日の御嶽御願の折りのオモロに、「我が神や、今日ん明日ん、蜻蛉あそび、胡蝶あそび、あいるすんど、はいるすんど、わが神や」といふのがあるが、これは神と呼ばれる祝女が、あけづみ衣(神羽の義)を着て、神前で踊る狀を歌つたもので、このあそびは舞ひの義に解して差支ない。琉歌にも、「八月の月や遊び月だいの、あむしやり(吏員)も遊べ、我も遊ば」といふのがあるが、この遊びも舞ひの義である。もう一つ二つ例を琉歌に取つて見よう。「今日や御行合拜で、いろ／＼のあそび、明日や面影の立つよと思は」のあそびも踊りの義で、「打豆と眞豆我馬小にかい喰ち、我無藏(我が)うち乗せて、あそびみやかへ」のあそびみやは、遊びの庭即ち演舞場の義である。「嘉例吉の遊びうちはれてからや、夜の明けて、太陽の上る迄も」の遊びも踊りの義で、うちはれては、無禮講になつての意である。八重山には、「うちはれの遊び」といふ

裸踊りがあつた、と言傳へられてゐる。要するに「遊び」は、當日演出する舞踊の總稱としても使はれたと見ていい。「おもろさうし」の卷九首里天ぎやすへあんじおそいがなしいろ／＼のこねりおもろさうしは、舞ひの本とも云ふ可きもので、オモロに舞の手まで書き込んであるから、この「こねり」が遊びの同義語で、もと團體的祭式舞踊であつたことは、宮古島舊記の稱間のいかりが、龍宮からこねりを教はつて来て、島民に傳授する條に、「根所に、神人數は二十五人、其内伊かりは眞中に臺に居、西方に向、白鷺の鳥之尾羽長一尺以上の貫連ね、冠に仕、紺朝を着、伊かりを立圍、伊かりが詞を清、節毎に拍子を揃て、鼓を打、云々」と見えてゐるので知れる。オモロには、「按司や按司とこねら、下司や下司となよら」とあつて、こねら(未然形)の同義語に、なよらが出て居り、「あそびなよれば」又は「こねりなよる」といつたやうに、複合語としても現れてゐる。こねりは後に個人的舞踊の義にも轉じたと思はれる。

六月と八月とに行はれる祭式舞踊に、しのぐ(琉歌集には神遊)といふ團體的舞踊もあつたが、もと女子の踊りであつたことは、二百年前の女歌人恩納なべの歌に、「よかてさめ。姉部。しのぐしち遊で。我等世になれば、お止めされて」とあるので知れる。それは又今でも離島などにその名残を留めてゐる。オモロに「こゑく綾庭に黄金木は植えて、黄金木(九年母)が下、君の按司のしのぐりよわる美らや」とあるのを見ると、しのぐはしのぐり、しのぐると活用して、一般の個人的踊りの義にも用ゐられたと思はれる。「こねり」や「しのぐ」もつまりは當日演出する舞踊の總稱と見て差支ない。

因みに云ふ。社交ダンスでやるやうな男女の連れ舞ひは今でもやつてゐるに拘らず、之に對する語のないの

は不思議だが、人に付きまとうて仕事の邪魔などをすることを「相舞ひくさまひ」といふから、古くは多分「相舞ひ」といつたに違ひない。因にいふ。uchōnéといふ語には、打合ひ(似合)舞ひの義があるが、側にゐてほどよく調子を合すことの意に用ゐられてゐる。つけ上るには、megayunといふが、それには舞上るの義がある。

Asibi と yeyisa とを除いては、ともに廢語となつて、今では moyi(舞ひ、終止形 moyun)と wuduyi(踊り、終止形 wuduyun)とが一般に用ゐられてゐるが、オモロでは、前者は、「胡蝶形、舞う様に」袖たれて舞うて「雲べ舞ふ鳥」といつたやうに、昆虫や鳥類の場合に用ゐられ、その名詞形は「ふへの鳥のまやひ」といつたやうに、「まやひ」になつてゐる。それから、馬を舞はす者(萬歳又は京太郎)には、'imamēsha' といつた。蠅螂舞といふ語も、古く輸入されて、ishatū-mēと翻譯されたが、この mē は今では敬語 mē(前)のやうに解されてゐる。(蠅螂の琉球語)参照) 兎に角今では moyun といふ語が普通に用ゐられて、舞ふ人には、mōya' といつてゐるが、mō(舞ひ)といふ名詞形は單獨には現れないで、ōjī-mē(扇子舞ひ)などの如き複合語に現れてゐる。心私かに喜ぶことには、fuehukuru-ōjī-mē(懷扇子舞ひ)といつてゐる。

オモロにはたゞ一つ「あやこ」といふ語が躍りの義に用ゐられてゐるが、これは現今宮古島の方言に遺つて、躍りと歌との二義に用ゐられてゐる。それから、今でも農村の女の遊びに、白大鼓といつて、鼓や手拍子に合せて踊る團體的舞踊があるが、同じ名稱の舞踊が、九州地方にもあるから、古く白を叩いて踊つた時の名残であることは言ふ迄もない。戯曲には「をどり」の同義語に、「のは又は「のはね」といふがある。序に、藝

能には「のや」といひ、藝人には「のぎもち」といつて、普通に使はれてゐることも、附加へて置く。

鬼界島の方言では、踊るを machuyi といつて、其の原義は卷くだが、これは古く輪になつて踊つた古琉球の祭式舞踊の名残に違ひない。この種の舞踊はにまだに宮古島に遺つて、クイキヤーと呼ばれてゐる。そしてその同義語の yunyū' には、圓陣を造つて踊ることの義があり、この踊りで卷いてゐたのを開いて、縦隊になることには、surukyō' といつて、それに suraki 即ち開きの義があるのは注意に値ひする。那覇の綱引行列の時、棒を持つた大勢のものが、時々関の聲をあげながら、棒の先をかち／＼合せながら踊上ることを「卷き棒」といつてゐるのも、かつて踊るを machun(卷く)といつてゐた證據ではあるまいか。鷹の群が盛に翱翔するには、machashun(巻きに卷く即ち盛に卷く)といひ、大勢のものがうるさく附纏ふ或は殺到する義にも轉じてゐるが、これにも同じ意味があらう。子供などがうるさく騒ぐのを形容していふ、zā nu machun nē(魔の巻くやう)の machun にも、古く踊るの義があつたに違ひない。

Sakan-ké【サカ・ムカへ】一族を代表する戸婦の一行が、三年おき或は七年おきに、祖先發祥の地に詣で、歸る日、一族中の老弱男女が、之を郊外の坂の邊で迎へて、慰勞會をやること。倭訓栞に「さかむかへ、坂迎の義。京都の人參官せしを歸路に迎ふるをいふ。其もと東へ下る人の歸りを逢坂まで出迎ふるよりの名成べし云々」とあるが、この風習とそれを表す語が、いつ頃どうして南島に這入つたかは、知るよしも無い。この語は鬼界島では、sanké と訛つて、遠方から來る親戚などを迎へる義になり、八重山では sakamukai といつた

やうに、原形に近い形で發音されながら、婚禮祝の時、花嫁の入り来るを玄關で迎へる者の義に轉じ、與那國島では *sakanukai duayi* (坂迎祝の義) となつて、一般宴會の義に用ゐられてゐる。これで、古俗や古言の必ずしも田舎にばかり遺つてゐるものでないことがわかる。

Minkāwu [メンカウ] 子供を威す戯で、下脛を指頭で強くおしきざげて、曠の内側を赤く剝き出すを、*mikōshun* (目を反す) といひ、さうすると同時に、*minkāwā* と唱へるが、この語は國語のめかこう (轉じてベカコウ) と同語で、目赤の義であらう。これが變形して、こわい顔付を *minkāwā* といふ小兒語も出來てゐる。大鏡に「筭の皮を男のおよびごとに入れて、めかこうしてちごを威せば」とあるが、かうして竹の子の皮を指ごとにさし入れる兒戯も、一時代前まで遺つてゐた。

Kata-wakiti [カタ・ワキテ] 勝負を争ふ爲に、人數を右方と左方とにわけること、*かたわき* (古語) に當る。活用すると、カタワキラ (未然)・カタワキイ (連用)・カタワキユン (終止)・カタワキユル (連體)・カタワキリ (命令・已然) となる。試みに、『宇津保物語』の「男女かたわきて、石はじきし給ふ」を琉球文に直すと *Yikiga yinagu katawakiti, ishihanché (shi) mishen* といつたやうになる。(最上の敬語の場合には *shi* は *shinānān*。) *Katawakiti* の語尾を長く引張つて、*katawakiti* にすると、さうすることの義となる。さうした遊戲をするといふ言表しには、それに佐變の動詞 (セ・シ・ス・スル・スレ) に相當する、*ssa* (未然)・*shi* (連用)・

shun (終止)・*shuru* (連體)・*si* (已然) 並 (命令) を附ける。文例にも出てゐる通り、「して」に當る語は、*shi* になつてゐるが、それは *shichi* の變化した形で、連用形の *shi* と區別されなければならぬ。序でにいふ。*ss* と *shi* とは長子音 (所謂促音) で、國語では語間にしか現れないが、南島語では、朝鮮語と同じく、語頭にも現はれる。

Tu-t-achi [ト・アハセテ] 「と同時に」の義。『枕草子』の「いかゞと啓するにあはせて、臺盤所の方に、鼻いと高くひたれば」の「にあはせて」と同語である。一寸見たところ、兩者は全然別語のやうな觀を呈してゐるが、琉球語の音韻法則を參酌すると、全く同構造のものであることがわかる。私は東條操氏編纂の『南島方言資料』の附録文例の説明に、「起きなげりやを意味する *ukiran-daré* の *d* は、フランス語の *a-t-il* の *t* の如く、婉音法に基づいて、挿入したもので、那覇の方言では、やはり *ukiran aré* になつてゐる」と書いて置いたが、*tu-t-achi* の *t* も、同じ理由によつて、挿入されたもので、この *t* を取ると、*tu-achi* (\wedge *tu awachi* \wedge *to awasete*) になつて、「にあはせて」に歩みよつて來る。今兩者が上の動詞に續く具合を比較する必要上、右の文例を琉球語に直して見ると、*Chā debiruga ndi myuinukiyusi tu-t-achi, u-déjā wuti datōn hana-fiteharé* になる。この語は國語では終止形に續くが、琉球語では連體形から *to* を取つた所謂下略法に、事又は者を意味する *ss* を附けたものに續く。概括的にいふと、國語の「ニ」といふ互爾遠波は、終止形に續くが、それに相當する琉球語の *tu* (ト) は、下略法に續くのである。序でにいふが、之に相當する那覇其他の方言は、*tu-majin* である。*tu-achi*

は發音しにくいから、自然これに代へたと思はれる。この語は首里でもやはり *tu-tachi* のシノニムとして使はれてゐるが、前者が「と同時に」(*shōron*) の義に用ゐられるに對して、これは多く「と一緒に」の意に使はれる。いはゞ、首里語は言表し方が綿密になつてゐるわけである。*majin* は *majun* と發音してゐる方言もあるが、オモロ時代の「まちよに」(共に)の轉訛した形で、*majin ichun* (一緒に行く)といったやうに、副詞として用ゐられてゐる。其の敬語は、*u majin* である。オモロには、「首里の王と天に照る口とまちよにちよわれ」といふ用例がある。

Madi [マディ] *maduyi* の轉訛した形。「惑ひ」の義から「喪失」の義に轉じ、更に「孤獨」の義にも轉じてゐる。この語は他の名詞の下について、複合語を造る時にのみ現れるが、鬼界島の方言では、單獨に現れて喪失の義に用ゐられてゐる。『南島八重垣』に、「まうでい、孤獨也。或はおやまでいとも云ふ」と見えてゐるが、このまうでい (*ma-ma-ih*) に、「母惑ひ」(母を喪ふこと又は其の者)の義のあることは、其の同義語に、「親までら」(*uya-madi*) があるのでわかる。そしてそれから、更に放浪又は放浪者の義も派生してゐるが、其の意味は *ya-madi* (家惑ひの義で、稍國語の戸惑ひに近い) といふ語と比較して考へたら、もつとはつきりして来る。戸惑ひには、(一)夜中俄に目をさまして、方向をあやまること、(二)過つて他の部屋又は家に入ること、(三)あちからこちらに迷ふことの義があるが、琉球語では、(一)には *yanadi* とは言はないで、*nizamasa* 「ネザマサ」といつてをり、*ya-madi* には自分の家を見失ふことの義があつて、(二)の義は無いから、(三)の義

だけが戸惑のと共通するのである。これに類似の語に、*ana-madi* (穴惑ひ) といふのがあつて、蟹などが、穴を塞がれて、狼狽する事にいふが、鳥類の場合には、*shimadi* (巢惑ひ) が用ゐられる。

氣塞即ちいさづむことには、*chi-madi* (息惑ひ) といひ、子供が秘結して、大便が肛門に引掛つて苦しむことを、*hia-madi* (*hia* は大便の小兒語) といふ。それから故郷を離れて、放浪することを *shima-madi* (島惑ひ) といつてゐる。首里那覇では、稍耳遠くなつてゐるが、中頭郡の西原村あたりでは、今尙盛に使はれてゐることだ。鬼界島の方言で、命を失ふほどの目にあふことを *inchi-madi* (命惑ひ) といふのも面白いことである。かういふ種類の複合語は、他の南島方言にもあるに違ひない。國語では、戸惑ひ以外には、大鏡にあるやうな「院のおはしますなりけりと見て、車ども、歩人も、てまどひし立騒ぎて、いともさわがし」のてまどひの一例しか私は知らない。これは手惑ひの義で、手の置所なきさまにいひ、あはてふためく事に多くいふとのことだが、これに相當する琉球語は *ti-mama* で、準備が出来ないうちに、客に來られたり、肝腎な時に必要品がなかつたりして面喰ふさまにいふのである。この語は多分かつて存在してゐたであらうところの *sho-madi* (手惑ひ) の崩れた形であらう。この語から思出したが、迅速又至急を意味する語に、*sho-madi* といふのがある。この *shō* は *shō-nugiyun* (ふるたへる。性抜の義)・*mushō-nati* 或は *mushō-hi* (何れもあはてゝの義で、*mushō* は無性で其の疊語法は *mushō-tushō* である) などの *shō* と同じもの *tanashi* (魂) の同義語だから、*shō-madi* の原義は魂が抜け出して、じつとしてゐなうことであらう。*Shō-madi shi'ujan* は大急ぎで行つたの意であるが、人をせき立てる場合には、單に *shō-madi* といふこともある。

前にも述べた通り、親を失つたたよりない子の義を有する *ma-madi* は、放浪者の義にも轉じてゐるが、これは從來わからないものとされてゐた戯曲「大川敵討」中の難語を解釋するたよりになるものである。人質になつてゐる若按司(若君の義)を取戻さんが爲に、乳母と稱して谷茶城に入込んでゐる、村原夫人の密使となつて村原の所へ急ぐ泊は、途中で行商人に扮して妻の消息を聞きに出た村原につかまつて、

御急ぎもやゆら、御無心も知らぬ、取付も無らぬ、望み事やすが、旅の上の御縁拜む(お目に)お情に、珍らしい事この頃に有らば、お休息のうちに、聞かち給れ。宿元のみやげ物語りしやべら。(文語體)

と話をねたられたので、

まゝでいしんぢあ、人の急げは。(これは獨立した詞が獨語中に竄入したもの)むゝ、確に村原の比屋やすが、しかいと見覺の無らぬ。まづ口振て探て見だう。(口語體)

と獨語をいつてゐるが、泊の詞中の「まゝでいしんぢあ」(*mamadi shinza*)の意味は、今ではどんな古老に聞いてもわからない。だが、前後の關係から、之に煩さい旅人の義のある事は大體見當が付く。兎に角 *mamadi* に放浪者の義のあることはよくわかるが、わかりにくいのは *shinza* の意義である。この語は今では單語としては使はれないで、*shinza-kunza* といふ疊語法となつて遣つてゐるのみである。物事の煩雜な狀を表する語で、*shinza-kunza munu yun* といふ場合には、物言ふを形容する副詞になつてゐるから、くどくとかうるさくとかいふ意味になる。それから *shinza* の語尾を長く引張つて *shinza* にすると、しつツこい人・うるさい人の義になるから、*mamadi-shinza* が、「煩いね此の人は」の意味で使はれたことは、最早疑ふ餘地がない。最近私は

このシンザーの新里といふ饒舌家の姓から來た事を闡明して、特に「おほんしやり節の原歌の發見」及び「再びおほんしやり節の原歌について」の二篇(琉球文獻叢考)所收)を草したから、詳しくはそれを見て頂きたい。

Fufufutu-shun 「ホトホト・ス」欲しがつてゐる物を是非得ようとして、或は渴望してゐる事を是非成遂げようとして、或は思ふ人に一刻も早く會はうとして、胸が躍るの義。用例を一つ二つ出して見ると、*yira ndi fu-fufutu shun*(得むとてほとほとす)・*ichara ndi fufufutu shutan*(會はむとてほとほとしにき)のやうなものである。ほとほとすといふ動詞は、國語のどの辭書を引いても出て來ないが、古くはさういふ語もあつたのではないかと想像して、試みに造語してみたのである。といふのは、『萬葉集』の卷の十五に出てゐる狹野茅上娘子の歌の中に、

歸りける人來れりと云ひしかば、保等保登之爾吉。君かと思ひて。

といふのがあつて『代匠記』に、「ホトホトシニキは驚て胸のほどばしるなり、又悦びて立ほどばしるなり云々」といふ解釋があるからだ。作者別萬葉全集を見ると、土岐善麿氏も契仲の説に據つて、ほとほとに驚喜を當て居られる。もしこれが正しい解釋だとすれば、萬葉時代そつくりの言表し方が、琉球語にまだ生きてゐることになる。試みに略解を繕いて見たら、ほとほとを殆く、しにきを死にきと解して、ほとほとしにきを、餘り悦びて魂までひきの意味に取つてゐる。そして折口信夫氏も、之に従つて、ほとほとしにきを、びつくりして危く死ぬ處であつた、と解された(口譯萬葉集)。琉球語はまた、この種の解釋者にも都合のいゝ資料を提供

する。即ちほとほと(殆しく)に當る副詞は futa (ホダ)で、fudakashi とも na-fuda ともいひ、危く・危いこと又はもう少しのところでの義を有つてゐる。その用例は fuda shinutaru 又は fudakashi shinutaru で、何れも危く死ぬところであつた、といふ意である。琉球語では、國語の「ぞ」に當る du で掛る時には、連體形で結ぶことになつてゐるのに、右の動詞が *z* なくして連體形で結んでゐるのは、その下に *ya* といふ感歎詞が省かれてゐる爲で、終止形の場合よりは一層力が強くなつてゐる。

Fufufutā-shun [ホトホト・ス] ぶる／＼震へるの義。*Fufufuta* は、寒い時驚いた時怒つた時などに、震へる形容である。その同義語には、*cutagata* がある。そして國語の *たがた* に相當する語には、*gachigachi* があるが、寒さ又は恐怖に戦いて、上下の齒をしかと合すことが出来ないことで、齒の根が合はないといふことには、*gachigachi furuyun* 又は *gachigachi shun* といつてゐる。兎に角、この *fufufuta* の語尾が一寸長くなつただけで、前項の *fufufuta* と概念が甚しく違つて了つた所を、注意して頂きたい。序にいふが、ぶる／＼震へるには、*futyun* ともいふ。琉球語では、母音の長短は、語頭にあると語尾にあるとの別なく、重要視すべきもので、其の開合や子音の清濁と共に、語義に大なる變化を與へるのみならず、語尾に現れる *a e o* の長母音は、語法上の役目をさへ勤める場合のあることを知らなければならぬ。

Mushi-futyun [ムシ・ホル] 生臭い物を嗅いで、腹の虫が躍るの義。下の *futyun* が *fufufuta* の *futa*

の活用したものであることはいふまでもないが、單獨に用ゐられることは、殆ど無いといつていい。この言表しは、普通餘りの欲しさに病氣みたいになるにいふが、美人などを見て頻りに心の動く義にも轉じてゐる。

Futyi-mē [ホトリ・マヒ] 欲しいものを是非自分のものにして、それに附纏うて舞狂ふことの義。前の動詞的言表しと見て差支ない。*Futyi* は *futyun* の名詞形 *futyi* の變形である。

Hatahata-shun [ハタハタ・ス] 何かやらうとして、あせる義。實行の手段などもいろ／＼考へるといふ言語情調が伴ふ。これには、*fufufuta-shun* が有つやうな *パッショネート* な所はない。例、*nokizuku ssa ndi hatata-shun* (金儲をしようと思つて、鵜の目鷹の目になる。)

Shimachabi [シマ・チャビ] 島痛。孤島苦を意味する古語か。『混効驗集』には、「しまちやべ、島勞ならん。勞は慰と註す。杜預曰。勞者効其勤以答之。又諸侯相朝。逆之以饗饋。謂之効勞」とあつて、之を尙眞王の中央集權以前に、時を定めて、「首里親國」に參勤した、三山の按司部(諸侯)を慰勞した事の意に解してゐるが、孤島苦故に起る疲弊の義に取るのが、穩當のやうに思はれる。同書の序に、島津氏の琉球入り以後、琉球語に一大變化がおこつて、慶長以前の言葉が「みさせるの言葉」(神託の義で、形式化)と稱せられる程、解しにくくなつてゐる、といつたやうなことが見えてゐるから、この語は當時廢語の部類に繰込まれてゐたのであらう。

かうして二つの解釋が可能である場合に、その何れが當を得てゐるかは、同類型のいくつかの用語例に當つて見た上でなければ、判斷を下し得ないのであるが、同書に「おぎもちやべ、御肝勞の心ならん。きもちやべ」とあるのが、いゝ手がゝりである。「おぎもちやべ」も亦耳遠くなつてゐたと見えて、斷定はしてないが、「心痛み」の轉訛であることが一見してわかるので、御心勞の義に解してゐる。この同構造の語から類推しても、「しまちやべ」に「島痛み」の義のあることは、明かであるのに、編者はそこに氣がつかなくつた。なほ又現今の口語に、經濟的に痛手を負ふを、*ichaba iyun* とつてゐるのも、注意すべきことだ、*ichaba* は *ichabi* (痛み) の轉訛と見るべきものだから、「しまちやべ」を孤島苦に擬することの、強ち無理でないことが知れよう。今一つ他をいたはるといふ固有な言表しがあつたかどうかを調べて、之を對照して見る必要もある。同書に「きもちやさ、肝痛させ。痛腸の心也。句双紙に涙出痛腸」と出てゐるが、他のあはれを見て、心の痛む状を言表したもので、己の事で心を痛めることを意味する「きもちやべ」が、動詞の名詞形であるに對して、これは、接尾辭の「さ」を有する形容詞の名詞形だから、この點からも二語は容易く識別される。戯曲大川敵討の滿納の詞中に、「あゝ、恐しやも知らぬ、申上げやべすが、拷問しゆる事のおぎもちやべあらば、云々」とあるが、このおぎもちやさには、憐愍・心苦しい・氣の毒等の義がある。今日の口語でも、*chimu ichasa nu, nda ran* (氣の毒で、見て居れない) といつてゐる。オモロにも、「我が戀人の厭で置ちやる名護の浦、たゞ一人やたもの、思ひはのきもちやさ」と見えてゐるが、このきもちやさには、心苦しい若しくはせつないの義がある。それから、「きもちや女按司」「きもちや親の娘」などの用例もあり、このきもちやは慈愛深きの義で、限定詞

になる場合には、接尾辭の「さ」のないのが、オモロの慣用例である。尙眞王が三山の諸侯を慰勞したことは百浦添之欄干之銘の語る所であるから、當時之を言表はす語があつたとすれば、右に擧げた用語例などから類推して「しまちやさ」でなければならぬが、この語は古典中にも見出されず、又方言中にも遺つてゐない。しかし、さう考へるに都合のいゝ例が、たつた一つ民間傳承中に見出される。第一尙氏の最後の王尙徳が、うつゝをぬかしたといふ、久高島の「くにちやさの祝女」の事は、人口に膾炙する所だが、このくにちやさは固有名詞ではなく、恐らくこの美しい祝女の修飾辭であつたらう。これは「國痛さ」の轉訛したもので、「國王を勞はる事」の意に解されるから、王が國家的祭典を營む爲に、久高島に渡海した時、かいつくしくも御公事を勤めたので、この傾國の神女に對して、王親からが與へた讚辭か、さもなければ一行中の誰かの口から出て、いつしかその名として傳られたに違ひない。オモロの語彙中には、「國知り」に對して「島知り」があり、「國襲ひ」に對して「島襲ひ」があるから、古代琉球語に、「くにちやさ」に對して「しまちやさ」があつたと臆測しても、差支あるまい。従つて「しまちやさ」は郊勞の義に用ゐられ、「しまちやべ」は國難の意に用ゐられた、と考へることが出来る。但、前者は文献などに出てゐないから、斷定はしかねるが、後者はあつて古代語の辭書中にも出てゐるから、實際使用されたと見ていゝ。残る問題は、いくさよう(戰亂)・よがわり(革命・代朝)・やまといり(島津の琉球入り)・にがよう(凶年)等の語とどういふ關係があるか、といふことだが、それについては、更に文献の徵すべきものがない。

Uttayi-mōtayi〔ウツタリ・マウタリ〕道行きなどの場合に、別に怠ぎもせず、あちこちながめながら歩くさま。國語の一人で鼓など打つわざと舞とを兼行ふ義の「打つたり・舞うたり」から轉訛したものであらう。ゆつくりやつてくるといふことを uttayi-mōtayi sshi chūn といつてゐる。琉球には室町時代に千秋萬歳を祝する藝能が渡來してゐるから、この語などもこれらの下級宗教家によつて輸入されたと見ることが出来る。琉球語の音韻變化の法則に従ふと、これは utchayi-mōtayi になるべき筈なのに、殆ど原形のまゝで遺つてゐる爲に、今日の琉球人には uttayi に打つたりの義のあることがわからなくなつてゐる。

Michi-uchi 主として夜分など近い所を散歩することの義に使はれてゐる。年取つた人たちは今でも「さあ、そこらを一寸散歩しよう」といふことを、di, urika michinichi shi ga といふが、稍耳遠くなつてゐる。馬に乗つて道を行くことの義を有する國語の道打みちうちから來た語のやうに思はれる。

Mezike〔マヘヅカヒ〕軽い要事で彼と是との間に往復する使ひの義で、これは大抵子供がやる。Mezika といふ指小辭を語尾に附ける場合が多い。萬葉の「玉ぼこの道をた遠み間使もやる由もなし」のまづかひと同じ意味の語である。

Uru〔ウロ〕足りないの義。嚴密にいふと、動作の足りないことである。接頭語として用ゐる、或は語尾に

をつけて状態をあらはす形容詞にすることがあるが、單獨に用ゐられることはない。國語のうる覚え・おろ／＼・おろか・おろそか等と同語根の語であらう。食物などの煮方が足りない時に、hi urusa (hi は hi の口蓋化したもおろか・おろそか等と同語根の語であらう。又は uru hi といひ、之を疊語法にして、urhi-namahi ともいふ。萬曆十七年に、倭寇を防いで功のあつた明の侯繼高が『全浙兵制』の附録「日本風土記」(編者不明)に、煮不熟を和六尼也打と音譯してあるが、この言表しはことによると今の九州方言中に見出せるかも知れない。「菊地俗言考」にも「おろ能ひ物、尼の申しきを云詞なり。淤呂は忽おろそかのオロと同意」と見えてゐる。子供などが制しても聞かすにいたづらをして怪我などをした時、urusa du aru といふことがあるが、「それでは足りない、もつと怪我するとよかつたのに」の意である。其他、ninji-urusa (この ni は口蓋化しないもので國語にないもの睡眠不足)・hatarachi-urusa (働くのが足りなさ)・zimbun nu urusa (思慮が足りない)等の言表し方もある。狂歌に「走馬はりま乗り召しやうち、何で足あしつまず。乗のゆる思里おもさとが鞭むちのうろさ」といふのがある。(走馬は情婦の義で思里はいとしい人の意である)。八重山の民謡「あかまたあ節」に、「おる躍りしよて、どなさがるな」といふ句があるが、これは下手へたな躍りをして笑はれるな、といふことで、このおるも未熟の義に用ゐられてゐる。

Yagumisa 恐縮の義。琉球古語の辭書『混效驗集』には、「やぐめさ、恐多と云事」と見えてゐる。お(御)を前に附けて、おやぐめち (yagumisa) とすることもある。この敬語の u が ya と合する時は、例外なく「we」若しくは「w」(w は兩唇的摩擦音の w に喉頭破音の伴ふ音である。この音の伴ふ子音には、外に m n y 等があ

る。)になるが、かうして唇が閉じたところへ、mが後にひかへてゐる爲に、³²は忽ちにmに同化されてmとなり、遂に³³wemmisaといふ形になるので、原形は殆ど失はれて、別語のやうな觀を呈してゐる。前掲書には又「おやむめさ」とうと、恐憚り尊ぶ事」といふのもある。今でも巫女は神に對して能くこの句を用ゐるが、³⁴wemmisa 又は ³⁵wemmi といふ語は、今なほ一般に使はれてゐる。即ち前者は悪かつたの義に用ゐられ、後者は喧嘩などして負けた時、³⁶参つた義に使はれて、いつしか降参の同義語ともなつてゐる。それから、恐多い事だが、³⁷wemmisaganaga といつてゐるが、舊藩時代に四書の講釋をする時、「則」をさう譯してゐたといふから、それから異なつた意義の派出してゐたことも知れる。とにかくこのやぐめさといふ語はオモロ時代には盛んに使はれた。一例を挙げると、「かねぐすくのろ(兼城の祝女)の、守り給るおとまさり(人名)、やぐめさ日本戦寄せらや」といふのがある。又戯曲「忠臣身替」にも「やぐめさど有すが、願よ申上けら」といふのがあり、琉歌にも「打ち鳴らす竹の音に紛れてど、恐多も知らぬ、御側寄たさ」といふのがある。オモロには、「さ」を取つて、「やぐめ」(畏敬する人)といつたやうに、使はれてゐるが、宮古八重山の民謡にも、「やぐめ目指」(目指は職名)又は「やぐめ親」といふことがある。その語源は判然しないが、やぐさめ(寡婦)・やぐさぐわ(獨息子)のやぐさと共に孤獨の義を有して、國語やぐさとも縁を引いてゐるのではなからうか。ひつそり(寂寞)を yaguyagū-tu とつてゐるのも注意すべきことである。

Kitayī-kūtayī 「ケツタリ・クウタリ」ですいらすの義に近く、出入、損得、過不及などの無いことである。

轉じては病氣が良くなつたかと思ふとまた悪くなつて、いつも同じ状態にあることの義にもなつた。キツタイは勿論蹴つたりの義で、クウタイは食つたり又は銜うたりで、活計をなすの義である。kuri tu kiyun (之と抵觸する)とか nito kiran (それとは抵觸しない)とかいふ言表はしがあり、又 tsō nu kyun (都合がく)とか mi kwashun (計算が合ふやうにする)とかいふ言表もあるから、この二語の複合して出來た疊語法にですいらすの義のあるのはいふまでもない。近頃沖縄で出版された桑江良行氏の「標準語對照沖縄語の研究」に、著書はこの複合語を kitayīkurnehayī (けつたりぶつたり)の同義語と解してですいらすの義を有する那覇の商用語を首里人が誤り轉用したものだとしてゐるが、私が調査したところによると、首里市の中央部(即ち當藏・大・中・桃原・島小堀・汀志良次等)でも、やはり那覇同様の義で使はれてゐる。但、其處でも年若い人達にはこの語を全く知らない者が多く、場末の「三ヶ」あたりへいくと、年取つた人でも知らない位だから、耳遠くなつてゐるといつてもいい。今暫らくしたら多分死語の部類にくりこまれるであらう。その第一義の同義語には yarashi kwashi といふのがある。著者は之も首里方言にのみあると思つてゐるやうだが、これなどもかなり廣い範圍にわたつて使用されてゐる。

Sageshun 限無く探すの義で、sageshun (探す)から分化した語である。廣い母音のaを狭い母音のoに替へて、もつと綿密に探すの意を言表したもので、近代フランスの化學者が sulphate を sulphite に nitrate を nitrite に替へて、その細かい母音で化學作用の弱いものをあらはしたのと同様ないき方である。二百年前に

出来た戯曲「執心鐘入」には、「寺内をさがち遭はね恨めしやに、鬼になて鐘にまとひ附ちやる」といつたやうに、さがしゆんといふ形が使つてあるが、近代の戯曲にはさういふ所には大方 *see-sun* が用ゐられてゐる。この形は恐らく近代になつて發達したものであらう。自分などもこの二形をはつきり使ひわけてゐる。

Yakara 偉い又は偉い者の義。轉じては圖太い又は圖太い奴の義ともなつた。「南島八重垣」の著者故山内盛熹翁は「やから、識量ある人也。和語一族兄弟の意なれども、本土の俗語は違へり。昔、薩摩の使者島津族といふ人、本土に在番奉行してありけるに、徳義盛んにして大に國人の望を繋ぎたりとて、其人歸郷の後も愛慕して、人の識量あるをば族殿に類すといふより、普通の語となれりとぞ。近頃ひづりて(訛りての義)狡猾なる人をやからといひのゝしる場合あり」と言はれたが、これは一種の民間語源説かも知れぬ。鬼界島は島津氏の琉球征伐後間も無く琉球から分離した所であるに拘らず、島民はやはりこの語を使つてゐて、やんちやの義に解してゐるから、其の古くから南島で使用されてゐたことは明である。とにかくこの語は國語のやからと關係のある語には違ひないが、國語の場合のやうに、一族若しくはともがらの義は更でない。試みに戯曲の中から一二の例を出して見よう。「女物狂」に「いやくやから者よ」とあるのは人盗人についていつてゐるから、圖太い奴の義である。忠孝婦人の「村原が何とやから者やても、網の魚ごころ唯一人者のこへな御城に弓引きのなゆめ」のやからものは偉い者の義である。口語では十中八九までは、異人又は腕利きの意味に使はれてゐる。

Yakari 「ヤカレ」やかましい、うるさい、むづかしい等の義を有つてゐる。これは *sagashun* が *sagashun* から分化したやうに、*yakari* から分化して、其の細かい母音で綿密な性質を象徴したもので、其の偉さが細かい意味に變じたものである。「執心鐘入」の「やかれよも座主が隠めたる若衆、留守ならば互に語る嬉れしや」のやかれはやかましやの義で、遊女よしやの歌「稻の穂もあらぬ、粟の穂もあらぬ、やかれよもどや(雀の義)が、かゝりすがり」のやかれはうるさいの義である。この語はもう死語になつてゐる。

Wōgayun 人の弱點に乗じて、突上がるの義。これは康熙二年の琉球國王の即位式の時、正使張學禮と共に渡島した副使王城が琉球政府の弱點に乗じて莫大な金員をせしめて歸つてから、其の氏名を語根として造語した動詞だと言はれてゐるが、野次といふ人名からヤシルといふ動詞が出来たいきさつを知つてゐる人は、なるほどとうなづくであらう。この語が突上がる又は増長するを意味する *negayun* (舞上る) から類推して造語されたことは疑ふ餘地がない。琉球人は今でもかうした造語を盛んにやつてゐるから。

Danjamayun じつとひつかまへるの意。 *damayi* (黙り) と *kagamayun* (屈まる) との複合語の轉訛したもと思はれる。へこたれるといふ概念を少しも有つてゐないのみか、却つて胸に一物を藏して機會を狙つてゐるといふ言語情調の伴ふ面白い語である。だが、この語は韻文では一つも使はれてゐない。「忠孝婦人」の「間の

者」の詞(口語體)には、「やつさ、主。家付ぬ犬の網切つちや様なもの。一方引きなてだんぎやまて居すん付いてや、やがて逃げすまぢ、討返される筈」とあるが、普通の談話の場合にも、この通り使はれてゐる。

Uguniyun 病氣が再發するの義。Ukuriyun (起る)から分化した語で、無聲子音のkを有聲子音のgにすげかへただけで、かうした特別の意義をあらはしたものである。

Geyun 還俗するの義。Ke'yun (還る)から分化した語で、前と同様清音が濁音に代つただけで、特別な意義が生じたのである。其の名詞形 *geyi* には還俗又はさうした人の義がある。

「寂しさ」を表現する四語 言語は發達するにつれて抽象或は一般概念を表現する力が漸次増加し來るもので、まづ最初はどこでも具體的特殊なものを表現するとは、言語史の語る所である。一例を挙げると、「寂しさ」といふ状態にもいくつかの階段又は種類があつて、國語では各状態に共通する概念を抽象して、之に「さびし」といふ單語を與へ、個々の差異は接頭語若しくは副詞をつけて限定するに反して、琉球語では各状態にまるで異つた單語を與へて之を表現することである。即ち軽い意味のさびしさは *sabisha* うごさびし *shika* *rasha* 話相手があるない時のやるせない寂しさは *kukuiru* 戀人を待つ時の又は稚兒が母を待つ時のさびしさは *urachirasa* (心切の義)といつてゐる。かうした例はオモロの中にもかなり見出せる。かういふ具合だから、琉球語は國語に比較して所謂副詞の数が少いわけである。其他、平安朝時代の言語に見る如く、二個の動

詞の複合して、下なる動詞が副詞の役をつとめるのがざらにあるが、所謂副詞の餘り發達しなかつた原因の大部分はそこにあるといつて差支ない。琉球人が國語を操るに當つて、副詞の用法に困難を感じるのは専らその爲である。近頃かうした語を使ひわけることが困難になつた結果、自然國語の副詞などを借用して用を辨する傾向が生じたのは面白い現象といはなければならぬ。

Uchi-toshun 「ウチ・タフス」 Uchi (打)は接頭語で、それで、*toshun* (倒す)を強めてゐる姿になつてゐるから、一見、打ち倒れしむの義がありさうだが、國語の「打倒す」とは全く違つた概念をあらはす語である。病氣が重くなつて、床に伏したきり、自分では起ることが出来ない状態にあるの義で、危篤になつてゐるといふほどの強い意味はないが、なほる氣遣ひはないといふ言語情調が伴ふ。自動的の言表したから、*uchi-toriyun* とした方が論理的であるのに、*toshun* といふ他動詞を用ゐて造語したものが、自動詞になつてゐるから妙である。序でにいふが、打倒すを意味する動詞は、*tatoshun* である。稀に *tatatoshun* といふのも耳にするから、其の接頭語は *tatachi* (叩)の縮まつた形のやうに思はれる。

Ammasa 氣分の悪いこと。語源はわからない。語尾に *sa* (有り)を附けて、*ammasan* にすると、氣分が悪いの義となり、*shun* (爲)を附けて、*ammasa-shun* にすると、卒倒するの意となる。それから *ammasa-tagayun* といふ語があつて、*ammasan* よりは意味が強く、たゞ何となく氣分勝れず、不快な状態が數日も續くにいふ